

平成 17 年

神奈川県感染症

平成 18 年 11 月

はじめに

近年、国際的な交流はめざましく、ウエストナイル熱、SARS、鳥インフルエンザなどの新興感染症、結核やマラリアなどの再興感染症対策の取組みが大きな課題となっております。

平成 17 年は、神奈川県内においては、幸いにも、大きな感染症の発生事例はありませんでしたが、当所においては健康危機発生時の対応を含め、感染症対策の充実に努めております。

『神奈川県感染症』は、横浜市衛生研究所、川崎市衛生研究所、横須賀市健康科学センター、相模原市衛生試験所の協力をいただき、本県における感染症発生動向調査、微生物検出情報、関連調査及び研究報告等を収録したものであります。

平成 17 年版では、週報及び月報は、横浜市及び川崎市の発生動向も取り入れた神奈川県全県の動向を、また、各感染症毎に神奈川県全県の概況を記載しました。

感染症対策の実施にあたり参考にして頂ければ幸いです。

最後に、『神奈川県感染症』の作成にあたり、関係各方面の多数の方々から、貴重な研究資料をご提供いただきましたことを厚くお礼申し上げます。

平成 18 年 11 月

神奈川県衛生研究所長

今 井 光 信

目次

はじめに

感染症発生動向調査	
1 全数把握対象疾患	1
2 週報対象疾患	5
3 月報対象疾患	15
ウイルス性感染症	
1 インフルエンザ	
(1) 概況	19
(2) インフルエンザの動向 (神奈川県)	20
(3) インフルエンザの動向 (横浜市)	21
(4) インフルエンザの動向 (川崎市)	26
(5) インフルエンザ感受性調査 (神奈川県)	27
2 エイズ	29
3 ウイルス性感染性胃腸炎	
(1) 概況	30
(2) ノロウイルスによる集団胃腸炎の検査結果 (神奈川県)	30
(3) ノロウイルスによる集団胃腸炎の検査結果 (横浜市)	31
(4) ノロウイルスによる集団胃腸炎の検査結果 (川崎市)	32
(5) ノロウイルスによる集団胃腸炎の検査結果 (横須賀市)	32
(6) ノロウイルスによる集団胃腸炎の検査結果 (相模原市)	32
4 ウエストナイル熱	
(1) 概況	33
(2) ウエストナイル熱媒介蚊のサーベイランス (神奈川県)	33
(3) ウエストナイルウイルスのサーベイランス (横浜市)	34
(4) ウエストナイル熱媒介蚊のサーベイランス (川崎市)	35
(5) ウエストナイル熱媒介蚊のサーベイランス (横須賀市)	36
5 その他のウイルス性感染症	
(1) 日本脳炎	
ア 概況	37
イ 神奈川県 (横浜市・川崎市・横須賀市・相模原市を除く) における 日本脳炎感染源調査	37
(2) 神奈川県 (横浜市・川崎市・横須賀市・相模原市を除く) における 麻疹抗体保有状況	37
(3) 神奈川県 (横浜市・川崎市・横須賀市・相模原市を除く) における 風疹抗体保有状況	38

細菌性感染症

1 腸チフス・パラチフス

(1) 概況	39
(2) 横浜市のチフス菌等のフェージ型別結果	39
(3) 相模原市のチフス菌等のフェージ型別結果	39

2 細菌性腸管系感染症

(1) 概況	40
(2) 散発下痢症からの病原菌分離状況（神奈川県）	40
(3) 海外渡航者からの病原菌分離状況（横浜市）	41
(4) 下痢症患者からの腸管病原菌検出状況（川崎市）	41
(5) 散発下痢症からの腸管系病原菌検出状況（横須賀市）	42
(6) 二類及び三類感染症発症者の家族等の病原菌検索（相模原市）	43

3 河川等の環境調査

(1) 概況	45
(2) 河川水腸管系病原菌調査（神奈川県）	45
(3) 腸管系病原菌検索（横浜市）	47
(4) 腸管系病原菌検索（川崎市）	49
(5) 河川水腸管系病原菌検索（横須賀市）	50

4 A群溶血性レンサ球菌咽頭炎

(1) 概況	52
(2) A群溶血レンサ球菌の分離	52

5 神奈川県域（横浜市・川崎市・横須賀市・相模原市を除く）におけるQFT検査結果

その他の感染症

つつが虫病	55
-------	----

～資料～

資料1 平成17年全数把握対象の感染症 保健所別報告数	57
資料2 病原微生物検出状況	
- 1 ウイルス検出概況	58
- 2 病原細菌検出概況	59
- 3 ウイルス検出状況	60
- 4 病原細菌検出状況	68
資料3 予防接種実施状況	71
資料4 神奈川県感染症機関一覧表	73

感染症発生動向調査

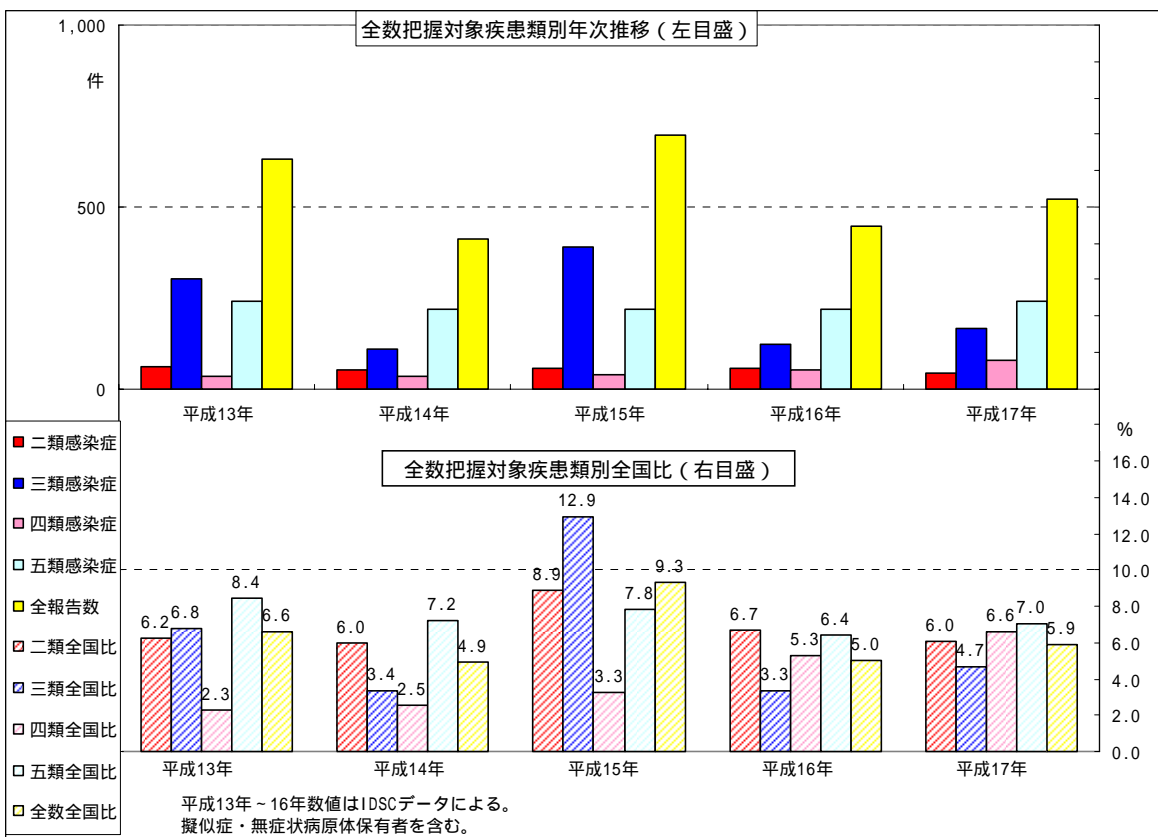
1 全数把握対象疾患

平成 17 年に県内で報告のあった全数把握対象疾患は 2 年ぶりに増加し、対前年比 17.5% 増の 523 件であった。一類感染症は平成 17 年も報告がなかった。

平成 17 年に最も多く報告のあった類は五類感染症で 238 件、続いて三類感染症 167 件、四類感染症 75 件、二類感染症 41 件であった。

平成 17 年報告総数の全国に占める割合は、前年の 5.0% から 5.9% へと高まった。最も割合の高かった類は五類で全国の 7.0% を占めた。

全数把握対象疾患の年別推移等は、資料 1「平成 17 年全数把握対象の感染症保健所別報告数」(57 ページ) を参照。



《一類感染症》

一類感染症の報告はなかった。

《二類感染症》

平成 17 年の二類感染症の報告数は、前年比 15 件減の 41 件で、直近 5 年間では最少の報告数であった。41 件中 22 件が横浜市での発生報告であった。コレラは 6 件、その内訳は県域 2 件、横浜市 2 件、相模原市 2 件であった。細菌性赤痢は 27 件の報告があり、その内訳は県域 4 件、横浜市 15 件、川崎市 4 件、横須賀市 2 件、相模原市 2 件であった。

腸チフスは横浜市で 2 件、パラチフスは前年と同数の 6 件の報告があり、県域 1 件、横浜市 3 件、

川崎市1件、相模原市1件であった。

また、海外渡航によるものが41件中37件であった。その他の二類感染症ジフテリア、急性灰白髄炎は、17年も報告はなかった(表1)。

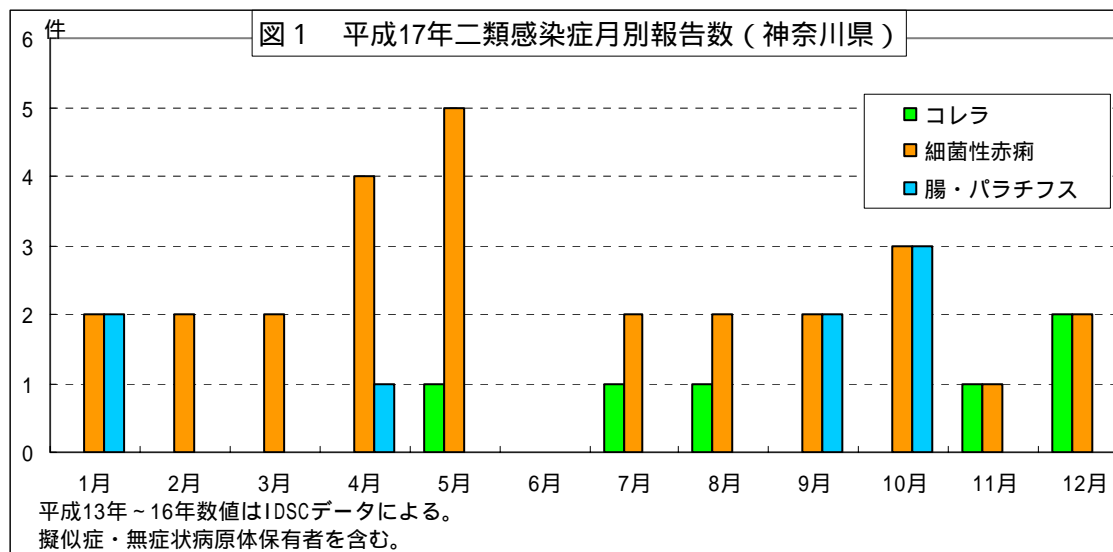
月別の報告では、6月はなく、5月及び10月にそれぞれ6件であった(図1)。

表1 二類感染症報告数 (件)

疾患名	平成13年	平成14年	平成15年	平成16年	平成17年						全国	
	神奈川県	神奈川県	神奈川県	神奈川県	神奈川県	うち海外渡航有	(県域)	(横浜市)	(川崎市)	(横須賀市)		(相模原市)
コレラ	2	3	3	7	6	4	2	2			2	55
細菌性赤痢	51	40	38	37	27	25	4	15	4	2	2	557
腸チフス	5	4	3	6	2	2		2				50
パラチフス	3	4	10	6	6	6	1	3	1		1	18
合計	61	51	54	56	41	37	7	22	5	2	5	680

平成13年～16年数値はIDSCデータによる。

擬似症・無症状病原体保有者を含む。



《三類感染症》

三類感染症(腸管出血性大腸菌感染症)は2年ぶりに増加し、前年比35.8%増の167例の報告があった。市・域別では、横浜市が76件で全体の44.5%、県域45件(全体の27.4%)、川崎市31件(同18.9%)、横須賀市9件(同5.5%)、相模原市6件(同3.7%)であった。全国では3,573件が報告されており、神奈川県は全国の4.7%を占めた(表2)。

表2 三類感染症報告数

(件)

	平成13年	平成14年	平成15年	平成16年	平成17年						全国
	神奈川県	神奈川県	神奈川県	神奈川県	神奈川県	(県域)	(横浜市)	(川崎市)	(横須賀市)	(相模原市)	
腸管出血性大腸菌感染症	300	107	388	123	167	45	76	31	9	6	3,573

平成13年～16年数値はIDSCデータによる。
擬似症・無症状病原体保有者を含む。

《四類感染症》

平成17年に報告のあった疾患は、把握対象30疾患中、前年より3疾患多い11疾患で、報告数も前年比25件増の75件で、4年続けて増加した。全国の6.6%を占めた。

レジオネラ症が前年比3倍増の19件の報告があり、大きな増加要因となった。E型肝炎が県域と横須賀市で、海外感染のウエストナイル熱が川崎市で、初めての報告があった。

市・域別では県域がつつが虫病の報告増により、75件中ほぼ半数の36件であった(表3)。

表3 四類感染症報告数

(件)

疾患名	平成13年	平成14年	平成15年	平成16年	平成17年						全国
	神奈川県	神奈川県	神奈川県	神奈川県	神奈川県	(県域)	(横浜市)	(川崎市)	(横須賀市)	(相模原市)	
15 E型肝炎					2	1			1		41
16 ウエストナイル熱(脳炎を含む)					1			1			1
17 A型肝炎				8	11	5	4	1		1	168
20 オウム病	5		5	2	1	1					34
22 Q熱	1				1		1				8
25 コクシジオイデス症				1	2		2				5
29 つつが虫病	9	6	10	19	22	22					345
30 デング熱	7	10	2	5	5	1	4				73
39 マラリア	7	11	12	8	10	1	7	1		1	66
41 ライム病		3	1								8
43 レジオネラ症	2	4	6	6	19	4	8	4	1	2	280
44 レプトスピラ症				1	1	1					15
合計	31	34	36	50	75	36	26	7	2	4	1,136

平成13年～16年数値はIDSCデータによる。
擬似症・無症状病原体保有者を含む。

《五類感染症》

平成17年に報告のあった疾患は、把握対象14疾患のうち、前年と同じ12疾患であったが、報告数は前年より22件増の238件であった。

疾患別では後天性免疫不全症候群が前年から17件減少したものの69件で最大の報告があり、続いてアメーバ赤痢が63件であった。市・域別では横浜市が全体の51.3%を占め、続いて川崎市、県域の順

であった。全国の報告数は3,341件で、神奈川県のおける割合は7.0%であった（表4）。

表4 五類感染症報告数 (件)

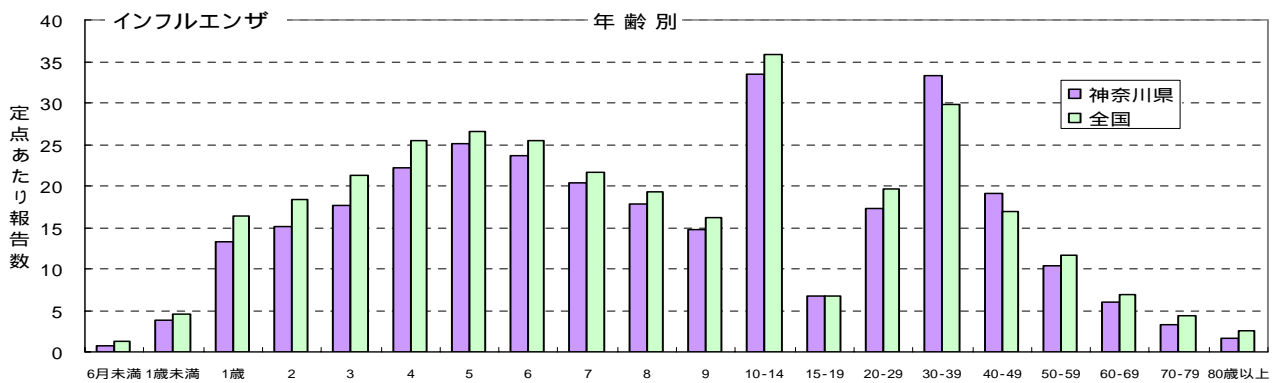
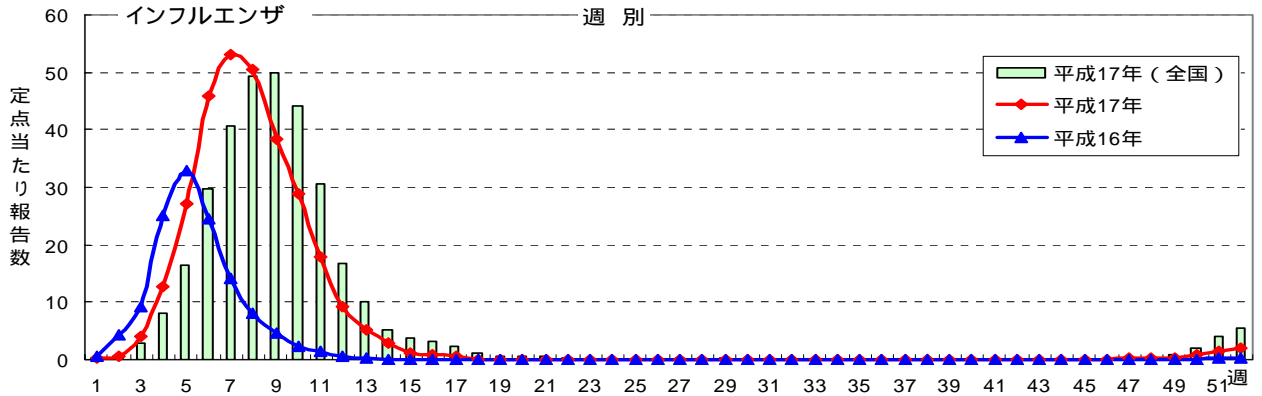
疾患名	平成13年	平成14年	平成15年	平成16年	平成17年						全国
	神奈川県	神奈川県	神奈川県	神奈川県	神奈川県	(県域)	(横浜市)	(川崎市)	(横須賀市)	(相模原市)	
45 アメーバ赤痢	42	42	48	52	63	4	48	7		4	680
46 ウイルス性肝炎	59	47	32	14	20	5	8	1	1	5	277
47 急性脳炎			1	2	4		1	1		2	180
48 クリプトスポリジウム症	4				2		2				9
49 クロイツフェルト・ヤコブ病	7	13	4	11	14	3	6	4		1	147
50 劇症型溶血性レンサ球菌感染症			1	5	3		2			1	60
51 後天性免疫不全症候群	82	70	85	86	69	16	28	16		9	1,161
52 ジアルジア症	13	11	20	9	24		19	4		1	81
53 髄膜炎菌性髄膜炎	1	2	5	3	1		1				10
54 先天性風しん症候群				1							2
55 梅毒	17	24	10	24	27	5	4	8	1	9	555
56 破傷風	5	3	2	4	3		1	1		1	114
58 バンコマイシン耐性腸球菌感染症	8	2	9	5	8	5	2			1	65
合計	238	214	217	216	238	38	122	42	2	34	3,341

平成13年～16年数値はIDSCデータによる。
擬似症・無症状病原体保有者を含む。

2 週報対象疾患（横浜市及び川崎市を含めた神奈川県全体）

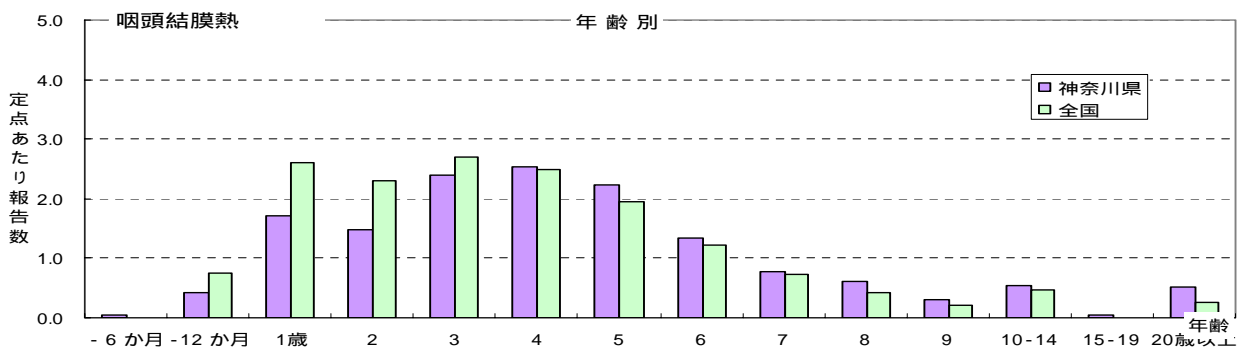
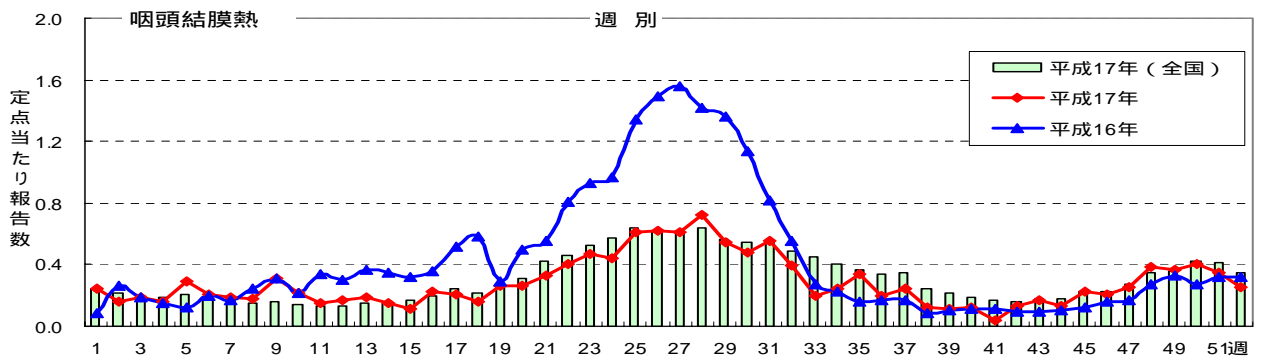
インフルエンザ（高病原性鳥インフルエンザを除く）

平成17年は、全国的には9週にピークを迎えたが、神奈川県は2週早い7週にピークを迎えた。年齢別では10-14歳、30-39歳の報告が多かった。



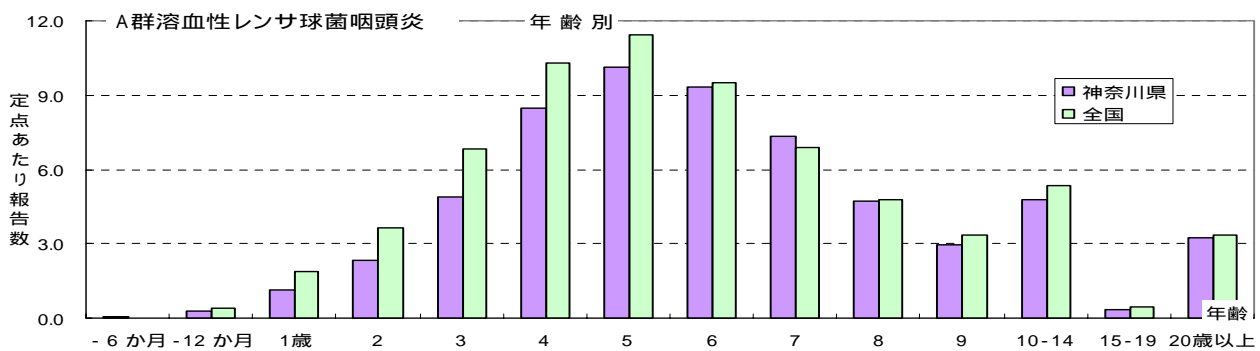
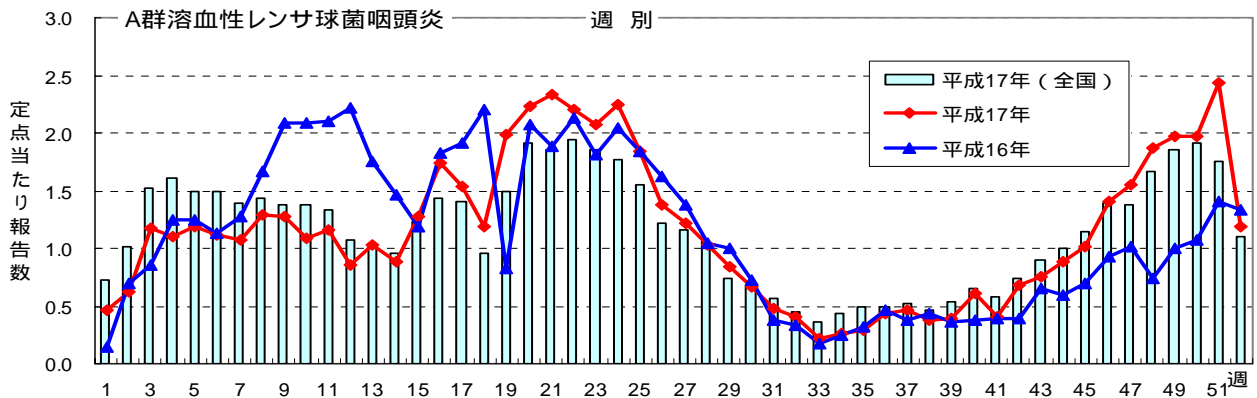
咽頭結膜熱

前年（平成16年）の半数程度の報告であった。年齢別では前年同様6歳以下に多くの報告があった。



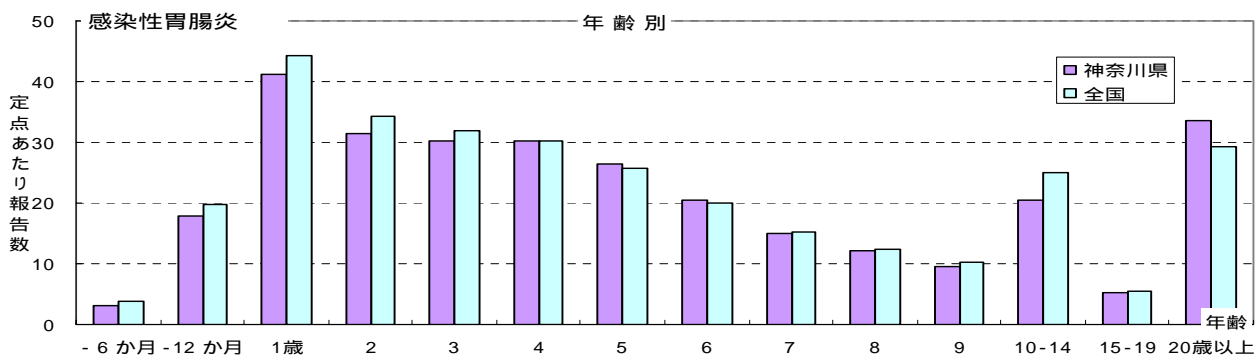
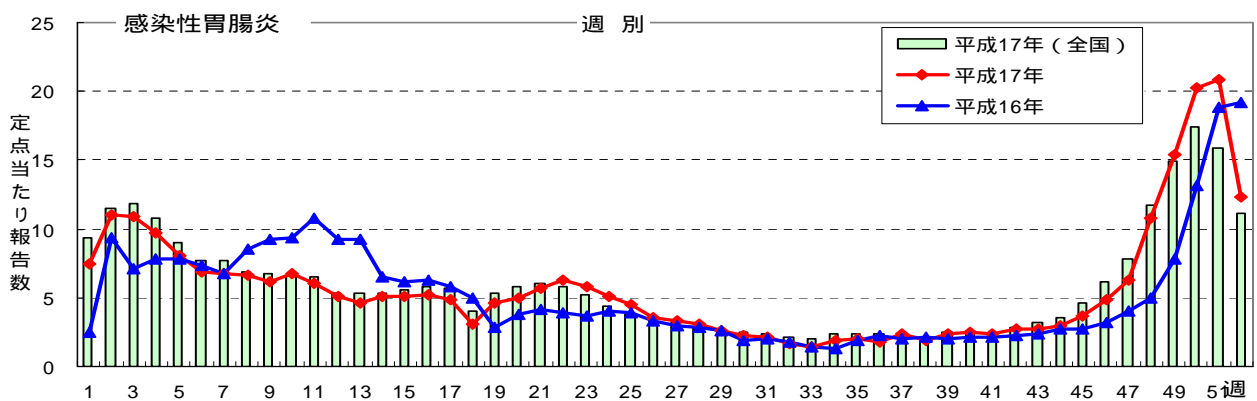
A群溶血性レンサ球菌咽頭炎

平成16年は9～12週、20～25週頃に流行となったが、平成17年は19～23週及び50～51週に多くの報告があった。年齢別では例年同様10歳以下でほとんどを占めた。



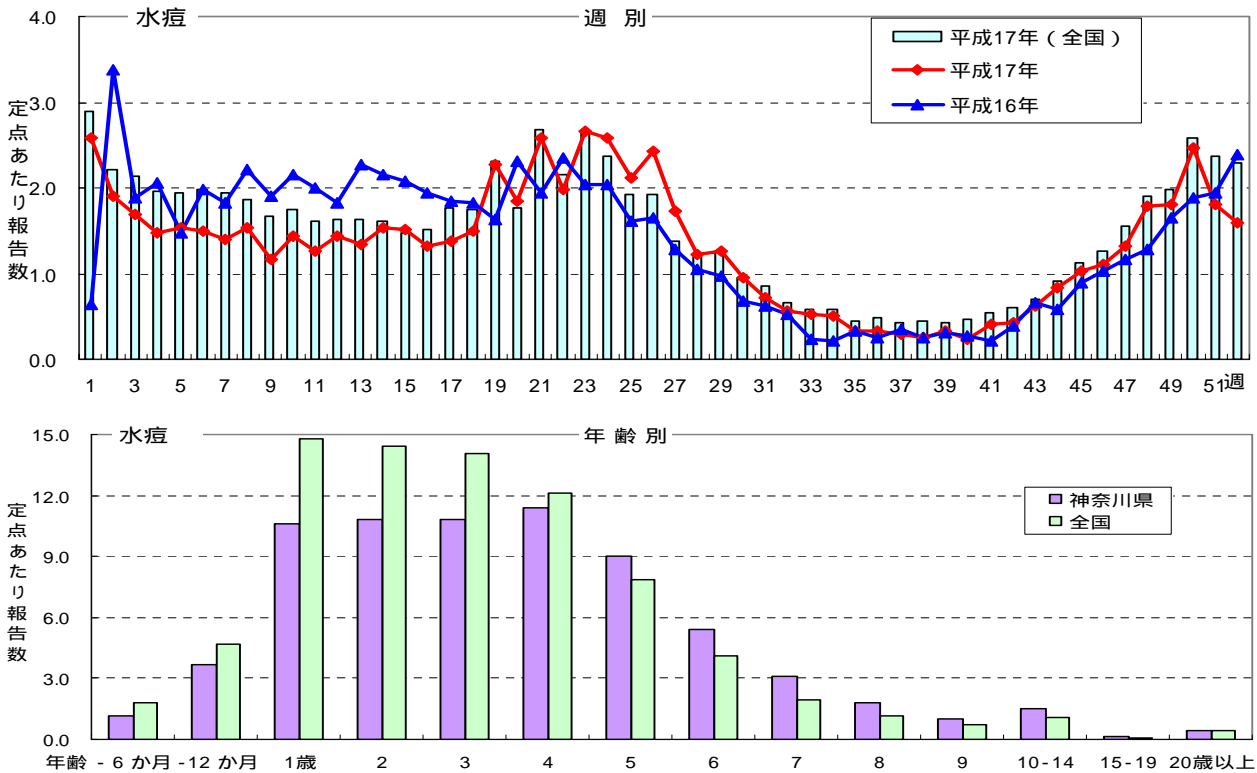
感染性胃腸炎

例年同様の傾向であるが、平成17年は45週以降前年を上回る報告となった。年齢別ではほぼ全国と同様であった。



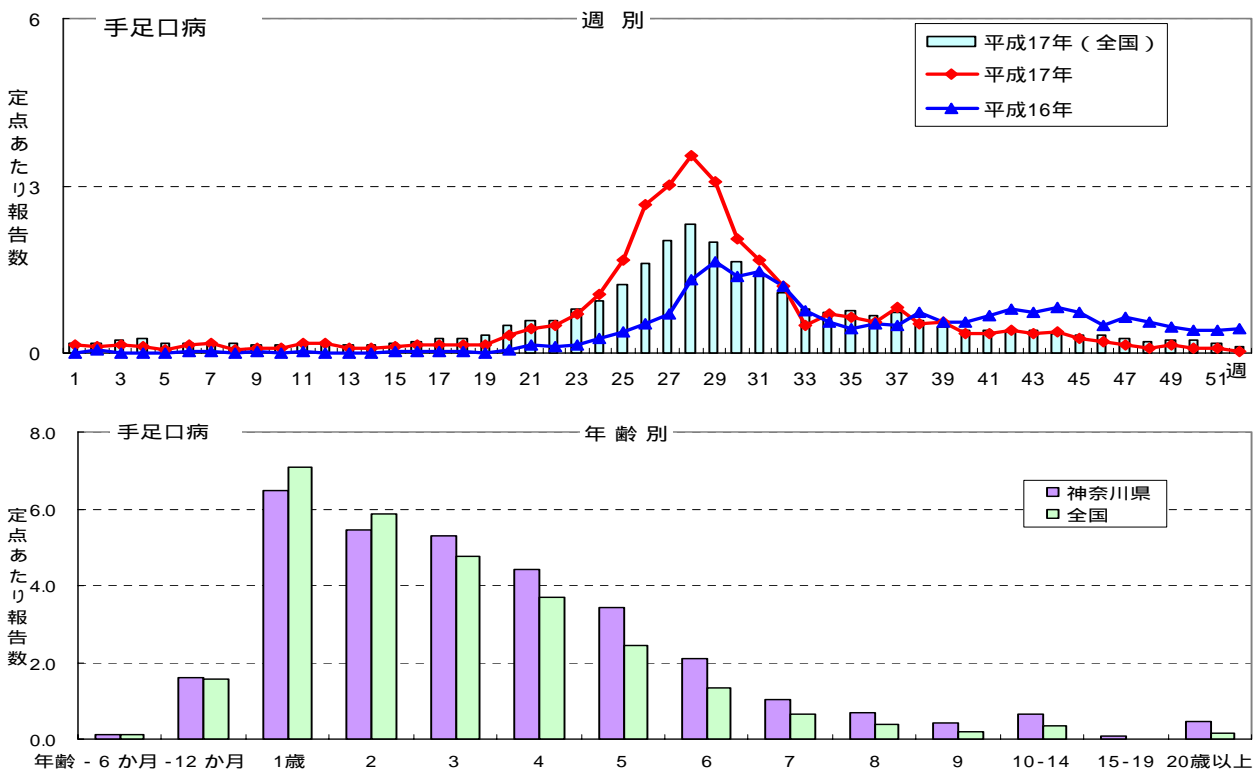
水痘

前半は前年を下回る報告であったが、後半はほぼ前年並の報告であった。年齢別では1~4歳の報告が多かったが、全国を下回った。



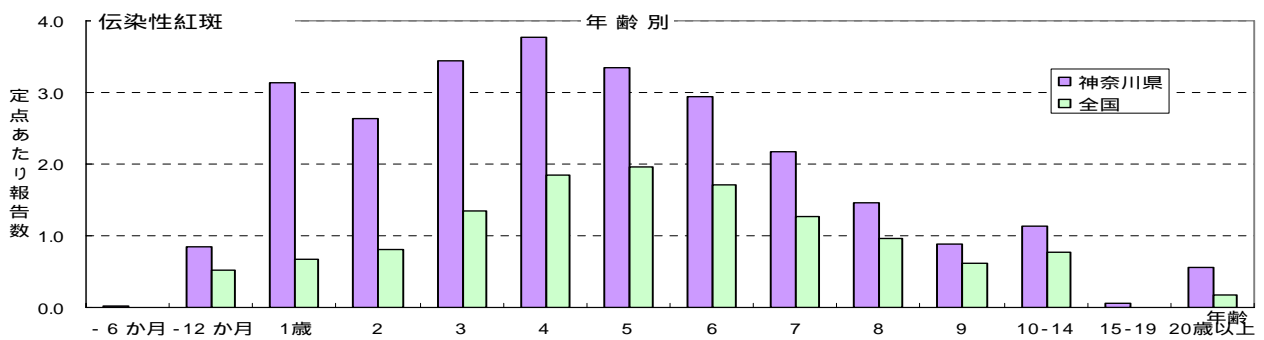
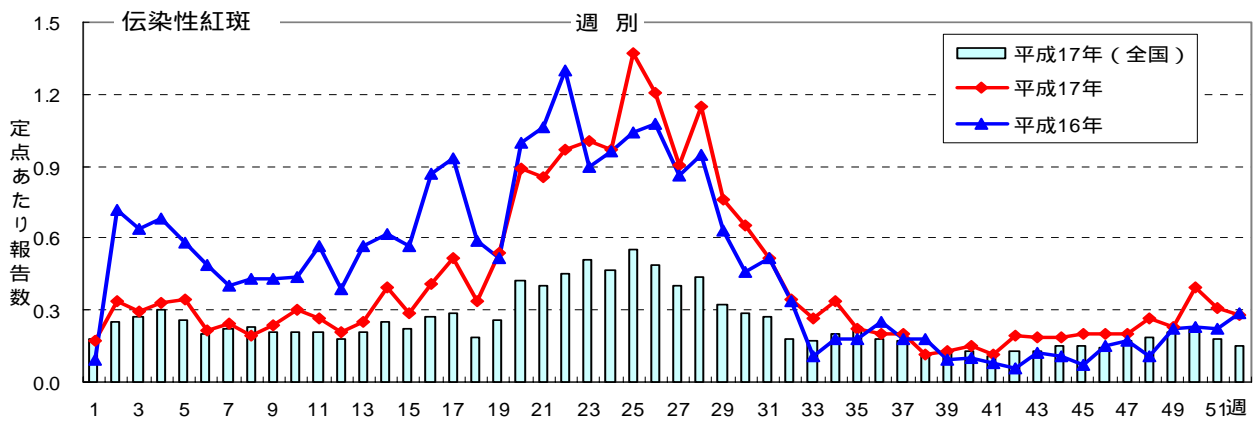
手足口病

全国と同様の傾向で推移し、19週以降前年を上回る方向となったが、38週以降は前年を下回った。年齢別では全国とほぼ同様の傾向を示した。



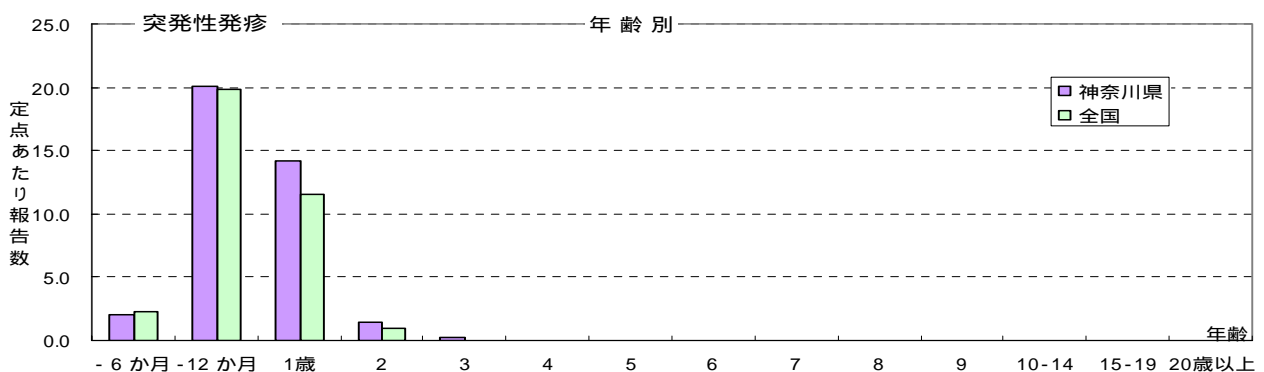
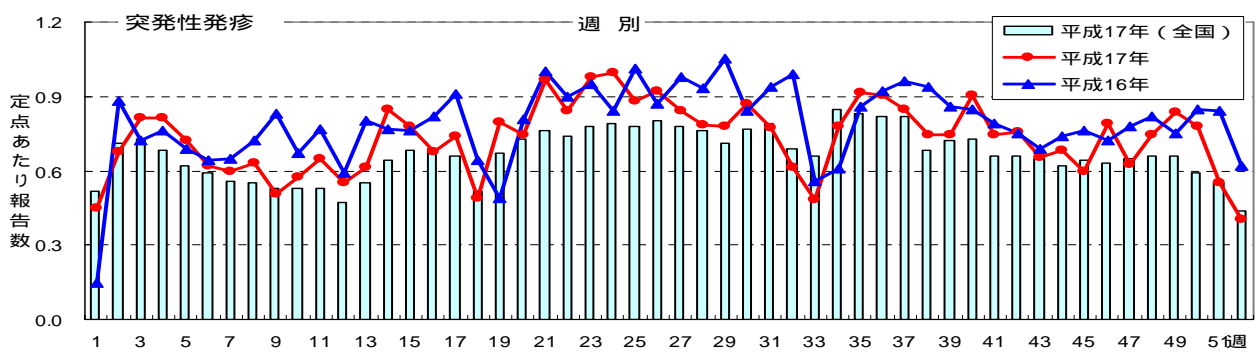
伝染性紅斑

前半は前年を下回り、また全国並みではあったが、19～31週は全国を大幅に上回る報告であった。年齢別では10歳未満に集中している。



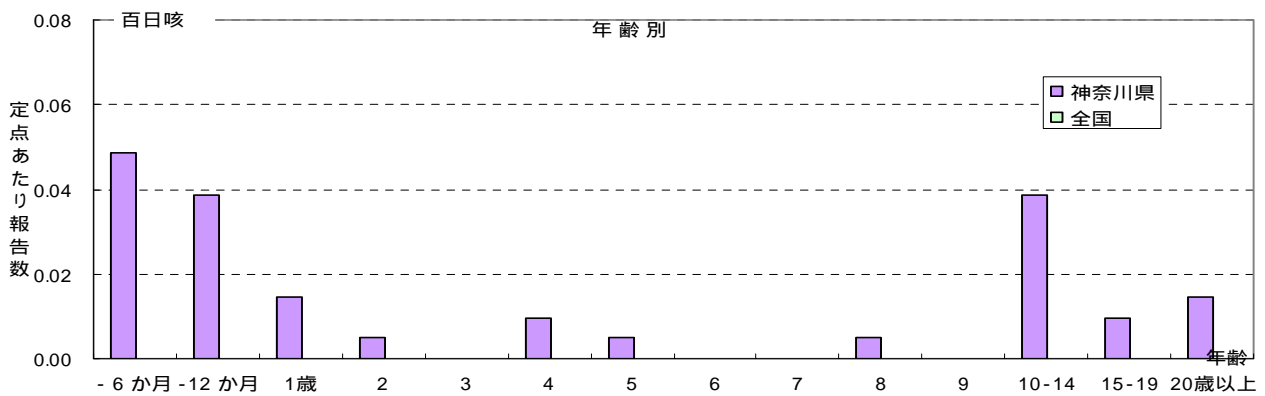
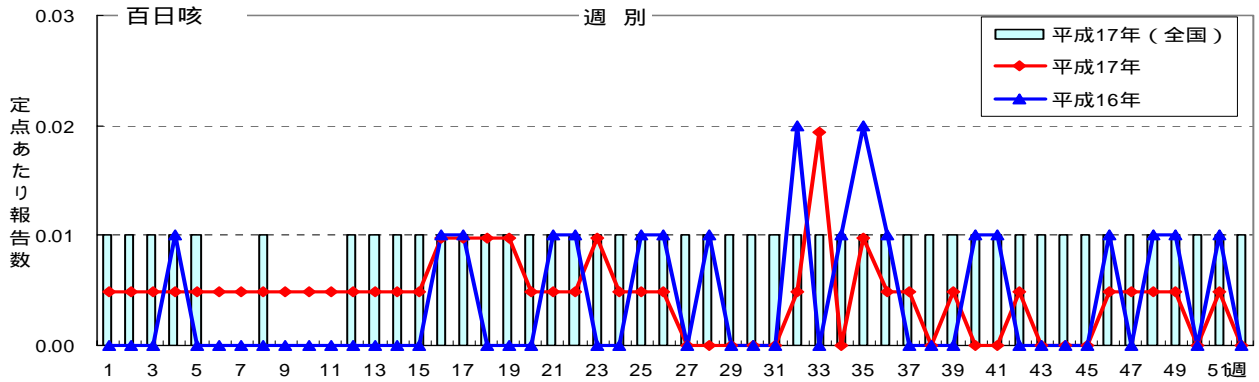
突発性発疹

ほとんど季節変動がなく、前年と同様の傾向であった。年齢別では1歳以下がほとんどである。



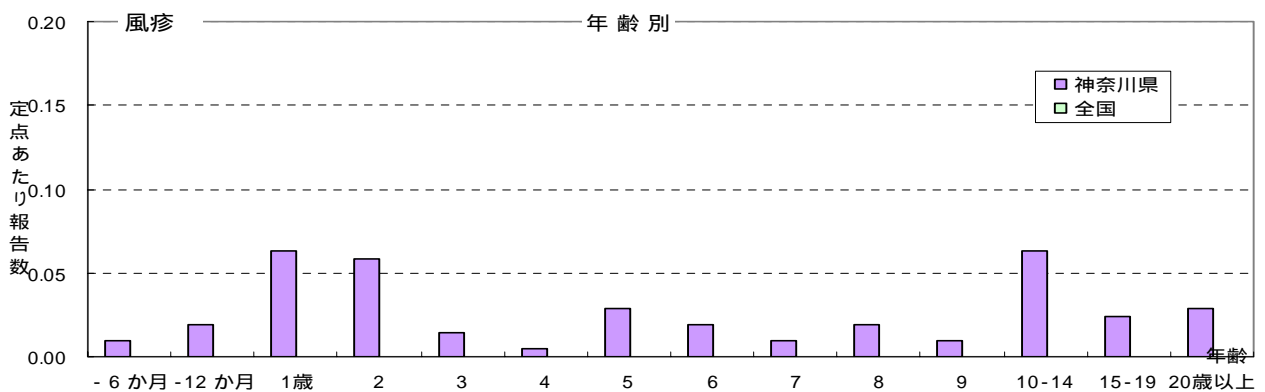
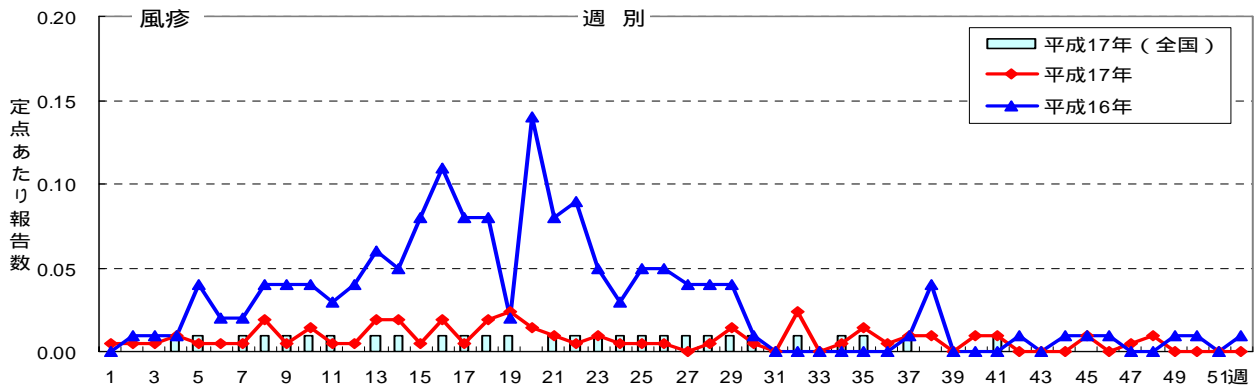
百日咳

年間を通じて散発的な報告があった。年齢別では1歳未満と10～14歳に多くの報告があった。



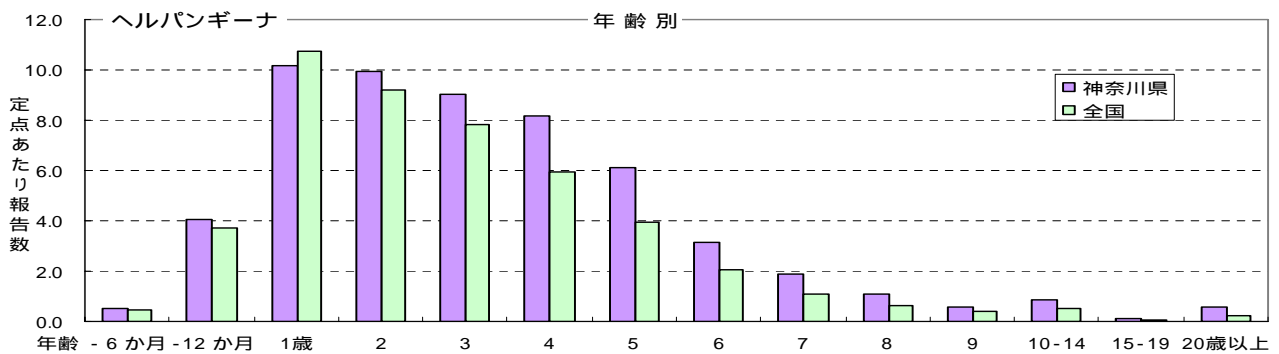
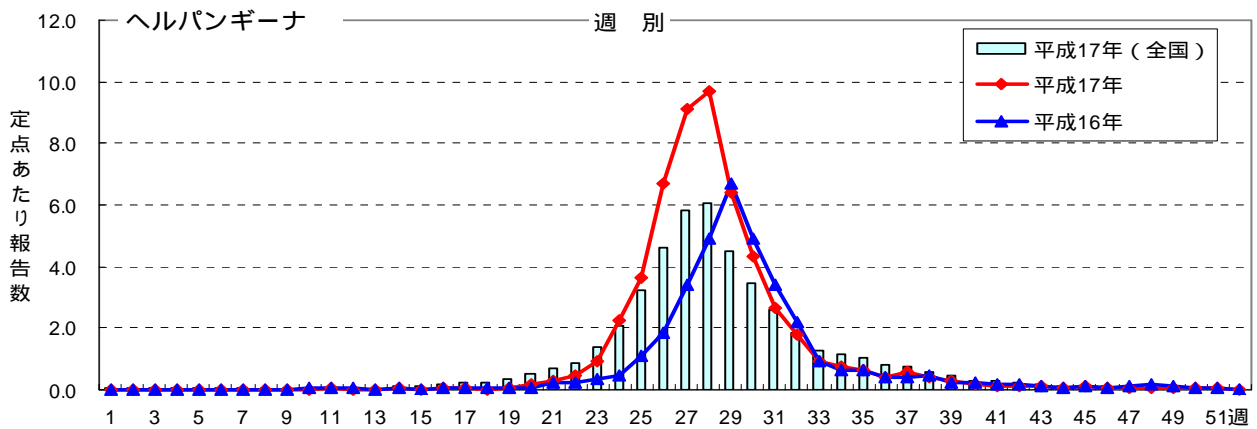
風疹

全国とほぼ同様の低位で推移した。年齢別ではほぼ全年齢層で報告があった。



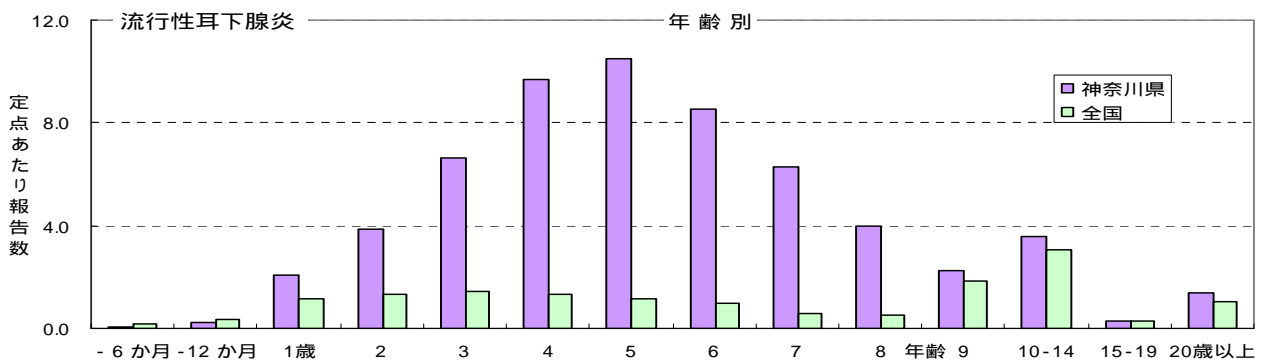
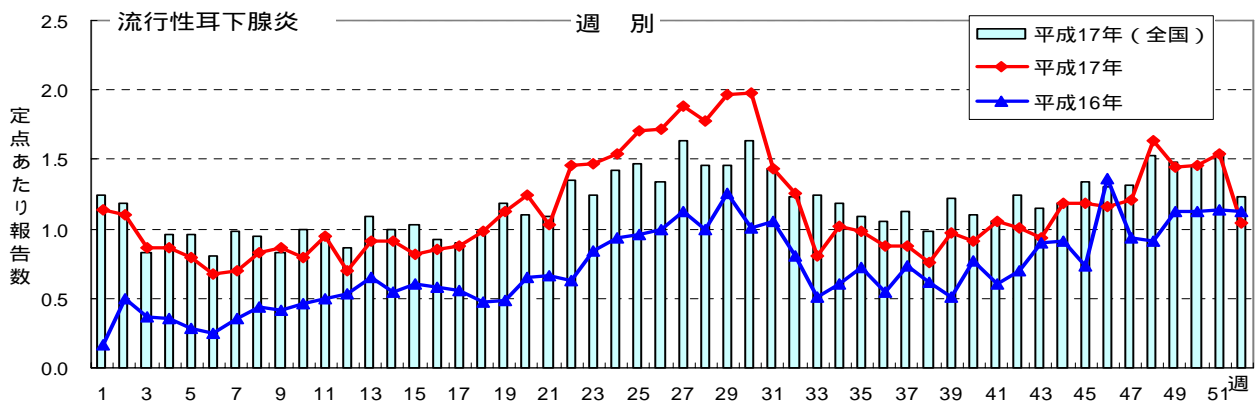
ヘルパンギーナ

例年夏に流行するが、平成17年は26～29週に警報レベル値「6」を超える流行がみられた。年齢別では10歳以下がほとんどを占めた。



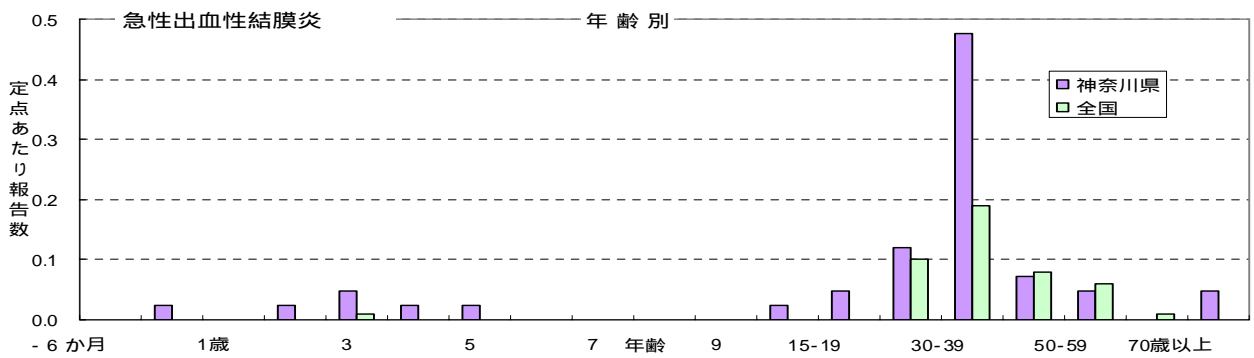
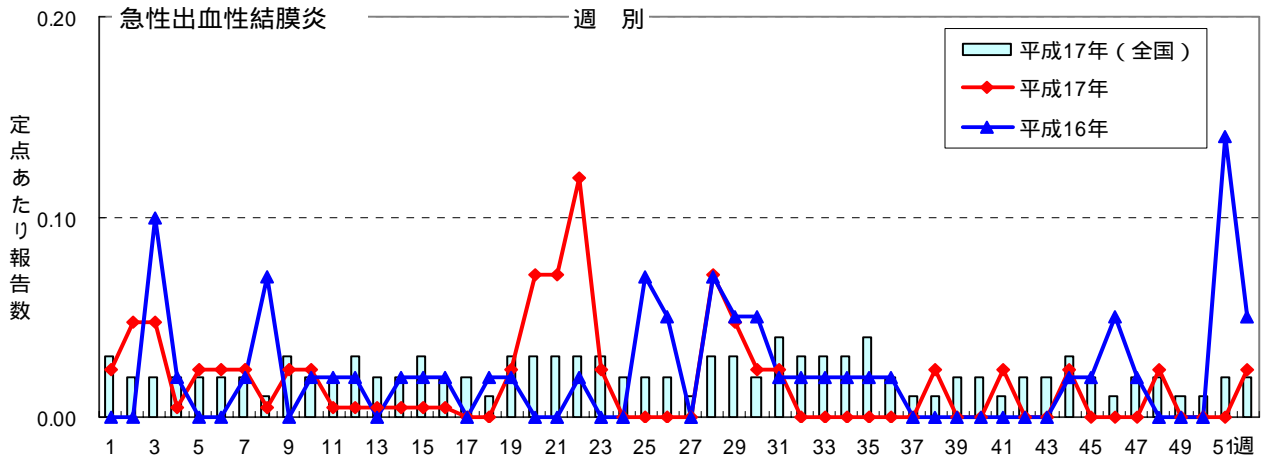
流行性耳下腺炎

平成17年は前年を上回って推移し、全国とほぼ同様の傾向であった。年齢別では5歳が最も多かった。



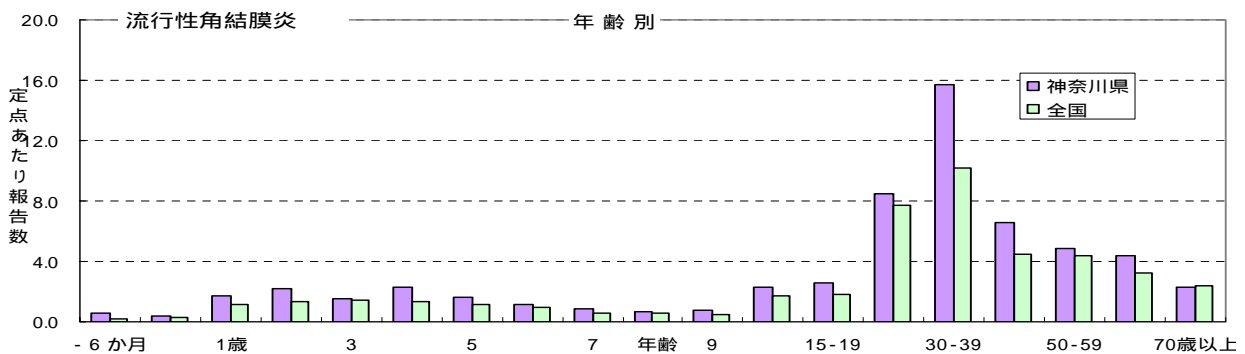
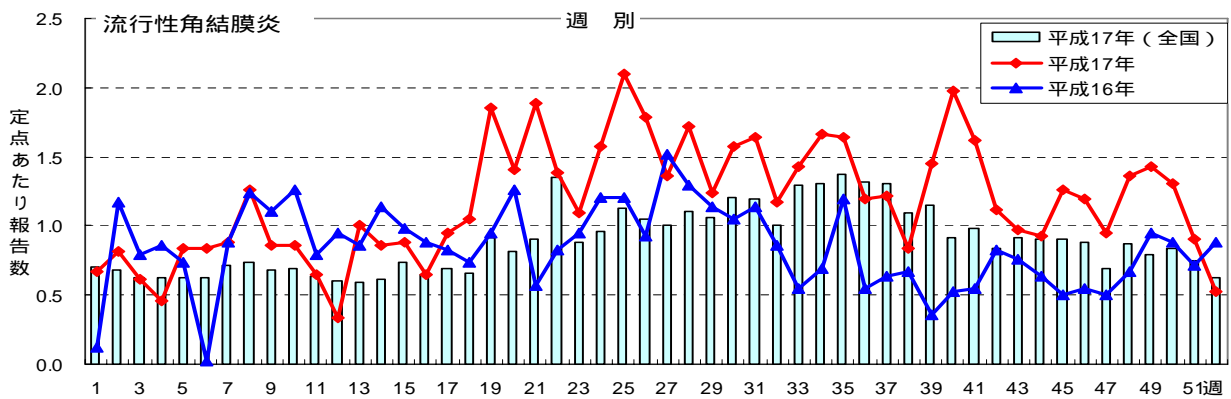
急性出血性結膜炎

散発的な報告がみられ、成人の報告が多いことが特徴であった。



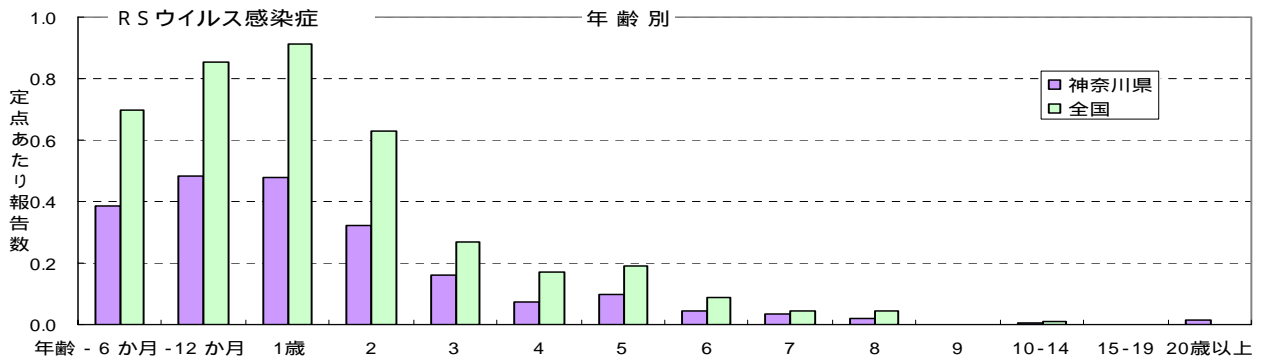
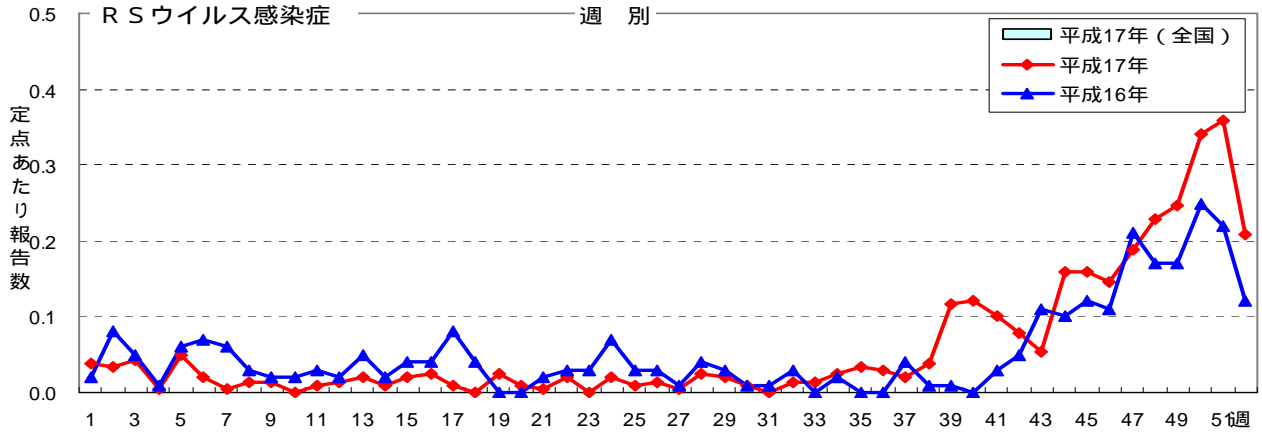
流行性角結膜炎

全国的に全国を上回って推移した。年齢では成人の報告が多かった。



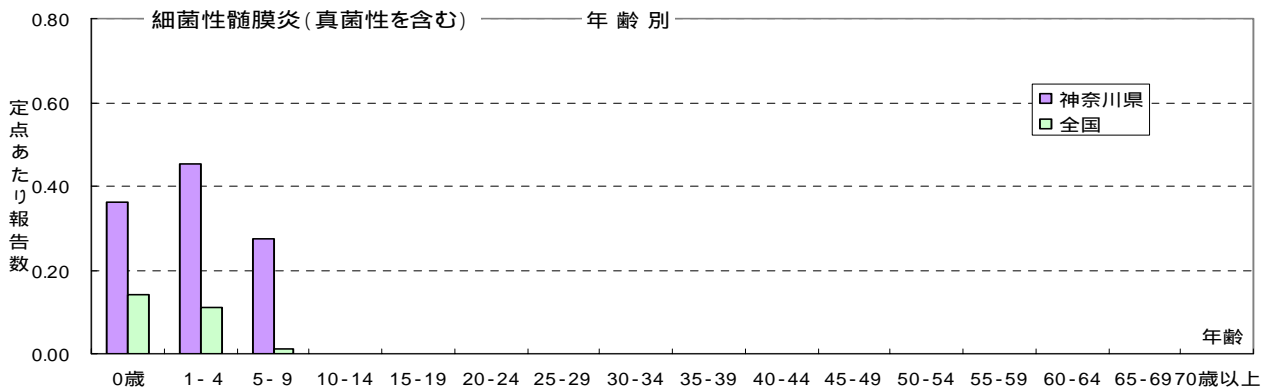
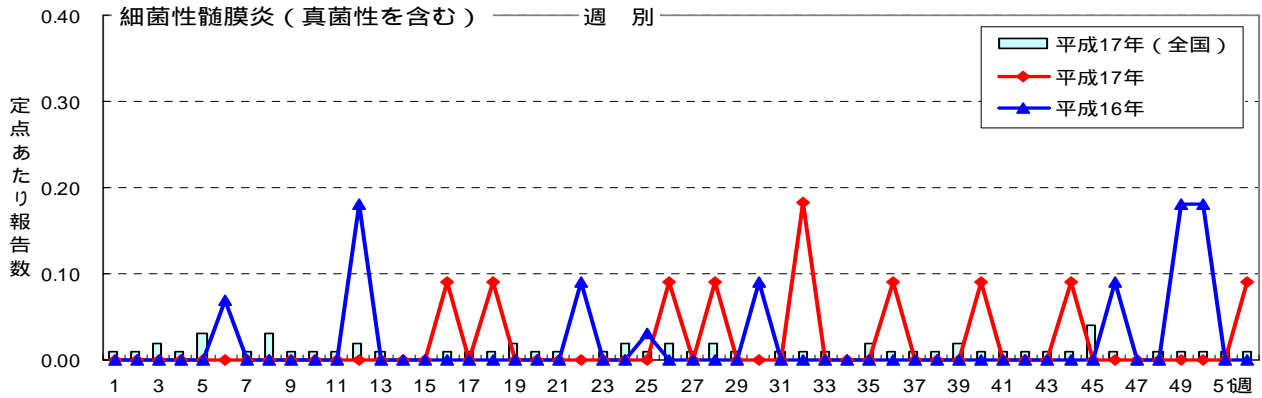
RSウイルス感染症

51週にピークとなったが、ほぼ前年並の傾向を示した。年齢別では1歳以下が多数であった。



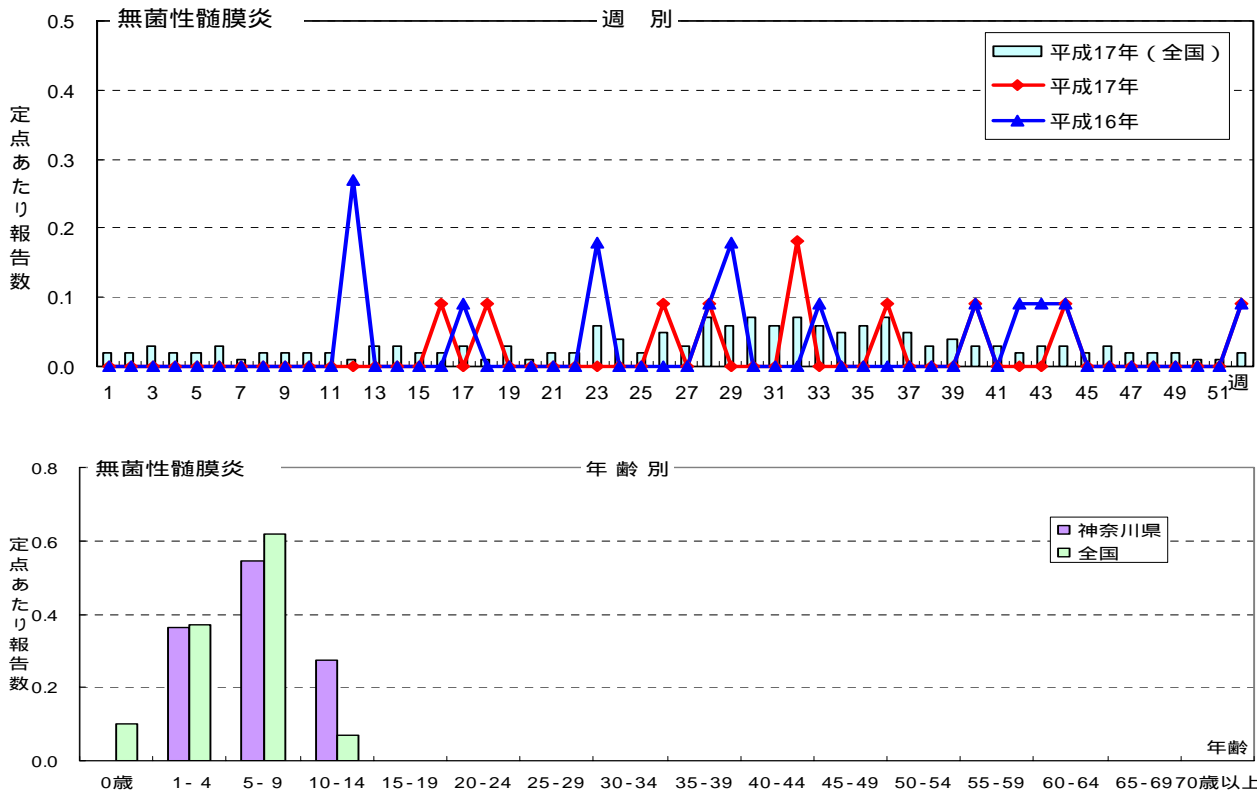
細菌性髄膜炎（真菌性を含む）

散発的な報告がみられた。年齢別では9歳以下でほぼ全数を占めた。



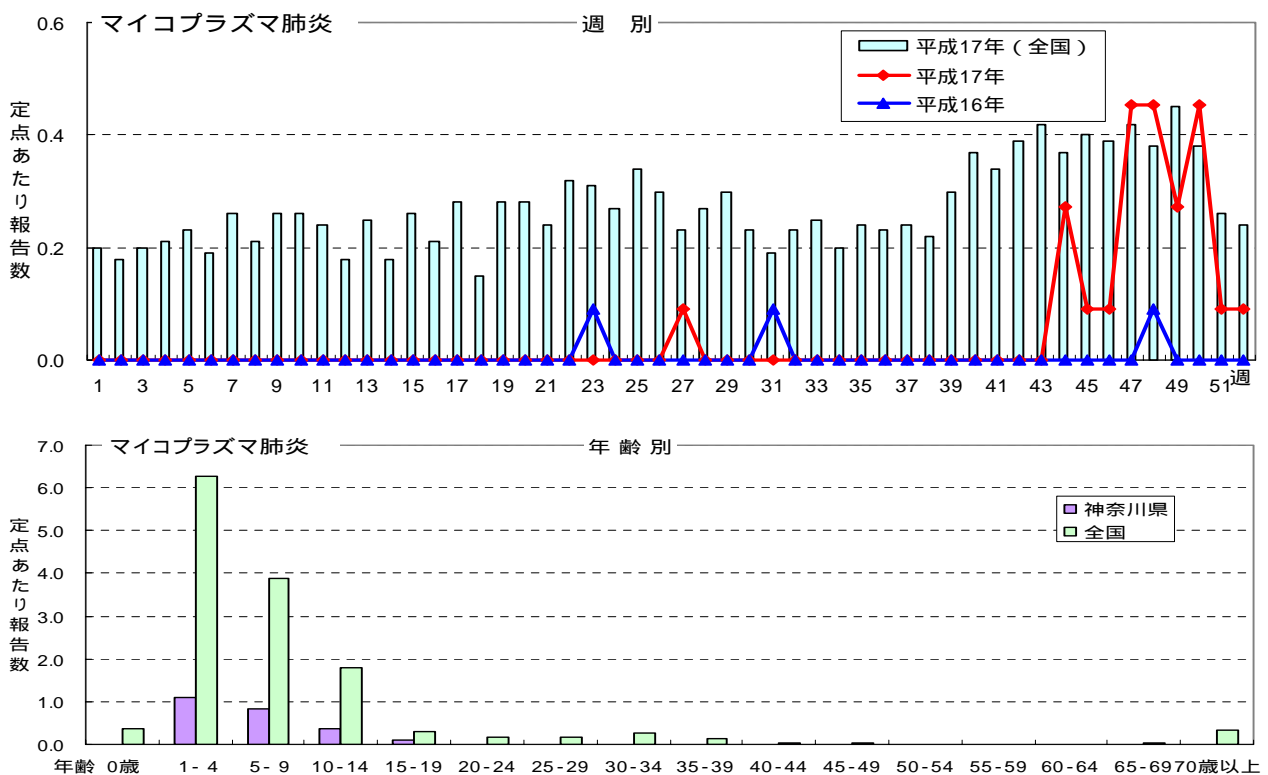
無菌性髄膜炎

散発的な報告がみられた。年齢は14歳以下がほとんどであった。



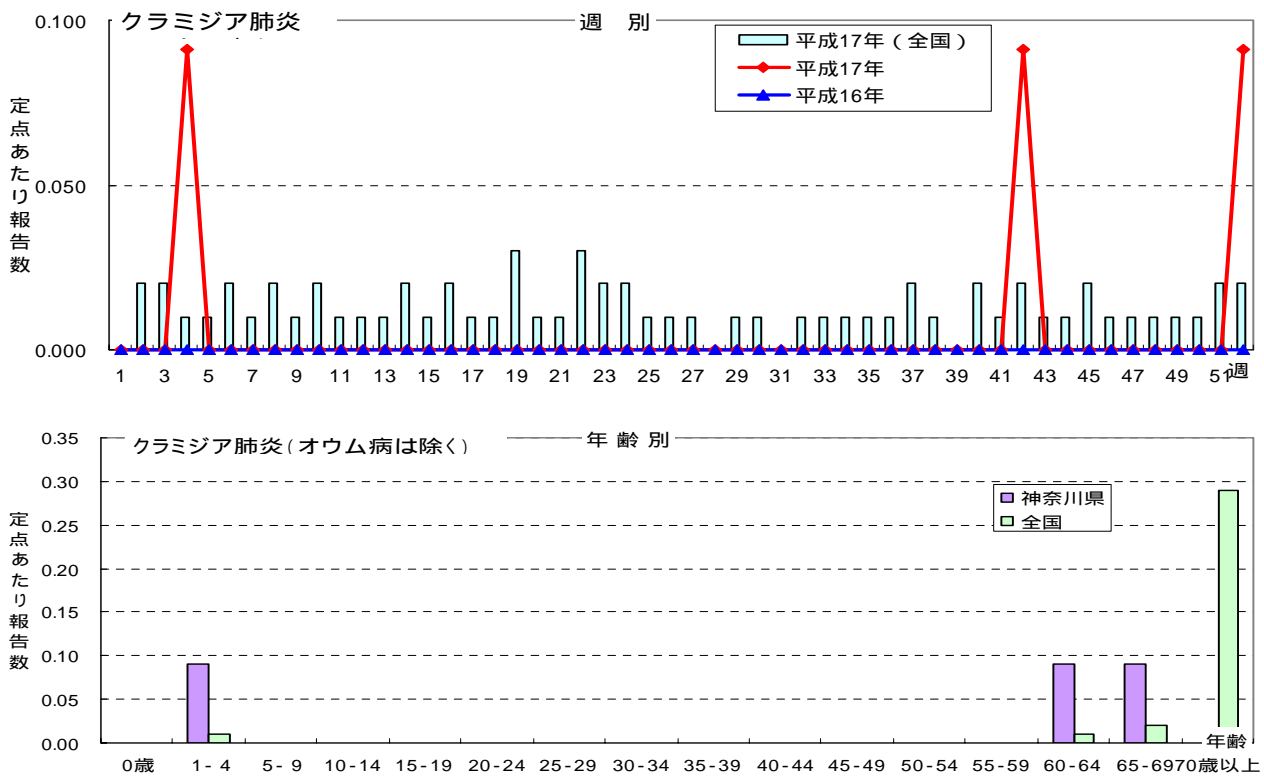
マイコプラズマ肺炎

例年秋から初冬に報告の増加がみられるが、全国的には1年を通じて発生している。年齢は1-4歳が多数であった。



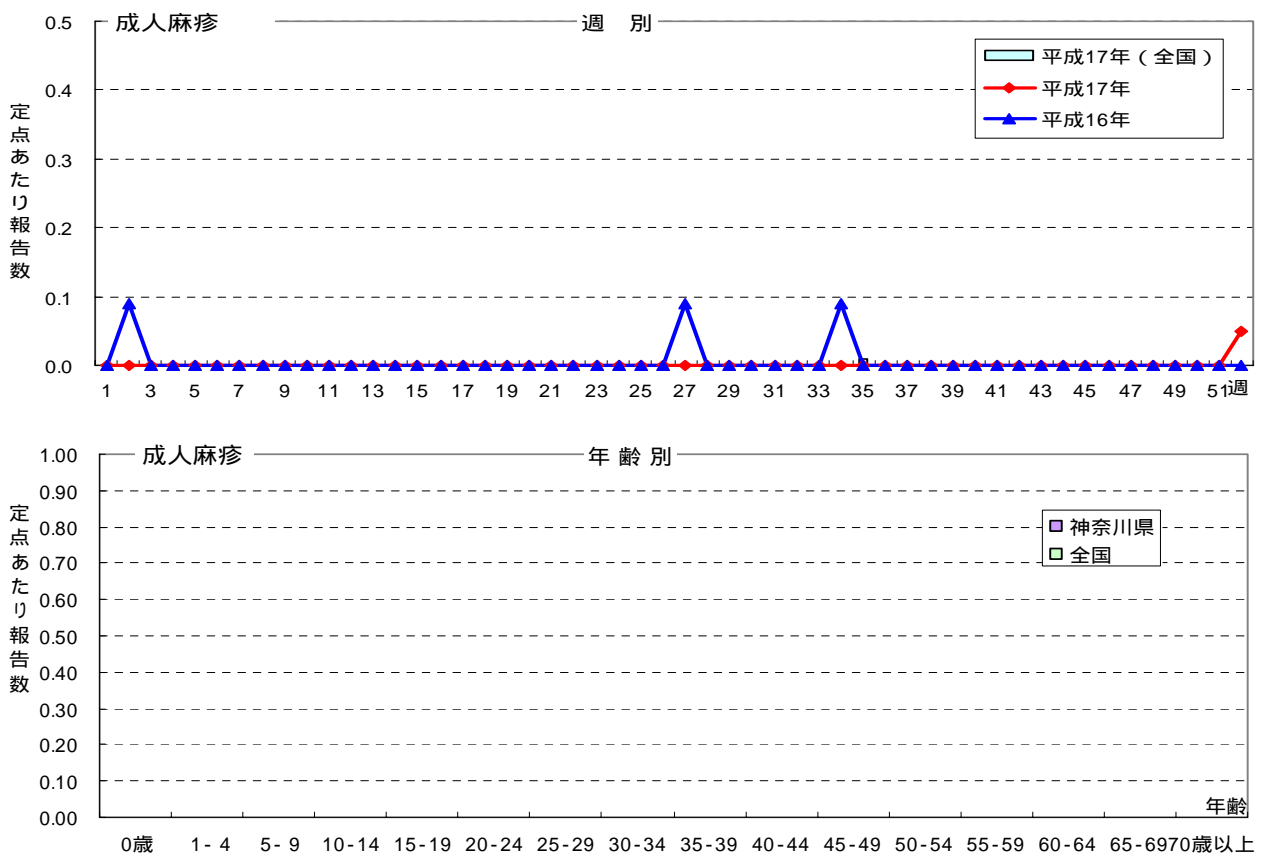
クラミジア肺炎（オウム病を除く）

散発的な発生がみられた。年齢別では1-4歳、60歳以上に多くの報告があった。



成人麻疹

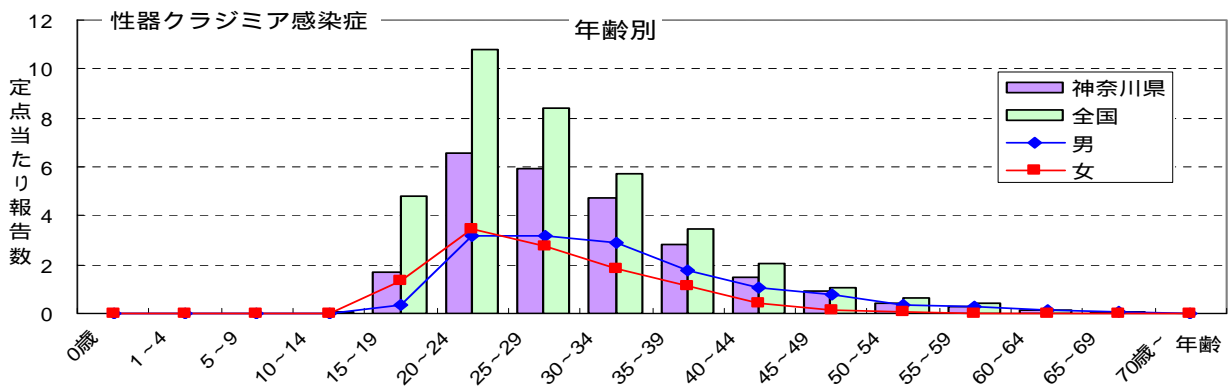
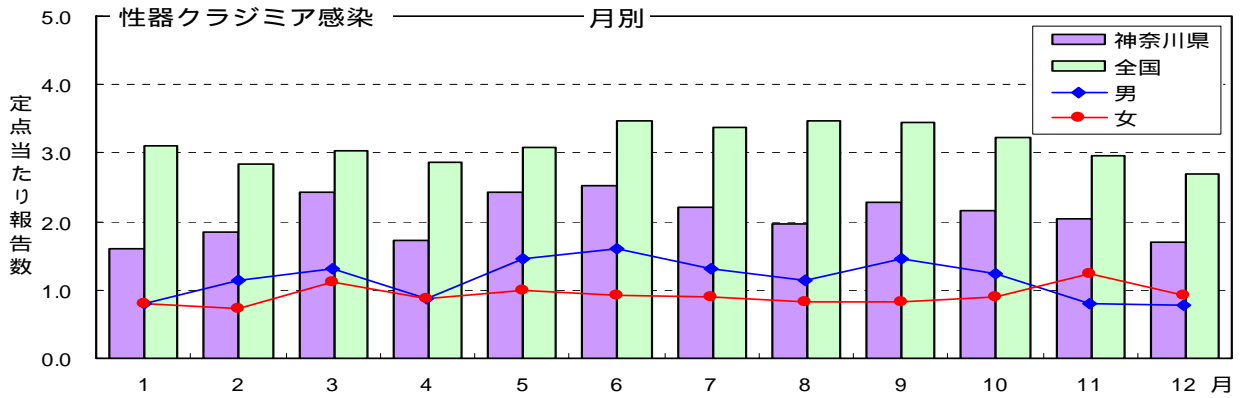
年間を通じて散発的な発生がみられた。



3 月報対象疾患（横浜市及び川崎市を含めた神奈川県全体）

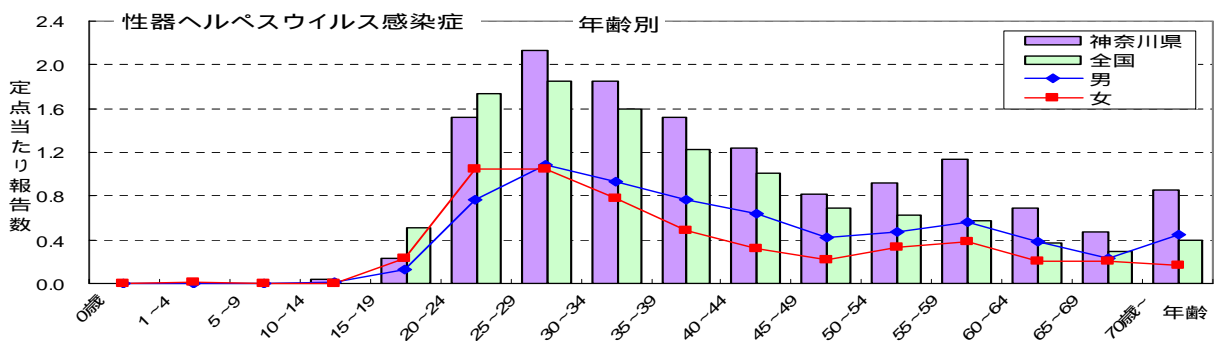
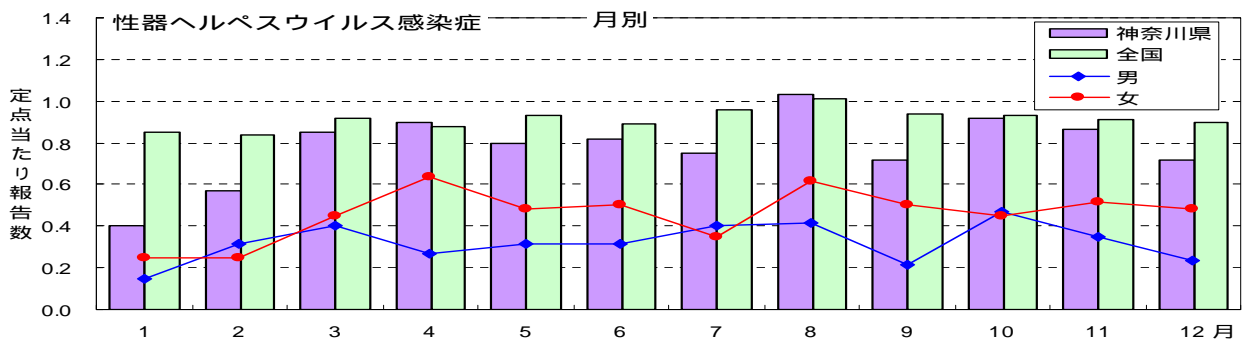
性器クラジミア感染症

年間を通じて報告数に大きな変化はみられなかった。全国を下回って推移した。年齢別では 20～39 歳が多数を占めた。



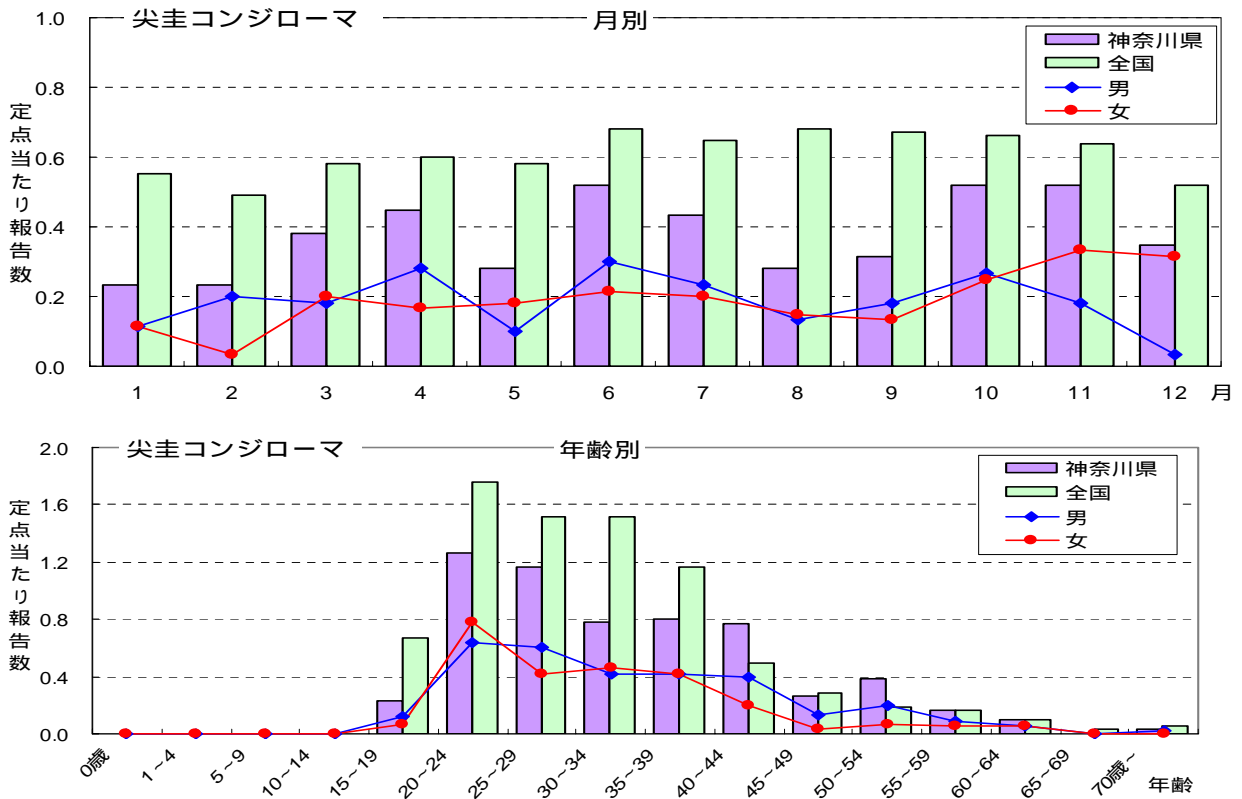
性器ヘルペスウイルス感染症

年間を通じて報告があった。年齢別では 30～34 歳以降の世代で全国を上回った。



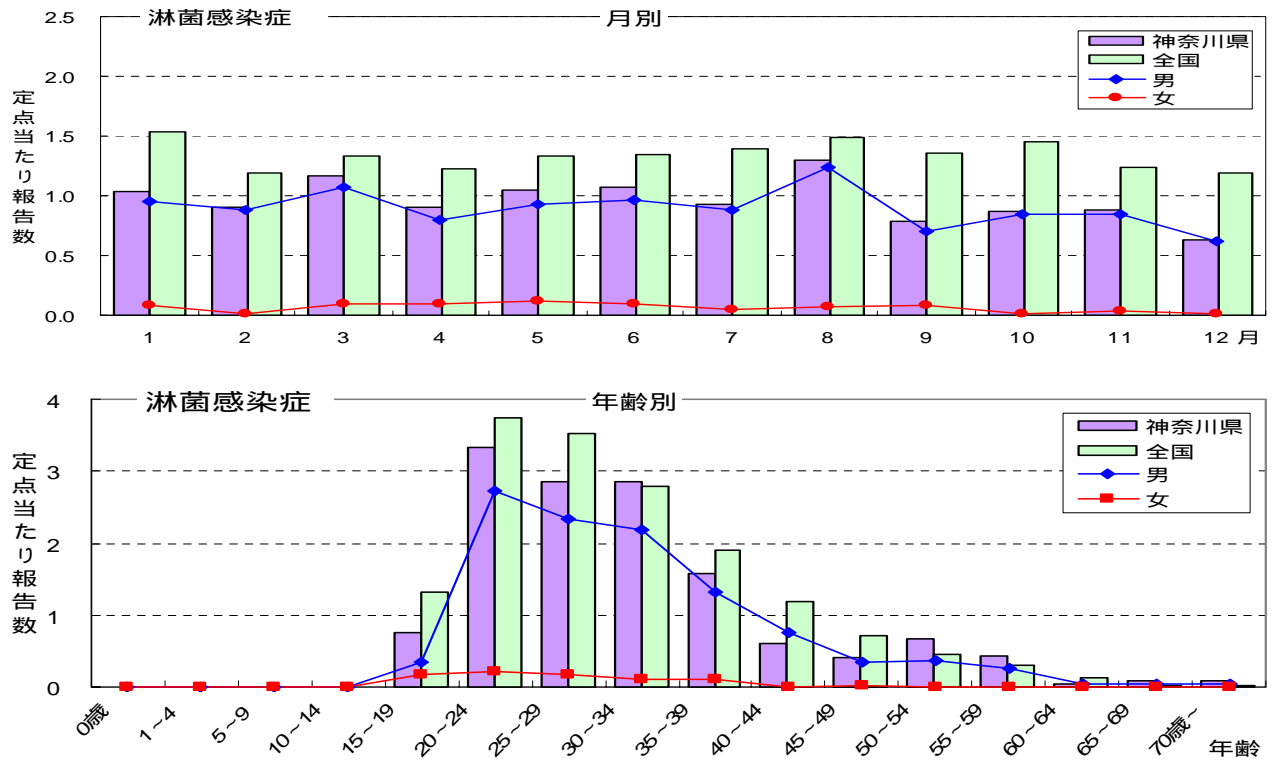
尖圭コンジローム

年間を通して報告があった。年齢別では20～44歳が多数であった。



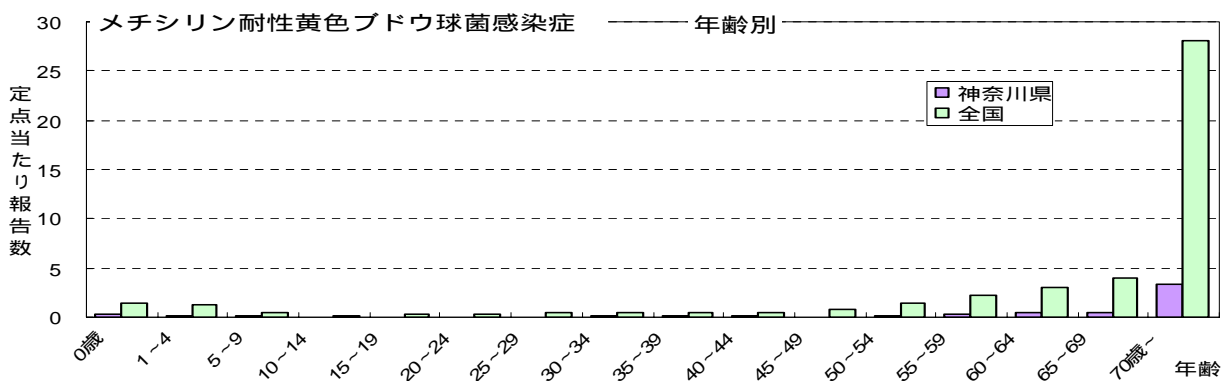
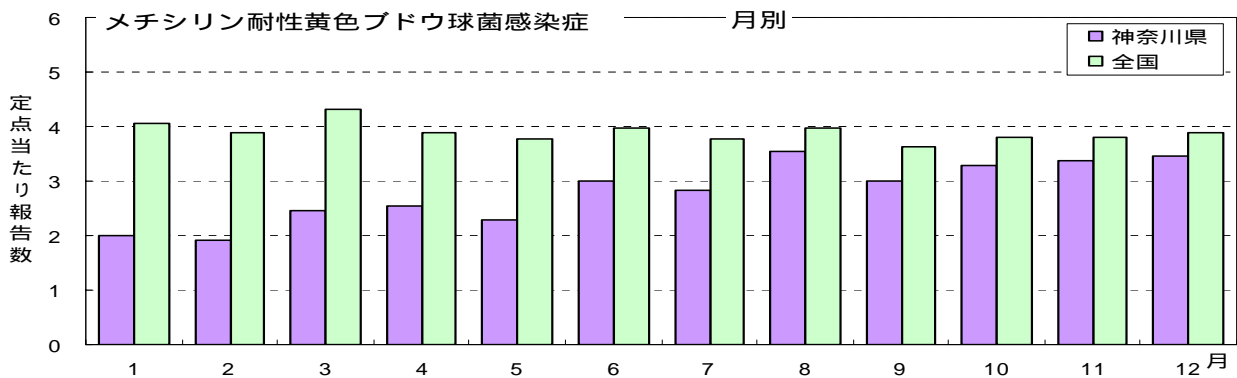
淋菌感染症

専ら男性からの報告が多かった。年齢では20歳代から30歳代前半に集中している。



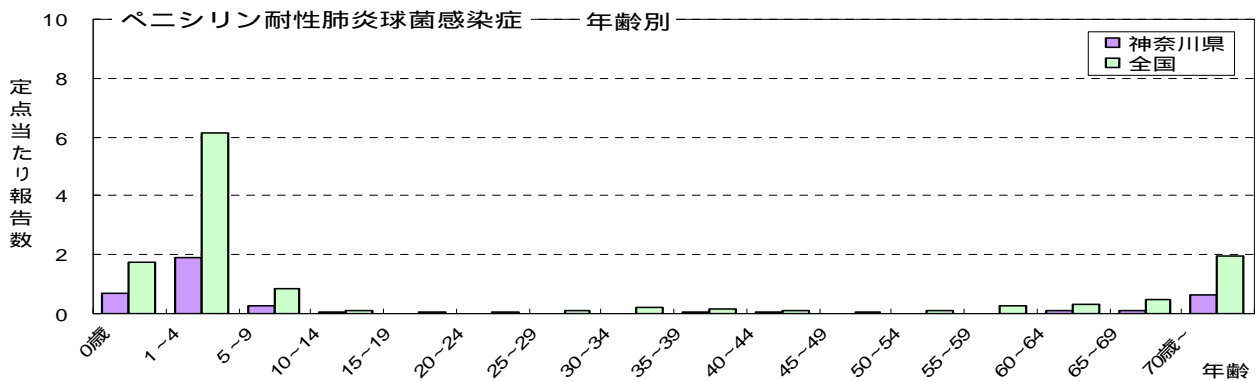
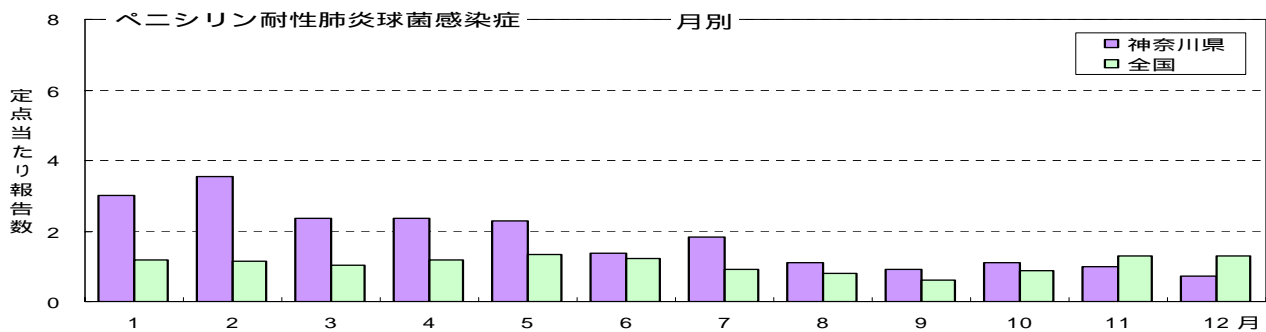
メチシリン耐性黄色ブドウ球菌感染症

通年報告があり、年齢別では70歳以上の報告が多かった。



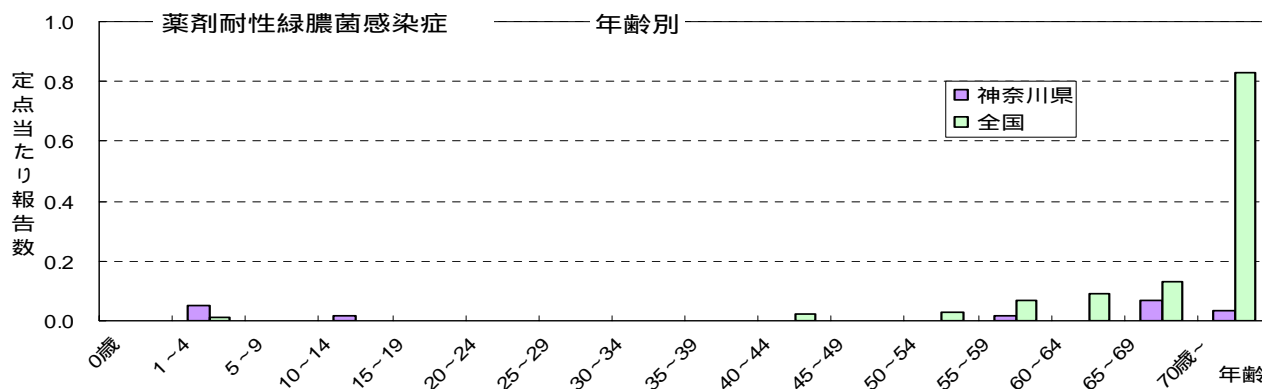
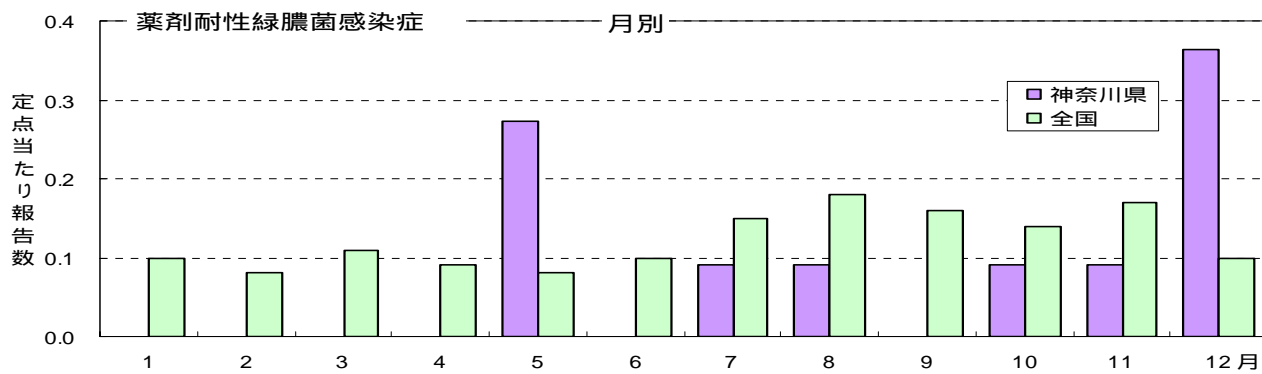
ペニシリン耐性肺炎球菌感染症

通年報告があり、11月、12月を除いては全国を上回る報告があった。年齢別では幼児と高齢者が多数であった。



薬剤耐性緑膿菌感染症

5月、12月に報告が多かった。年齢別では高齢者の報告が目立った。

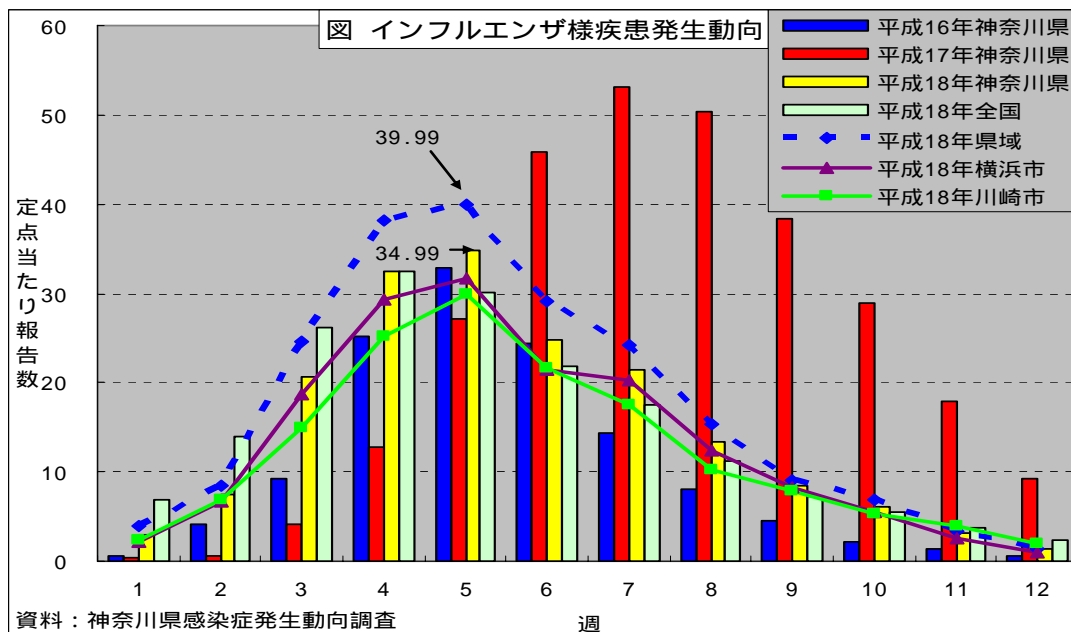


ウイルス性感染症

1 インフルエンザ

(1) 概況

平成 17～18 年のインフルエンザ様疾患は、平成 16～17 年に比し、早期からの流行の兆がみられたが、前年ほどの流行とはならなかった。神奈川県のパークは全国よりも 1 週遅れの第 5 週で、定点当たり報告数は 34.99 であった。横浜市、川崎市、県域とも同様の傾向を示したが、県域での報告数が 39.99 で最も多かった。



平成 17 年 12 月から平成 18 年 3 月にかけて発生した集団かぜは、A ソ連型、A 香港型がほとんどを占めた。

平成 8 年以降の集団かぜの発生日、終息日、学校等における欠席者数、ウイルス型は表のとおりであった。

表 学校等における集団かぜの発生状況（神奈川県。平成 18 年 5 月 31 日現在）

資料：神奈川県健康増進課

区分	発生日	終息日	発生施設数	学級閉鎖数	欠席者数	ウイルス型
8 (冬季)	8.11.26	9.3.17	410	495	5,219人	A (H3N2) B
9 (冬季)	9.12.3	10.3.19	1,794	3,293	38,782人	A (H3N2)
10 (冬季)	10.11.6	11.3.18	1,938	2,949	33,370人	A (H3N2) B
11 (冬季)	11.11.19	12.3.17	1,074	1,498	18,778人	A (H1N1) A (H3N2)
12 (冬季)	12.12.12	13.3.19	143	144	1,535人	A (H1N1) B
13 (冬季)	13.11.16	14.3.19	791	1,059	12,336人	A (H1N1) A (H3N2)
14 (冬季)	14.12.13	15.3.17	1,115	1,430	19,024人	A (H3N2) B
15 (冬季)	15.12.8	16.3.22	554	699	8,941人	A (H3N2) B
16 (冬季)	16.11.25	17.3.26	961	1,250	14,634人	A (H3N2) B
17 (冬季)	17.12.5	18.3.18	715	881	9,962人	A (H1N1) A (H3N2) B

A (H1N1) は、A ソ連型
A (H3N2) は、A 香港型
B は、B 型

(2) 神奈川県域のインフルエンザの動向

神奈川県衛生研究所

平成 17 年度冬季における県域のインフルエンザ流行は、17 年 12 月から 18 年 3 月にかけて起こった。感染症発生動向調査によると、シーズン最初の患者発生報告は 17 年第 41 週にあったが、その後 12 月に入るまでは目立った報告数の増加はみられなかった。18 年第 3 週以降に報告数は急増して 5 週にピーク（定点あたり報告数 39.99 人）を迎えた後、6 週以降は急速に減少していった。

本シーズン（17 年第 40 週～18 年第 13 週）における報告数の累積は 3 万人あまりと昨シーズンの 2/3 にとどまり、中規模流行となった。（図 1）

感染症発生動向調査病原体定点で採取された 235 検体についてウイルス分離および一部検体について PCR による遺伝子検出（インフルエンザ、RS、パラインフルエンザウイルス）を実施した。シーズンを通じて、インフルエンザウイルス A ソ連（H1）型と A 香港（H3）型とが混在して検出される傾向が続いた。ウイルス分離および PCR による遺伝子検出をあわせたウイルス検出数の内訳は、インフルエンザウイルス A ソ連（H1）型 42 件、同 A 香港（H3）型 151 件、アデノウイルス 4 件、パラインフルエンザウイルス 2 件、RS ウイルス 1 件、ムンプスウイルス 1 件であった。

県域および相模原市の各保健所管内初発集団かぜ（10 集団 44 名）について上記と同様にウイルス分離および PCR による遺伝子検出を実施した。12 月に 3 集団、1 月に 7 集団の検査依頼があり、12 月はインフルエンザウイルス A ソ連（H1）型 1 集団、同 A 香港（H3）型 1 集団、インフルエンザウイルス不検出 1 集団、1 月は同 A ソ連（H1）型 1 集団、同 A 香港（H3）型 6 集団であった。集団かぜ患者からインフルエンザウイルス以外のウイルスは検出されなかった。

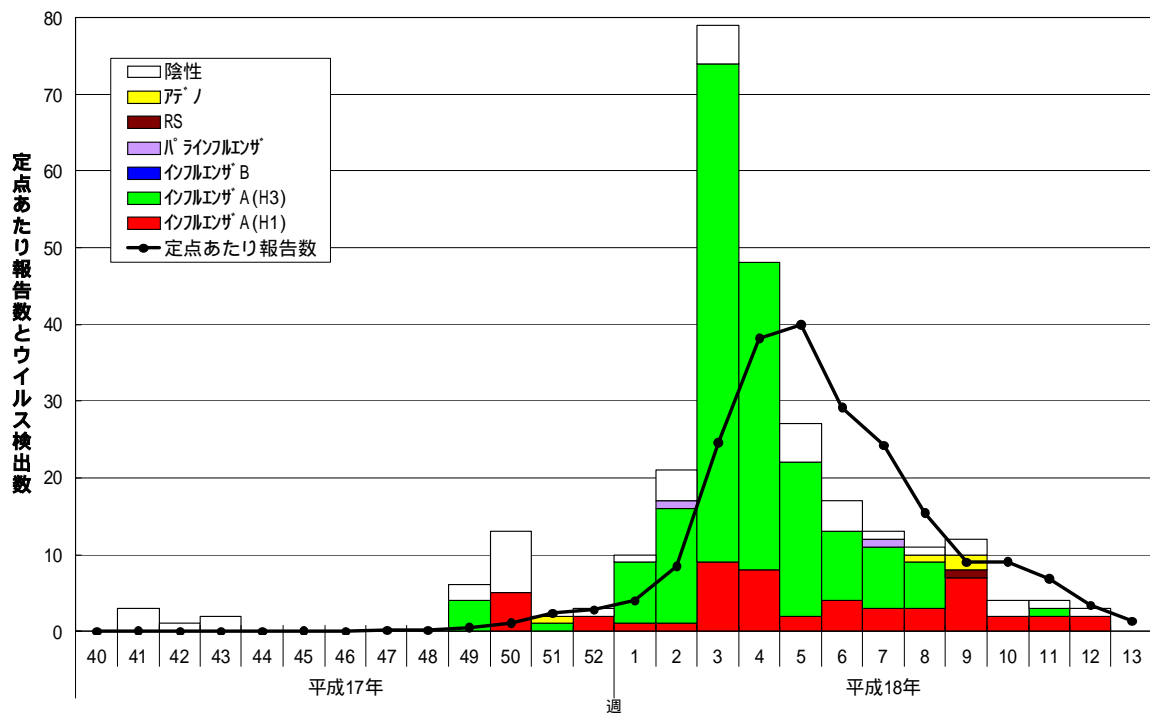
なお、感染症発生動向調査、集団かぜ検査ともに、B 型は検出されなかった。

インフルエンザ分離株の抗原性の変異を HI 試験の成績から見ると、A ソ連（H1）型はワクチン株の A/ニューカレドニア/20/99(H1N1)類似株(HI 価がホモ価と 2 倍差以内)が 59%、4～8 倍差を示す株が 39%、16 倍以上の差を示す株が 2%であった。A 香港（H3）型はワクチン株の A/ニューヨーク/55/2004(H3N2)類似株が 90%、4～8 倍差を示す株が 10%であった。

本シーズンは 4 シーズンぶりに A ソ連（H1）型の流行があったが、検出数は 1:3 の割合で A 香港（H3）型の方が多かった。過去の経験から、A ソ連（H1）型は数年に一度流行し、小児の患者が多いという特徴がある。本シーズンにおいても、0～4 歳が 12%、5～9 歳が 76%、10～14 歳が 4%、15 歳以上は 8%であった。一方、A 香港（H3）型は 0～4 歳が 13%、5～9 歳が 27%、10～14 歳が 22%、15 歳以上が 35%であった。A ソ連（H1）型は 5～9 歳の小児を中心に、A 香港（H3）型は小児だけでなく広範囲の年齢層で流行していた。

（渡邊寿美、斎藤隆行、尾上洋一、新川隆康）

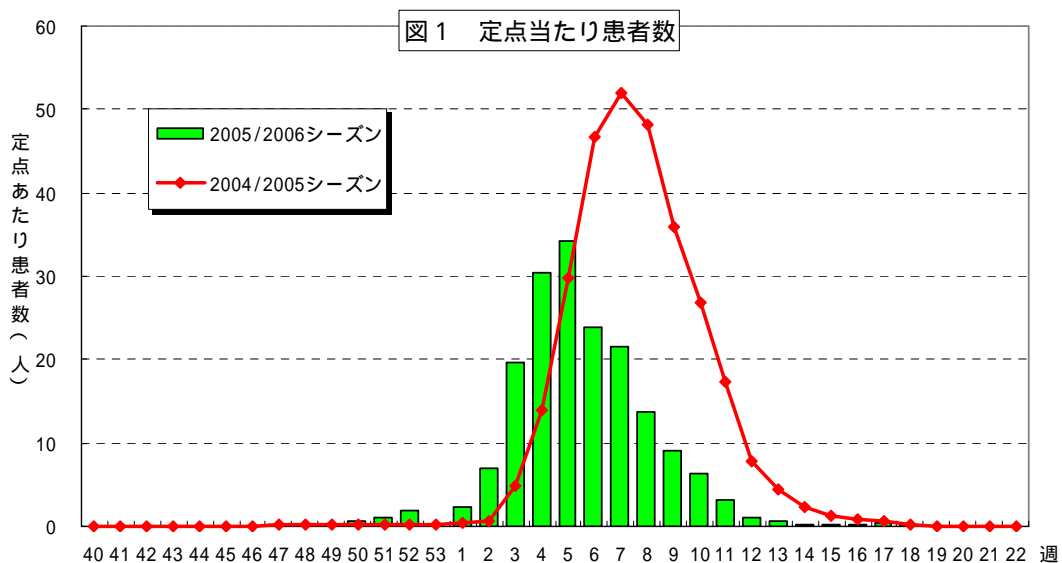
図1 インフルエンザ様患者の定点あたり報告数とウイルス検出数の推移



(3) 横浜市のインフルエンザの動向

横浜市衛生研究所

横浜市結核・感染症発生動向調査による平成17年11月から平成18年5月までのインフルエンザ様疾患患者数は23,300人と昨シーズン同期間における37,707人を下回り、1999/2000シーズンの患者数20,380人とほぼ同規模であった。定点あたり患者数は1月上旬から増えはじめ、1月(第5週)に34.2人とピークとなり、その後減少した(図1)。



集団かぜの初発は平成17年12月14日(第50週)に神奈川区の小学校からの報告であった。その後、平成18年1月第3週から終息までの発生数は14区32施設47学級であった。

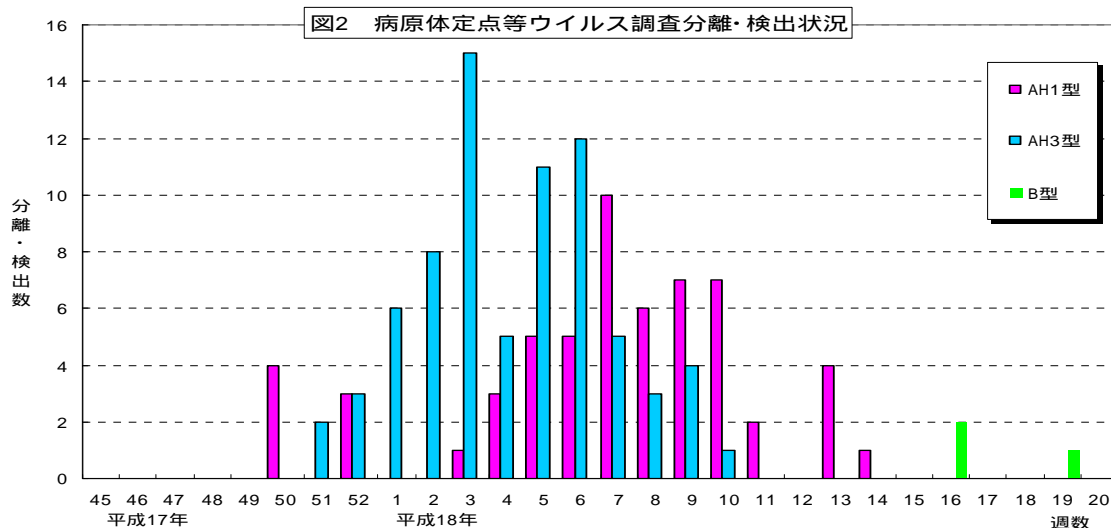
検査依頼のあった 11 集団 46 人についてウイルス学的調査を実施し、6 集団は A ソ連 (H1) 型 (2 集団は N1 のみ) ウイルスが、4 集団は A 香港 (H3) 型 (1 集団は N2 のみ) ウイルスが分離・検出され、1 集団からは B 型ウイルスが分離された (表 1)。

表1 集団かぜ調査等の検査

発生年月日	週	区	施設	ウイルス分離			遺伝子検出			
				検体数	分離株数	型	判定数	HA遺伝子	判定数	NA遺伝子
平成17.12.14	第50週	神奈川	小学校	2	1	AH3N2	0	陰性	2	NA2
平成18. 1.16	第 3週	旭	小学校	5	2	AH1N1	2	HA1	2	NA1
1.18	第 3週	保土ヶ谷	幼稚園	3	3	AH1N1	0	陰性	2	NA1
1.27	第 4週	戸塚	小学校	5	5	AH3N2	1	HA3	-	未実施
1. 30	第 5週	緑	小学校	5	4	AH3N2	1	HA3	1	NA2
2. 8	第 6週	都筑	幼稚園	1	0		0	陰性	1	NA1
2.16	第 7週	磯子	小学校	1	0		0	陰性	1	NA2
2. 20	第 8週	金沢	小学校	5	5	AH1N1	3	HA1	3	NA1
3. 1	第 9週	中	幼稚園	4	0		1	HA1	2	NA1
3. 7	第10週	港南	小学校	5	2	AH1N1	0	陰性	2	NA1
4.21	第16週	港北	中学校	10	1	B	0	陰性	-	未実施
合計				46	23	AH1N1:12 AH3N2:10 B : 1	8	HA1: 6 HA3: 2	16	NA1:12 NA2: 4

発生動向調査病原体定点ウイルス調査においては、平成 17 年 11 月から平成 18 年 5 月までの 7 か月間に採取した咽頭ぬぐい液 311 検体より、A ソ連(H1)型 56 株、A 香港(H3)型 75 株、B 型 1 株の合計 132 株が分離または遺伝子が検出された。また、定点以外の医療機関から依頼された検体では、A ソ連(H1)型ウイルス 2 株、A 香港(H3)型ウイルス 1 株、B 型ウイルス 2 株が分離された。なお、この中には、A ソ連(H1)型と A 香港(H3)型の両方が検出された 1 例と RT-PCR で A ソ連(H1)型ウイルスが検出され、A 香港(H3)型ウイルスが分離された 1 例、および RT-PCR で A 香港(H3)型ウイルスが検出され、A ソ連(H1)型ウイルスが分離された 1 例が含まれていた。

A ソ連(H1)型ウイルスについては平成 17 年 12 月 16 日 (第 50 週) の鶴見区と瀬谷区定点検体から 4 株分離され、その後 2 月第 7 週をピークとして 4 月第 14 週まで分離された。一方、A 香港(H3)型ウイルスについては平成 17 年 12 月 16 日 (第 50 週) の港北区定点検体から 1 株分離され、年明け後は 1 月第 3 週をピークとして 3 月第 10 週まで分離された。また、B 型ウイルスは平成 18 年 4 月 20 日 (第 16 週) の西区医療機関から依頼された検体から 2 株分離され、その後、5 月 8 日 (第 19 週) の磯子区定点検体からも 1 株分離された (図 2)。



分離株の HA 抗原性状の一部を表 2、3、4 に示した。A ソ連(H1)型ウイルスの 62 株はワクチン株である A/New Caledonia/20/99 と HI 価が類似していたが、4 株はワクチン株に低い反応性を示した。一方、A 香港(H3)型ウイルスの 84 株はワクチン株である A/New York/55/2004 類似株であった。B 型ウイルスの 4 株はワクチン株である山形系統の B/Shanghai/361/2002 や B/Johannesburg/05/99 には反応性が低く、Victoria 系統の B/Brisbane/32/2002 に類似した抗原性状を示した。

表2 AH1型ウイルスの抗原性状

抗原	フェレット、またはマウスで免疫した抗血清			
	A/New Caledonia/20/99 (640)	A/Moscow/13/98 (1280)	A /横浜/36/2002 (640)	A/横浜/ 9/2001 (320)
A/横浜/ 55/2005	640	20	1280	640
A/横浜/ 17/2006	320	20	1280	320
A/横浜/135/2007	320	10	1280	320
A/横浜/ 67/2008	40	< 10	640	160
A/横浜/ 83/2009	20	< 10	160	40

() 内は免疫抗原と同じウイルスを用いて測定した抗体価

表3 AH3型ウイルスの抗原性状

抗原	フェレット、マウスで免疫した抗血清			
	A/New York/55/2004 (2560)	A/Wyoming/03/2003 (2560)	A/熊本/102/2002 (640)	A/横浜/95/2002 (640)
A/横浜/ 65/2005	1280	320	320	20
A/横浜/ 49/2006	1280	320	320	20
A/横浜/105/2006	1280	640	320	10
A/横浜/ 6/2006	1280	320	320	10
A/横浜/ 28/2006	1280	1280	1280	20
A/横浜/ 90/2006	1280	640	1280	20

() 内は免疫抗原と同じウイルスを用いて測定した抗体価

表4 B型ウイルスの抗原性状

抗原	フェレット、ヒツジで免疫した抗血清			
	B/Brisbane/32/2002 (2560)	B/Shandong/07/97 (160)	B/Shanghai/361/2002 (640)	B/Johannesburg/05/99 (2560)
B/横浜/ 1/2006	2560	10	20	< 10
B/横浜/ 2/2006	2560	10	20	< 10
B/横浜/ 3/2006	2560	40	20	10
B/横浜/ 4/2006	1280	10	20	< 10

() 内は免疫抗原と同じウイルスを用いて測定した抗体価

系統樹解析では、A ソ連(H1)型についてはワクチン株の A/New Caledonia/20/99 や 2001/2002 シーズンの分離株より進化し、2つのグループを形成していた(図3)。A 香港(H3)型については2006/07シーズンワクチン株としてWHOが推奨している A/Wisconsin/67/2005 と同じグループとさらに進化が進んだグループの2つに分かれた(図4)。今シーズン最後に分離された B 型ウイルス株は Victoria 系統で、2006/07 シーズンワクチン株の B/Malaysia/2506/2004 株に極めて近縁であることがわかった(図5)。

以上のように横浜市における2005/2006シーズンにおけるインフルエンザの流行は中規模なものであり、A ソ連(H1)型と A 香港(H3)型ウイルスの混合流行であった。シーズンの最後には2002/2003シーズン

ン以降3シーズンぶりに Victoria 系統の B 型ウイルスが分離された。
 (川上千春、百木智子、七種美和子、野口有三、佐々木一也)

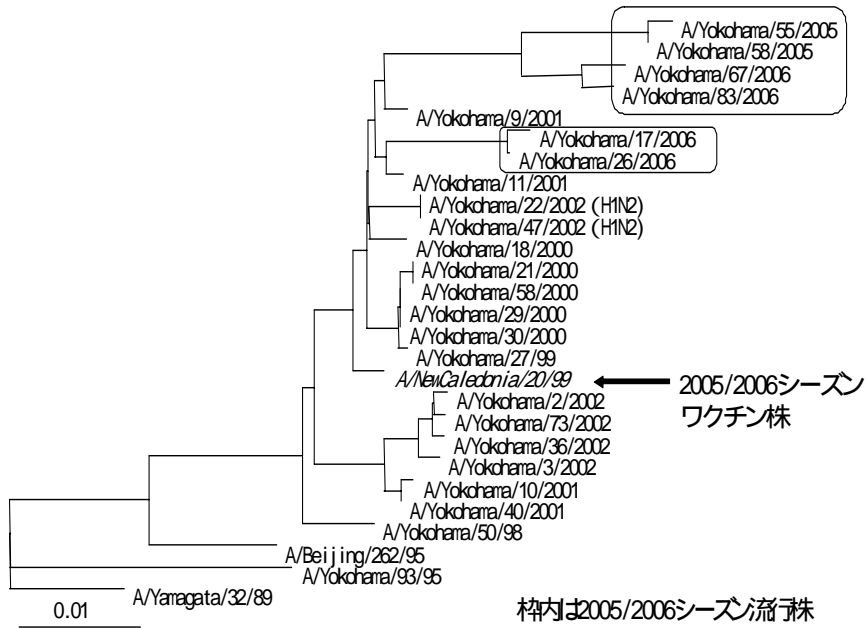


図3 A/H1型インフルエンザウイルスのHA1遺伝子系統樹

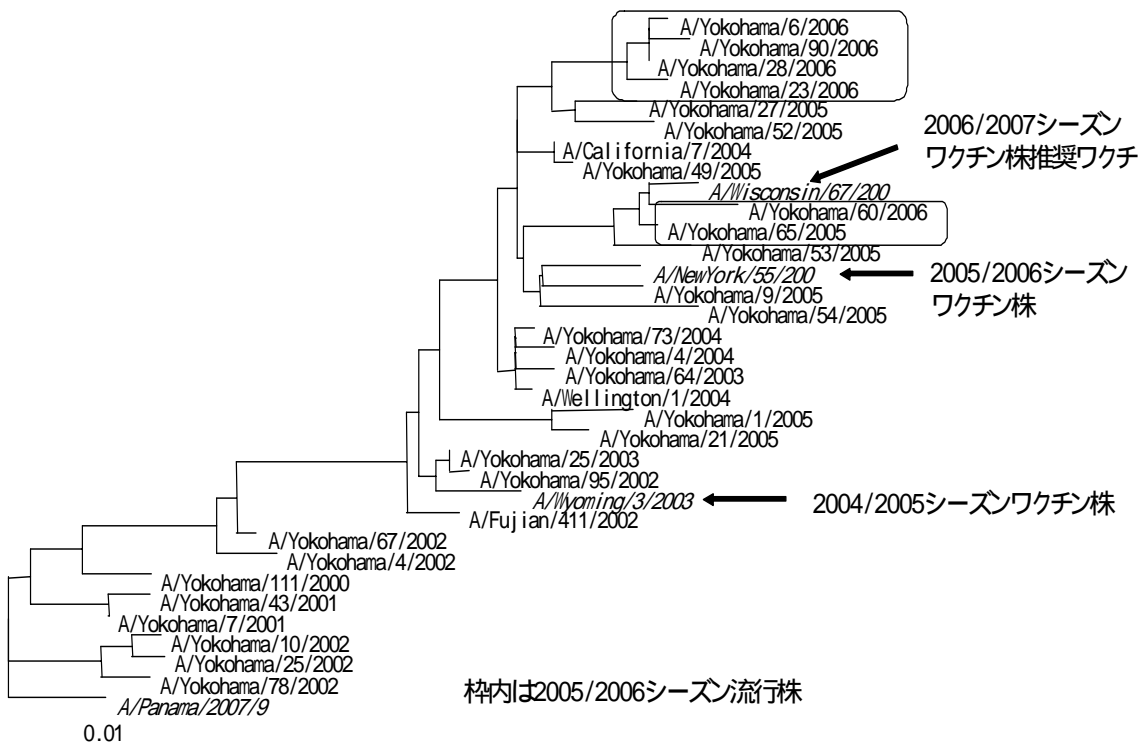


図4 A/H3型インフルエンザウイルスのHA1遺伝子系統樹

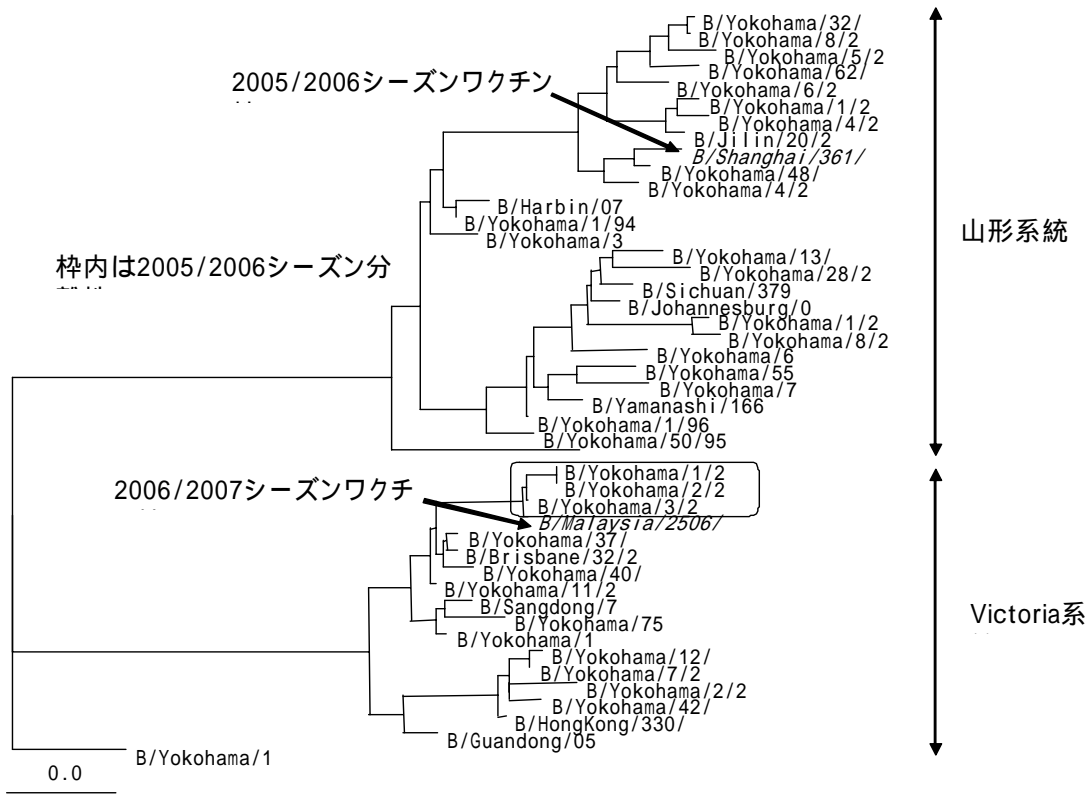


図 5 B型インフルエンザウイルスのHA1遺伝子系統樹

(4) 川崎市のインフルエンザの動向

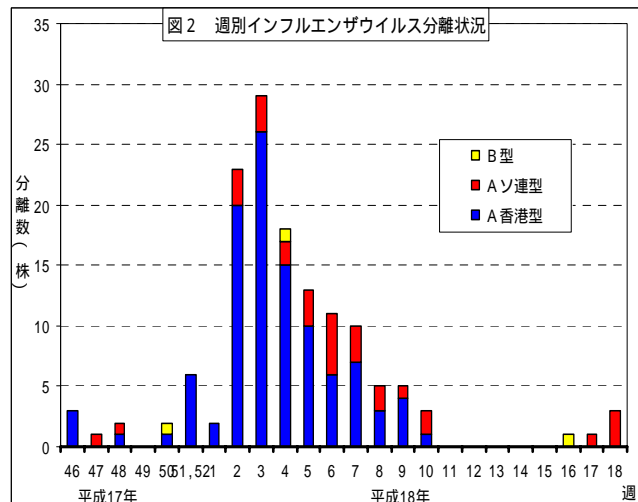
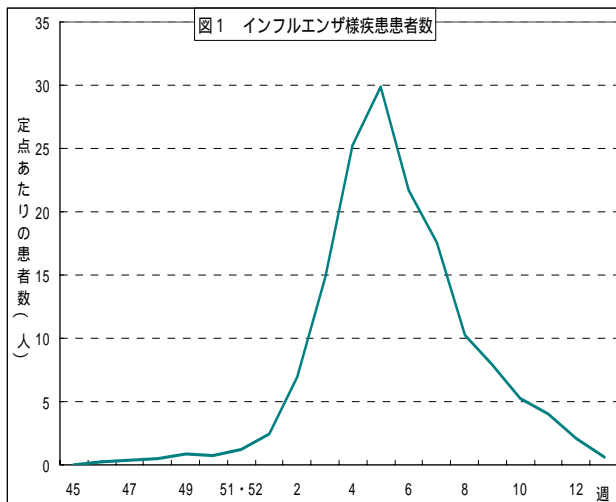
川崎市衛生研究所

川崎市感染症発生動向調査におけるインフルエンザ様疾患患者の発生状況（図1）から、患者発生が初めて確認されたのが平成17年11月の第3週（46週）であった。平成18年1月の2週に定点あたりの患者数が6.93、1月の3週で15.39となり、流行の兆しが見られ始め、患者数は増加し、2月の1週（5週）で29.85と流行のピークを迎え、中等度の流行となった。その後患者数は少しずつ減少して4月の1週（14週）に終息した。集団かぜは平成17年12月20日に発生しはじめ、3月14日に終息するまでに7施設10学級でみられた。当施設において、ウイルス分離は行わなかった。

平成17年4月から平成18年3月にかけて、定点医療機関で採取されたインフルエンザ様疾患患者の咽頭ぬぐい液、鼻腔ぬぐい液171例についてウイルス分離を行った。そのうち132例（77.2%）からインフルエンザウイルスが分離され、その内訳はA香港型104株、Aソ連型26株、B型2株であった。

図2によると、はじめてインフルエンザウイルスが分離されたのは11月14日（46週）でA香港型が分離された。11月の分離数はA香港型4株、Aソ連型1株であった。12月の分離数はA香港7株、B型1株であった。1月にはいと分離数は増加し、A香港型62株、Aソ連型9株、B型1株が分離された。2月はA香港型が29株、Aソ連型12株が分離され、3月はA香港型2株、Aソ連型3株が分離された。4月に入ってからA香港型が1株、Aソ連型5株、B型2株が分離された。なお、今期のインフルエンザ様疾患患者からは3血清型が分離されたが、A香港型、Aソ連型の混合流行で、B型は12月1株、1月1株、4月2株と散発的に見られ、終息した（図2）。

（清水英明、平位芳江）



(5) インフルエンザ感受性調査

神奈川県衛生研究所

平成 17 年 7 月から 9 月の間に採取された 0 歳以上の県民 271 名 (0~4、5~9、10~14、15~19、20~29、30~39、40~49、50~59、60 歳以上の 9 区分の年齢群各 30~31 名ずつ) の血清について、インフルエンザ各型に対する年齢別抗体保有状況を調査した。使用抗原は、A/ニューカレドニア/20/99 (H1N1)、A/ニューヨーク/55/2004 (H3N2)、B/上海/361/2002、B/プリズベン/32/2002 の 4 種類である。抗体保有率は、最低血清希釈倍数の 10HI 価と、感染防御能があるとされている 40HI 価の 2 点で集計した (図 1)。

A/ニューカレドニア/20/99 (H1N1) は、12 年度から 6 期連続してワクチン使用株となっている。本株に対する抗体保有率は、10HI 価でみると最高が 15~19 歳の 90.0%、最低が 50~59 歳の 10.0%、40HI 価でみると最高が 15~19 歳の 63.3%、最低は 50~59 歳の 6.7%であった。全体としては、前年度よりも抗体保有率の上昇がみられた。(図 1.a)

A/ニューヨーク/55/2004 (H3N2) は、17 年度から新しくワクチン使用株に採用された株である。本株に対する抗体保有率は、10HI 価でみると最高が 10~14 歳の 96.8%、最低が 50~59 歳の 33.3%、40HI 価でみると最高が 10~14 歳の 87.1%、最低が 50~59 歳の 10.0%であった。前年度よりも全体的に抗体保有率の低下が見られた。(図 1.b)

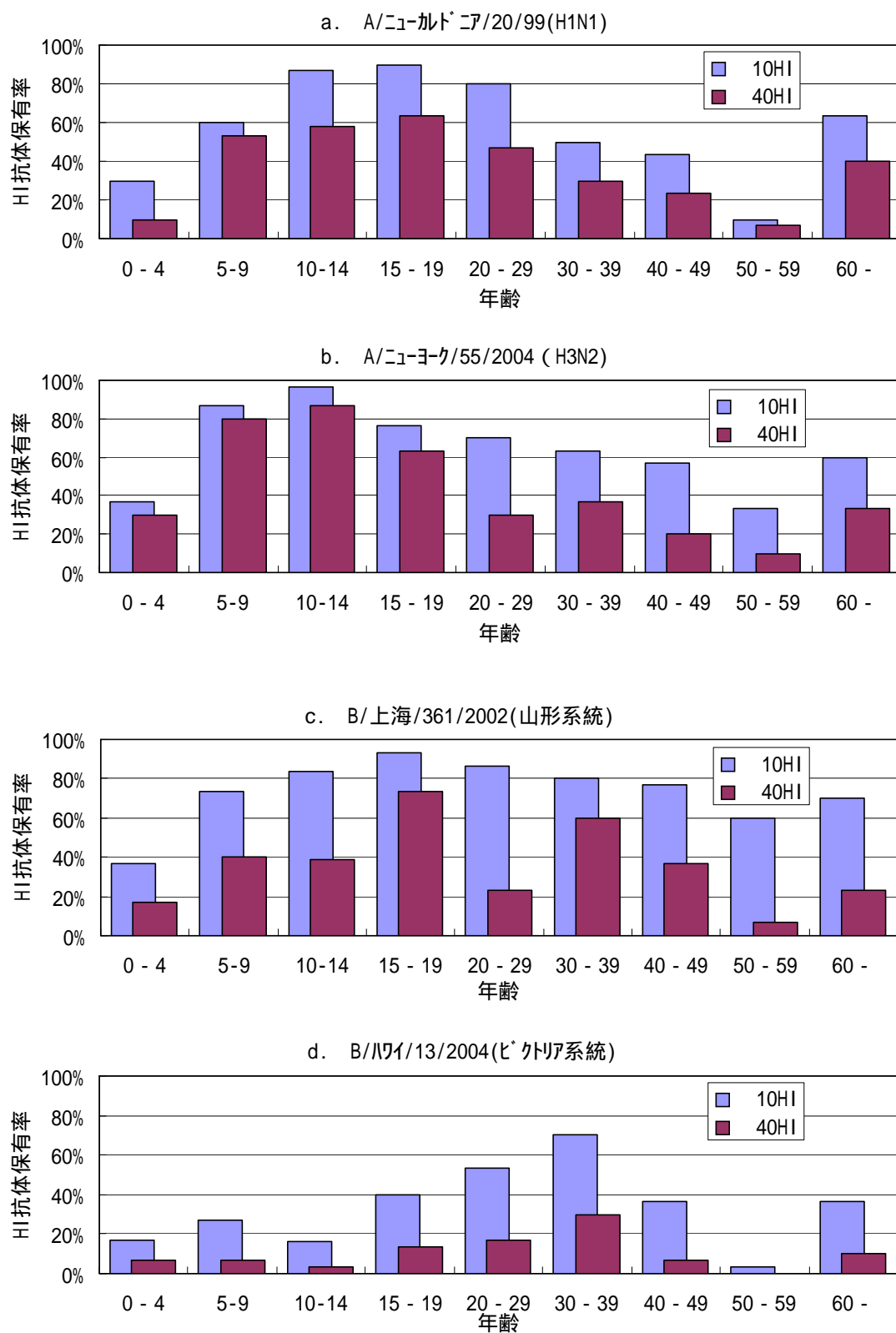
B/上海/361/2002 は、16 年度から 2 期連続してワクチン使用株に採用されている株で“山形系統”に属する。本株に対する抗体保有率は、10HI 価でみると最高が 15~19 歳の 93.3%、最低が 0~4 歳の 36.7%であった。40HI 価でみると最高が 15~19 歳の 73.3%、最低が 50~59 歳の 6.7%であった。山形系統株に対する抗体保有率は前年度よりも全体的に上昇しており、昨年の B 型の流行を反映していると考えられた。(図 1.c)

B/ハワイ/13/2004 は、ワクチン使用株(上海株)とは抗原的に別系統の“ビクトリア系統”に属する。本株に対する抗体保有率は、10HI 価でみると最高が 30~39 歳の 70.0%、最低が 50~59 歳の 3.3%であった。40HI 価でみると最高が 30~39 歳の 30.0%、最低が 50~59 歳の 0.0%であった。ビクトリア系統株に対する抗体保有率は、前年度よりも全体的に上昇していた。ここ数年ビクトリア株の流行が無かったにもかかわらず抗体保有率が上昇した理由として、昨年の B 型流行時に山形系統株で獲得した抗体がビクトリア系統であるハワイ株にも反応したためと考えられた。また、30~39 歳に保有率のピークがあることが特徴であった。(図 1.d)

40HI 価以上の抗体保有者の割合が 50%未満の年齢群をみると、A (H1N1) 型および A (H3N2) 型は 0~4 歳および 20 歳以上の各年齢群、B 型の山形系統は 0~14 歳、20~29 歳および 40 歳以上の各年齢群、B 型のビクトリア系統は全年齢群がそれに該当した。これらの年齢群ではインフルエンザに対する警戒が必要であると考えられた。

(渡邊寿美、尾上洋一、新川隆康)

図1 インフルエンザ感受性調査



2 エイズ

(1) 神奈川県のエイズ感染者・患者数

平成17年の神奈川県のエイズ感染者・患者の合計報告数は2年続けて減少し、前年比13人減の69人であった(表1)。県域、横浜市、川崎市、横須賀市及び相模原市の内訳は、感染症発生動向調査《五類感染症》4ページ表4を参照。

表1 エイズ感染者・患者の性別年次推移(神奈川県)

		平成8年	平成9年	平成10年	平成11年	平成12年	平成13年	平成14年	平成15年	平成16年	平成17年	昭和60年からの累計
男性	総数	42	44	58	64	50	65	62	73	74	59	718
	感染者	23	27	36	39	32	36	40	39	45	41	440
	患者	19	17	22	25	18	29	22	34	29	18	278
女性	総数	13	24	12	15	12	18	7	13	8	10	180
	感染者	10	13	10	15	9	10	7	5	8	7	139
	患者	3	11	2	0	3	8	0	8	0	3	41
合計	総数	55	68	70	79	62	83	69	86	82	69	898
	感染者	33	40	46	54	41	46	47	44	53	48	579
	患者	22	28	24	25	21	37	22	42	29	21	319

(2) エイズ感染者・患者数の性別推移及び全国比

平成8年以降の全国に占める神奈川県の割合は、合計においては低下の傾向にあるが、平成17年の女性の全国比はほぼ1割を占めている。(表2)

表2 エイズ感染者・患者の性別全国比の推移(神奈川県/全国)

		平成8年	平成9年	平成10年	平成11年	平成12年	平成13年	平成14年	平成15年	平成16年	平成17年	昭和60年からの累計
男性	総数	9.2	8.9	11.2	9.5	7.5	8.0	7.7	8.4	7.1	5.3	8.1
	感染者	9.1	9.5	11.3	9.3	8.2	6.7	7.5	6.8	6.4	5.3	7.8
	患者	9.5	8.1	11.0	9.7	6.4	10.3	8.2	11.7	8.4	5.3	8.8
女性	総数	8.4	15.5	9.0	9.7	9.8	13.1	5.9	11.6	6.5	11.1	8.2
	感染者	8.2	11.4	9.7	13.4	12.3	11.5	9.0	7.5	9.8	11.1	8.0
	患者	9.1	26.8	6.5	0.0	6.1	16.0	0.0	17.8	0.0	11.1	8.7
合計	総数	9.0	10.5	10.7	9.5	7.8	8.7	7.5	8.8	7.0	5.8	8.1
	感染者	8.8	10.1	10.9	10.2	8.9	7.4	7.7	6.9	6.8	5.8	7.8
	患者	9.4	11.2	10.4	8.3	6.4	11.1	7.1	12.5	7.5	5.7	8.8

(3) エイズ相談の状況

平成17年のエイズ相談件数は、3年連続で増加し、前年比6.0%増の14,596件であった。横浜市が全体の37.0%を占め、川崎市、県域の順であった。相模原市の増加が顕著である(表3)。

表3 エイズ相談件数年次推移

	平成8年	平成9年	平成10年	平成11年	平成12年	平成13年	平成14年	平成15年	平成16年	平成17年
県域	6,854	3,124	2,916	2,567	2,923	3,582	2,560	2,648	3,462	3,815
横浜市	8,109	5,021	5,729	5,483	5,425	6,316	5,110	5,269	4,891	5,396
川崎市	2,544	1,982	2,455	2,219	2,475	3,361	3,124	3,626	3,972	3,925
横須賀市	1,313	873	906	679	581	484	522	617	603	521
相模原市	-	-	-	-	248	436	291	492	847	939
合計	18,820	11,000	12,006	10,948	11,652	14,179	11,607	12,652	13,775	14,596
前年比(%)		-41.6	9.1	-8.8	6.4	21.7	-18.1	9.0	8.9	6.0

(4) エイズ検査の状況

検査件数は2年連続増加し、前年比8.9%増の7,867件であった。検査件数も横浜市が全体の48.5%を占め、川崎市、県域の順となった(表4)。

表4 エイズ検査実施件数年次推移

	平成8年	平成9年	平成10年	平成11年	平成12年	平成13年	平成14年	平成15年	平成16年	平成17年
県域	2,614	1,663	1,756	1,630	1,235	1,583	1,045	1,026	1,247	1,553
横浜市	3,580	2,619	2,994	2,740	2,787	3,759	2,763	3,036	3,197	3,601
川崎市	1,463	1,192	1,459	1,451	1,405	1,818	1,560	1,802	2,077	1,943
横須賀市	409	233	253	211	195	201	218	237	299	293
相模原市	-	-	-	-	193	357	236	301	401	477
合計	8,066	5,707	6,462	6,032	5,815	7,718	5,822	6,402	7,221	7,867
前年比(%)		-29.2	13.2	-6.7	-3.6	32.7	-24.6	10.0	12.8	8.9

(各表：神奈川県健康増進課資料をもとに作成)

3 ウイルス性感染性胃腸炎

(1) 概況

平成 17 年に発生したウイルス性感染性胃腸炎の集団発生は、前年の 33 事例から 1.7 倍の 58 事例と大幅に増加した。市・域別では県域が倍増の 18 事例、横浜市は 2.3 倍増の 25 事例、川崎市は倍増の 12 事例、横須賀市は 2 減の 1 事例、相模原市は同数の 2 事例であった。

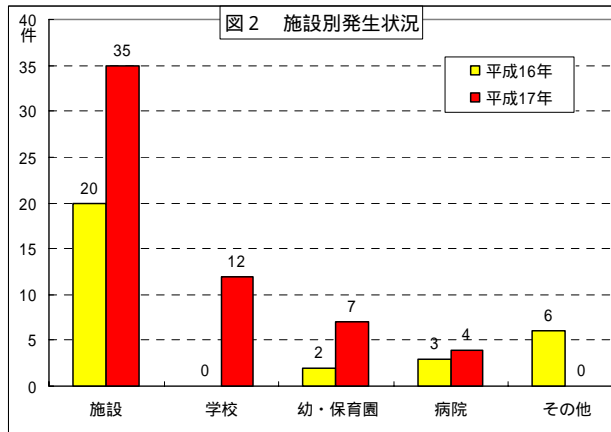
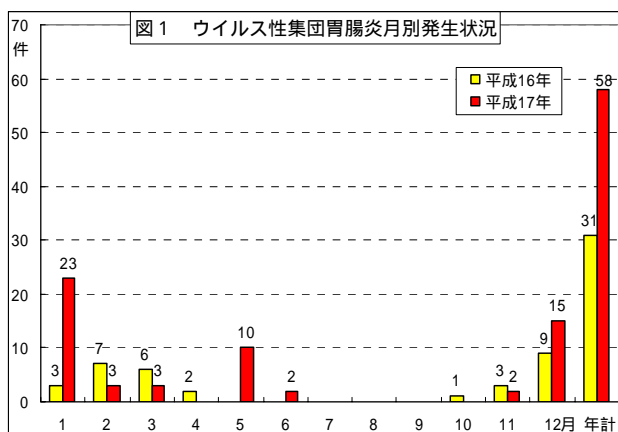
集団発生事例の増加により検査件数は 11.7% 増の 859 人、陽性数は 77.2% 増の 483 人であった。また、神奈川県での陽性率は 35.4% から 56.2% となった（表 1）。

平成 17 年の月別発生状況は、1 月に全体の 4 割の 23 事例が発生し、12 月に 15 事例、平成 16 年には発生しなかった 5 月に 10 事例、6 月に 2 事例発生した（図 1）。

施設別の集団発生状況は、施設（老人）が最も多く、前年比 15 件増の 35 事例、前年発生しなかった学校が 12 事例、幼稚園・保育園が 7 事例の発生となっている（図 2）。

表 1 ウイルス性集団胃腸炎発生状況

	平成 16 年				平成 17 年			
	発生事例数 (件)	検査件数 (人)	陽性数 (人)	陽性率 (%)	発生事例数 (件)	検査件数 (人)	陽性数 (人)	陽性率 (%)
県域	9	272	122	44.9	18	230	133	57.8
横浜市	11	215	73	34.0	25	337	230	68.2
川崎市	6	232	63	27.2	12	217	91	41.9
横須賀市	3	37	6	16.2	1	36	9	25.0
相模原市	2	13	8	61.5	2	39	20	51.3
計	31	769	272	35.4	58	859	483	56.2



(2) 神奈川県域のウイルスによる集団胃腸炎の検査結果

神奈川県衛生研究所

神奈川県域ではウイルスが原因の集団胃腸炎が 18 事例発生した。ノロウイルスが 13 事例より検出され、その遺伝子群は G が 12 事例、G が 1 事例であり G が大部分を占め全国の状況と一致していた。その他にサポウイルスが 2 事例、A 群ロタウイルスが 2 事例、C 群ロタウイルスが 1 事例より検出された。このうちサポウイルス及び C 群ロタウイルスを原因とする事例は、神奈川県域で初めて確認された集団発生であった。

(宮原香代子、片山 丘、古屋由美子、尾上洋一、新川隆康)

表 ウイルス性集団胃腸炎の検出結果

番号	対応機関	発生年月	施設区分	発症者数	検査数	検出数	検出ウイルス	遺伝子群	備考
1	神奈川県衛生研究所	H17.1	施設	23	5	4	ノロウイルス	G	
2	神奈川県衛生研究所	H17.1	施設	11	8	1	ノロウイルス	G	
3	神奈川県衛生研究所	H17.1	施設	5	16	10	ノロウイルス	G	
4	神奈川県衛生研究所	H17.1	施設	34	19	4	ノロウイルス	G	
5	神奈川県衛生研究所	H17.1	施設	3	2	2	ノロウイルス	G	
6	神奈川県衛生研究所	H17.1	施設	11	1	1	ノロウイルス	G	
7	神奈川県衛生研究所	H17.2	施設	33	9	7	ノロウイルス	G	
8	神奈川県衛生研究所	H17.3	施設	18	31	12	A群ロタウイルス		
9	神奈川県衛生研究所	H17.5	学校	145	58	39	サボウイルス		
10	神奈川県衛生研究所	H17.5	施設	9	8	5	A群ロタウイルス		
11	神奈川県衛生研究所	H17.5	学校	30	12	11	サボウイルス		
12	神奈川県衛生研究所	H17.5	学校	19	11	11	C群ロタウイルス		
13	神奈川県衛生研究所	H17.5	学校	19	5	5	ノロウイルス	G1	
14	神奈川県衛生研究所	H17.6	学校	10	14	7	ノロウイルス	G	
15	神奈川県衛生研究所	H17.11	施設	10	11	4	ノロウイルス	G	
16	神奈川県衛生研究所	H17.12	施設	32	10	5	ノロウイルス	G	
17	神奈川県衛生研究所	H17.12	病院	20	3	2	ノロウイルス	G	
18	神奈川県衛生研究所	H17.12	施設	19	7	3	ノロウイルス	G	
18				451	230	133			

(3) 横浜市のウイルスによる集団胃腸炎の検査結果

横浜市衛生研究所

平成17年における横浜市内で発生した感染症としての集団発生事例の取扱事例数は25事例であった。25事例全てからノロウイルスが検出され、その遺伝子群はG が22事例、G が3事例であり、G が全国的と同様に主流であった。また、原因施設別にみると、保育園1、学校2の3事例がG、それ以外の施設では全てがGであった。今年の傾向としては、昨年みられなかった学校で6事例、保育園・幼稚園で前年の1事例から7事例と発生増加が顕著であった。

(野口有三、宇宿秀三、熊崎真琴、佐々木一也)

表 ウイルス性集団胃腸炎の検出結果

番号	対応機関	発生年月	施設区分	発症者数	検査数	検出数	検出ウイルス	遺伝子群	備考
1	横浜市衛生研究所	H17.1	施設	5	2	2	ノロウイルス	G	
2	横浜市衛生研究所	H17.1	施設	3	3	3	ノロウイルス	G	
3	横浜市衛生研究所	H17.1	施設	6	4	4	ノロウイルス	G	
4	横浜市衛生研究所	H17.1	施設	19	10	10	ノロウイルス	G	
5	横浜市衛生研究所	H17.1	施設	6	6	6	ノロウイルス	G	
6	横浜市衛生研究所	H17.1	施設	7	5	5	ノロウイルス	G	
7	横浜市衛生研究所	H17.1	施設	19	3	3	ノロウイルス	G	
8	横浜市衛生研究所	H17.2	施設	7	5	5	ノロウイルス	G	
9	横浜市衛生研究所	H17.5	保育園	88	10	45	ノロウイルス	G1	
10	横浜市衛生研究所	H17.5	学校	10	49	5	ノロウイルス	G	
11	横浜市衛生研究所	H17.5	学校	49	22	23	ノロウイルス	G1	
12	横浜市衛生研究所	H17.5	学校	22	27	13	ノロウイルス	G	
13	横浜市衛生研究所	H17.6	学校	27	23	17	ノロウイルス	G1	
14	横浜市衛生研究所	H17.11	施設	23	13	16	ノロウイルス	G	
15	横浜市衛生研究所	H17.12	保育園	13	5	6	ノロウイルス	G	
16	横浜市衛生研究所	H17.12	保育園	不明	22	2	ノロウイルス	G	
17	横浜市衛生研究所	H17.12	学校	22	13	13	ノロウイルス	G	
18	横浜市衛生研究所	H17.12	保育園	不明	34	5	ノロウイルス	G	
19	横浜市衛生研究所	H17.12	施設	34	13	10	ノロウイルス	G	
20	横浜市衛生研究所	H17.12	幼稚園	13	24	7	ノロウイルス	G	
21	横浜市衛生研究所	H17.12	施設	24	3	5	ノロウイルス	G	
22	横浜市衛生研究所	H17.12	病院	不明	14	3	ノロウイルス	G	
23	横浜市衛生研究所	H17.12	学校	14	13	6	ノロウイルス	G	
24	横浜市衛生研究所	H17.12	保育園	13	9	8	ノロウイルス	G	
25	横浜市衛生研究所	H17.12	保育園	9	5	8	ノロウイルス	G	
25				433	337	230			

(4) 川崎市のウイルスによる集団胃腸炎の検査結果

川崎市衛生研究所

川崎市ではノロウイルスを原因とした集団胃腸炎が 12 例発生した。検出された遺伝子群はすべて G であった。

(奥山恵子、平位芳江)

表 ウイルス性集団胃腸炎の検出結果

番号	対応機関	発生年月	施設区分	発症者数	検査数	検出数	検出ウイルス	遺伝子群	備考
1	川崎市衛生研究所	H17.1	施設		15	4	ノロウイルス	G	
2	川崎市衛生研究所	H17.1	病院		22	20	ノロウイルス	G	
3	川崎市衛生研究所	H17.1	施設		27	6	ノロウイルス	G	
4	川崎市衛生研究所	H17.1	施設		15	8	ノロウイルス	G	
5	川崎市衛生研究所	H17.1	施設		28	9	ノロウイルス	G	
6	川崎市衛生研究所	H17.1	施設		15	4	ノロウイルス	G	
7	川崎市衛生研究所	H17.1	施設		12	8	ノロウイルス	G	
8	川崎市衛生研究所	H17.2	学校		14	3	ノロウイルス	G	
9	川崎市衛生研究所	H17.3	施設		23	10	ノロウイルス	G	
10	川崎市衛生研究所	H17.3	施設		25	8	ノロウイルス	G	
11	川崎市衛生研究所	H17.5	施設		4	2	ノロウイルス	G	
12	川崎市衛生研究所	H17.12	施設		17	9	ノロウイルス	G	
12					217	91			

(5) 横須賀市のウイルスによる集団胃腸炎の検査結果

横須賀市健康安全科学センター

横須賀市ではノロウイルスが原因の集団胃腸炎が 1 事例発生した。検出された遺伝子群は G であった。

(石川英二、河崎正太郎)

表 ウイルス性集団胃腸炎の検出結果

番号	対応機関	発生年月	施設区分	発症者数	検査数	検出数	検出ウイルス	遺伝子群	備考
1	横須賀市健康安全科学センター	H17.1	施設	21	36	9	ノロウイルス	G	

(6) 相模原市のウイルスによる集団胃腸炎の検査結果

相模原市衛生試験所

相模原市ではウイルスを原因とした集団胃腸炎が 2 事例発生した。いずれもノロウイルスによる事例で、遺伝子群は G であった。

(清水壽美子、田向香織、榊原幸枝、前谷文恵、笹野亜也子)

表 ウイルス性集団胃腸炎の検出結果

番号	対応機関	発生年月	施設区分	発症者数	検査数	検出数	検出ウイルス	遺伝子群	備考
1	相模原市衛生試験所	H17.1	施設	27	3	2	ノロウイルス	G	
2	相模原市衛生試験所	H17.1	病院	90	10	5	ノロウイルス	G	
2				117	13	7			

4 ウエストナイル熱

(1) 概況

平成 17 年は、川崎市内で海外感染者の国内第 1 例の報告があったが、国内での感染例はなく、また鳥や蚊等の調査ではウエストナイルウイルスは検出されていない。

神奈川県内では、平成 15 年からウエストナイル熱媒介蚊のサーベイランスを行っており、平成 17 年は蚊の採取箇所を前年より 8 箇所増やし 40 箇所採取した。採取した蚊 7,938 匹を検査したが、結果はすべての検体でウエストナイルウイルス遺伝子は検出されなかった。

表 ウエストナイル熱媒介蚊のサーベイランス

	平成15年			平成16年			平成17年		
	採取箇所数 (箇所)	検体数 (匹)	WNV遺伝子 検出件数 (件)	採取箇所数 (箇所)	検体数 (匹)	WNV遺伝子 検出件数 (件)	採取箇所数 (箇所)	検体数 (匹)	WNV遺伝子 検出件数 (件)
県域	2	29	0	2	36	0	2	44	0
横浜市	20	2,168	0	22	8,637	0	25	6,587	0
川崎市	7	301	0	7	329	0	12	1,293	0
横須賀市	1	11	0	1	18	0	1	14	0
計	30	2,509	0	32	9,020	0	40	7,938	0

(2) ウエストナイル熱媒介蚊のサーベイランス

神奈川県衛生研究所

近年、アメリカではウエストナイルウイルスが流行し、ウエストナイル熱・脳炎患者が発生している。ウエストナイル熱・脳炎はウエストナイルウイルスに感染したイエカやヤブカなどの蚊に刺されることによって起こる病気である。このウイルスは自然界においては、鳥と蚊の間で感染環が維持されている。これまで日本では患者の発生はなく、成田空港周辺等、一部の地域で行われていた鳥や蚊等の調査でもウエストナイルウイルスは検出されていない。

しかし、ウエストナイルウイルスの侵入監視・流行予測の観点から、県域の蚊を捕獲しウイルス遺伝子の検出を試みた。

蚊は平成 17 年 7 月から 10 月までの期間に、月 2 回合計 8 回、厚木保健所管内、大和保健所管内の 2 箇所で、捕獲機（ライトトラップ）を用いて捕獲した。

捕獲された蚊は、ヒトスジシマカ（メス）40 匹、ヒトスジシマカ（オス）11 匹、アカイエカ（メス）4 匹、アカイエカ（オス）1 匹と同定された。これらの蚊のうち人を吸血するメス 44 匹を 7 プールとして遺伝子検査を行ったが、すべての検体でウエストナイルウイルス遺伝子は検出されず、ウエストナイルウイルスの感染は確認されなかった。今後もウエストナイルウイルスの動向を監視するために、蚊の調査を継続する必要があると考えられた。

（伊達佳美、稲田貴嗣、古屋由美子、尾上洋一、新川隆康）

表 神奈川県域における蚊のウエストナイルウイルス遺伝子検査状況

番号	採取月日	採取場所	蚊の種類	匹数	結果
1	7月26、27日	厚木・大和保健所	ヒトスジシマカ	3	陰性
2	7月26日	厚木保健所（屋内）	ヒトスジシマカ	8	陰性
3	7月26日	厚木保健所（屋内）	アカイエカ群	4	陰性
4	8月9、10日	厚木・大和保健所	ヒトスジシマカ	13	陰性
5	8月23、24日	厚木・大和保健所	ヒトスジシマカ	11	陰性
6	9月28日	厚木保健所	ヒトスジシマカ	1	陰性
7	10月18日	厚木保健所	ヒトスジシマカ	4	陰性
計				44	

(3) ウエストナイルウイルスのサーベイランス

横浜市衛生研究所

近年、米国におけるウエストナイルウイルス(=WNV)の流行に伴い、横浜市は行政的な防疫対策として死亡カラスと蚊を用いたWNVのサーベイランス事業を平成15年7月15日から実施している。

蚊における調査は、昨年度と同様にドライアイス併用のライトトラップにより採集された蚊を用いて行った。ライトトラップの設置場所は、緑政局管理の公園計18箇所(各区1カ所)及び港湾局管理の敷地内2箇所の合計20箇所と、昨年度中区の独自事業として追加した2箇所(大黒橋と畜犬センター)と今年度新たに鶴見区の独自事業で追加した3箇所(入船公園、ふれーゆ、大黒町スポーツ公園)の総計25箇所である。

採集方法としては、毎週火曜日の夕方にライトトラップを設置し、翌日の朝にライトトラップと採集された蚊を回収する方法で行い、午前中までに当所へ蚊が搬入された。これら一連のライトトラップの設置、検体(死亡カラスと蚊)の回収、当所への検体の搬送に関しては、神奈川県ベストコントロール協会に委託して実施した。

鶴見区の独自事業は、6月～9月までの月1回の採集を行い、残りの22箇所は全20週採集され、検査した蚊の総個体数は、6,587匹であった。

蚊の種類別ではアカイエカ群2,368匹、ヒトスジシマカ3,198匹、コガタアカイエカ496匹、その他305匹であった。WNVと日本脳炎ウイルス(JEV)の検査結果は、全て不検出であった。

(野口有三、宇宿秀三、熊崎真琴、小曾根恵子、植木聡、佐々木一也)

回数	1～3					総計	内 訳					
	6月	7月	8月	9月	10月		アカイエカ群	ヒトスジシマカ	コガタアカイエカ	ヤマトヤブカ	その他	
	小計	小計	小計	小計	小計							
区名	トラップ設置公園											
緑政局(公園)トラップ設置場所												
1 鶴見	馬場花木園	90	174	227	159	37	687	16	661	3	2	5
2 神奈川	三ツ沢公園	57	307	80	64	46	554	10	538	1	0	5
3 西	野毛山公園	28	183	126	78	28	443	119	232	7	54	31
4 中	根岸森林公園	133	272	175	109	20	709	415	250	14	20	10
5 南	清水ヶ丘公園	22	41	20	15	4	102	24	57	2	4	15
6 港南	久良岐公園	9	63	28	16	13	129	27	84	4	2	12
7 保土ヶ谷	横浜市児童遊園地	31	57	25	25	9	147	25	79	1	4	38
8 旭	こども自然公園	22	42	24	14	28	130	24	41	3	20	42
9 磯子	根岸なつかし公園	10	58	21	44	6	139	17	92	11	8	11
10 金沢	長浜公園	22	58	127	51	12	270	39	206	11	6	8
11 港北	岸根公園	15	50	61	40	35	201	142	43	12	1	3
12 緑	霧が丘公園	5	39	20	32	7	103	1	75	2	22	3
13 青葉	桜台公園	4	30	14	11	2	61	10	44	6	0	1
14 都筑	都筑中央公園	14	46	23	22	26	131	2	83	1	33	12
15 戸塚	舞岡公園	18	20	14	10	5	67	1	31	0	23	12
16 栄	飯島わんわん公園	5	37	60	43	2	147	38	90	3	2	14
17 泉	泉中央公園	13	26	18	14	18	89	1	41	0	6	41
18 瀬谷	瀬谷狹窪公園	18	5	19	19	11	72	1	27	0	10	34
港湾局トラップ設置場所												
19 中	シンボルタワー	200	668	205	229	227	1529	1097	39	386	3	4
20 鶴見	大黒中央公園	26	101	60	83	88	358	164	176	18	0	0
中区独自事業												
21 中	大黒橋	13	4	3	3	3	26	25	0	1	0	0
22 中	本牧市民公園	27	25	16	32	6	106	31	63	8	0	4
鶴見区独自事業												
23 鶴見	入船公園	28	23	19	3	-	73	61	12	0	0	0
24 鶴見	ふれーゆ	5	3	0	1	-	9	8	0	1	0	0
25 鶴見	大黒町スポーツ広場	31	105	55	114	-	305	70	234	1	0	0
総 計		846	2437	1440	1231	633	6587	2368	3198	496	220	305
WNV検査結果		(-)	(-)	(-)	(-)	(-)						
JEV検査結果		(-)	(-)	(-)	(-)	(-)						

(備考) 蚊の種類その他には、キンバラナガハシカ等が含まれる

(4) ウエストナイル熱媒介蚊のサーベイランス

川崎市衛生研究所

市内 7 箇所の保健所に設置したライトトラップに捕獲された蚊を毎週 1 回採取し、平成 17 年 4 月 6 日から 11 月 24 日まで(全 33 週 137 回)の蚊におけるウエストナイルウイルスの保有状況 137 件、また、ヒトスジシマカにおいてはデングウイルスの保有状況 41 件も併せて調査した。

市内 4 箇所の公園に設置したライトトラップに捕獲された蚊を毎週 1 回採取し、平成 17 年 6 月 13 日から 10 月 25 日まで(全 20 週 124 回)の蚊におけるウエストナイルウイルスの保有状況 124 件を、また、ヒトスジシマカにおいてはデングウイルスの保有状況 30 件も調査した。

検査は PCR 法を用いて行った。1,293 匹の蚊においてウエストナイルウイルス遺伝子はすべて陰性であった。

また、ヒトスジシマカ 300 匹のデングウイルス遺伝子もすべて陰性であった。蚊の種類はアカイエカ群が全体の 65.3%(844/1293)、ヒトスジシマカが 23.2%(300/1293)、オオクロヤブカ 5.7%(74/1293)、ヤマトヤブカ 3.9%(50/1293)、コガタアカイエカは 1.0%(13/1293)であった。

(清水英明 奥山恵子 平位芳江)

表 川崎市の WNV サーベイランス調査における蚊の月別および種別採集数

保健所検査分

採取日 2005年	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	総計
川崎保健所		1	4	13	12	8	8	7	53
幸保健所	1	1	2	4	5	1	3	1	18
中原保健所			1	2	3	2	4	1	13
高津保健所			2	4	4	1	3		14
宮前保健所			1	4					5
多摩保健所			1	1	1	3	1		7
麻生保健所	3	1	4	5	9	4	2		28
合計	4	3	15	33	34	19	21	9	138
蚊の種類									
アカイエカ群	21	7	31	82	42	22	22	6	233
ヒトスジシマカ			4	28	44	22	6	3	107
コガタアカイエカ					3		4	1	8
総計	21	7	35	110	89	44	32	10	348
ウエストナイルウイルス遺伝子の検出結果	陰性	陰性	陰性	陰性	陰性	陰性	陰性	陰性	陰性
デングウイルス遺伝子の検出結果			陰性	陰性	陰性	陰性	陰性	陰性	陰性

公園検査分

採取日 2005年	6月	7月	8月	9月	10月	総計
東扇島中公園	3	6	3	5	3	20
夢見ヶ崎動物公園	8	10	8	12	8	46
緑ヶ丘霊園	4	8	10	4	3	29
早野聖地公園	3	7	11	6	2	29
合計	18	31	32	27	16	124
蚊の種類						
アカイエカ群	100	232	56	149	74	611
ヒトスジシマカ	8	29	70	77	9	193
コガタアカイエカ		2	3			5
ヤマトヤブカ	15	22	5	6	2	50
オオクロヤブカ	10	8	22	25	9	74
シナハマダラカ		1				1
カツライエカ			4	1		5
キンバラナガハシカ		1	1	4		6
合計	133	295	161	262	94	945
ウエストナイルウイルス遺伝子の検出結果	陰性	陰性	陰性	陰性	陰性	陰性
デングウイルス遺伝子の検出結果	陰性	陰性	陰性	陰性	陰性	陰性

備考 検体は全てメス

(5) ウエストナイル熱媒介蚊のサーベイランス

横須賀市健康安全科学センター

昨年に引き続きウエストナイルウイルス媒介蚊の調査として平成17年7月から10月までの各月1回、7、8、9、10月は横須賀市衛生試験所敷地内にて蚊を捕獲（ライトトラップ法）し、分類した後、神奈川県衛生研究所にPCR法による遺伝子検査を依頼した。結果は表に示すとおりである。

今後もウエストナイルウイルスの国内侵入、流行を監視するため、引き続き調査を行っていくことが必要であると思われる。

表 ウエストナイルウイルス遺伝子検査結果

	採取日	種類	匹数	結果
7月分	7月21日	ヤブカ類	2匹	陰性
7月分	7月21日	イエカ類	4匹	陰性
8月分	8月29日	イエカ類	3匹	陰性
8月分	8月29日	ヤブカ類	3匹	陰性
9月分	9月13日	ヤブカ類	2匹	陰性
10月分	10月12日	イエカ類	2匹	陰性

5 その他のウイルス性感染症

(1) 日本脳炎

ア 概況

全国では日本脳炎患者は毎年5～8人程度の報告があるが、神奈川県内では平成2年を最後に発生報告はない。神奈川県衛生研究所では豚の日本脳炎ウイルス抗体保有状況調査を行っており、豚の日本脳炎ウイルス抗体の保有率は低い(下記(2))。また、横浜市衛生研究所ではウエストナイルウイルス(WNV)のサーベイランス事業として採取した蚊の日本脳炎ウイルスの検査を実施しており、蚊から日本脳炎ウイルスは検出されていない(34ページ)。

イ 日本脳炎感染源調査

神奈川県衛生研究所

近年におけるわが国の日本脳炎患者は、西日本を中心に発生が見られている。日本脳炎ウイルスの侵淫度を追跡し流行予測を行うため、豚の日本脳炎ウイルス抗体保有状況を調査した。

神奈川食肉センターに持ち込まれた生後5～8か月齢の県内産の豚を対象に、平成17年7月から9月までの期間に、8回、20頭ずつ、計160頭について、血中のJaGAR01株に対する赤血球凝集抑制抗体および2-ME感受性抗体をそれぞれ測定した。

平成13年以降4年ぶりに、9月に検査した60検体中12検体から赤血球凝集抑制抗体が検出され、そのうち8検体から2-ME感受性抗体が検出され、この時期に県内でも日本脳炎ウイルスが活動していたと推察された。神奈川県では平成17年度も平成16年度と同様に、患者発生はなかった。

(伊達佳美、古屋由美子、尾上洋一、新川隆康)

採血月日	検体件数	HI抗体価								抗体保有率 (%)	2ME感受性 抗体保有率
		<10	10	20	40	80	160	320	640		
7.21	20	20								0.0	
7.28	20	20								0.0	
8.2	20	20								0.0	
8.25	20	20								0.0	
8.30	20	20								0.0	
9.13	20	18				2				10.0	2/2 = 100%
9.22	20	13		1	1	2	3			35.0	5/6 = 83.3%
9.27	20	17				2		1		15.0	1/3 = 33.3%
計	160										

(2) 神奈川県域における麻疹抗体保有状況

神奈川県衛生研究所

昭和53年から義務接種として始まった、わが国の麻疹ワクチンの接種は、平成6年10月の予防接種法改正にとともに勸奨性になった。小児の麻疹ウイルスに対する免疫状態を把握しておくことが必要なことから、昭和54年以降、麻疹ウイルスに対する抗体の保有状況調査を行っている。

平成17年8月から12月の間に採取された小児の血清91例について、麻疹ウイルス抗原を吸着してあるゼラチン粒子による凝集反応法で麻疹ウイルスに対する抗体の測定を行った。

年齢別の抗体保有率は1歳以下が61.5%、他の年齢層(2～14歳)は92.9～100%を示し、平均抗体

保有率は91.2%であった。

現在の予防接種が個人接種法で行われていることから、予防接種率の低下が予想される。今後も継続して麻疹ウイルスに対する抗体保有状況の把握を行うとともに、予防接種の必要性と麻疹に関する適切な知識を普及してゆくことが大切と思われる。

(古屋由美子、片山 丘、尾上洋一、新川隆康)

麻疹抗体保有状況

抗体価 年齢(歳)	平成17年(採血 17年8月~12月)										16年	15年	14年	13年	
	抗体価									検査数 (人)	陽性率 (%)	陽性率 (%)	陽性率 (%)	陽性率 (%)	
	<8	8	16	32	64	128	256	512	1024						
0-1	5	2	1	1		1	1		2	13	61.5	73.7	76.2	46.7	42.9
2-3						1		1	10	12	100.0	100.0	100.0	76.9	100.0
4-5							3	3	4	10	100.0	100.0	100.0	100.0	90.0
6-7				1	2		2	1	5	11	100.0	100.0	100.0		88.9
8-9	1			1			2	3	7	14	92.9	100.0	100.0	76.9	
10-14	2					4	9	3	13	31	93.5	93.9	88.5	96.6	86.7
合計(人)	8	2	1	3	2	6	17	11	41	91	91.2	92.2	90.7	83.1	80.6
(%)	8.8	2.2	1.1	3.3	2.2	6.6	18.7	12.1	45.1	100.0					

(3) 神奈川県域における風疹抗体保有状況

神奈川県衛生研究所

風疹流行の予測とその推移を知るため、住民の風疹ウイルスに対する感受性の実態を把握しておくことは重要である。平成17年においては、一般健康人男女190名を対象として、風疹ウイルスに対する赤血球凝集抑制抗体の測定を行った。

結果は年齢別抗体保有状況を陰性率で見ると、1歳以下70.0%、1~4歳25.0%、5~9歳10.0%、10~14歳45.0%、15歳以上7.1~25.0%となり平均陰性率は22.1%であった。

次に抗体価をみると16~128倍が70.5%を占め、平均抗体価は $2^{5.5}$ であった。

以上の成績より、抗体保有率の低い年齢層が今後の感染と流行の主体になると考えられる。現在、生後12~90か月を対象にワクチン接種が実施されているが、これらの年齢層の抗体保有状況の推移を監視するとともに、妊娠前および妊娠可能年齢層への風疹ワクチン接種は継続して奨励する必要があると思われる。

(古屋由美子、片山 丘、尾上洋一、新川隆康)

風疹抗体保有状況

抗体価 年齢(歳)	平成17年(採血 17年8月~12月)										16年	15年	14年	13年	
	抗体価									検査数 (人)	陰性率 (%)	陰性率 (%)	陰性率 (%)	陰性率 (%)	
	<8	8	16	32	64	128	256	512	1024						
<1	7	1	1	1						10	70.0	12.5	50.0	38.5	100.0
1-4	5		2	3	6	3	1			20	25.0	35.0	30.0	41.2	45.0
5-9	2	1	3	10	4					20	10.0	5.0	10.0	20.0	45.0
10-14	9		5	3	3					20	45.0	40.0	35.0	35.0	30.0
15-19	3	3	5	4	1	2	2			20	15.0	20.0	20.0	10.0	15.0
20-24	4			5	3	4				16	25.0	25.0	25.0	22.2	9.1
25-29	3	1	2	3	2	3				14	21.4	10.5	22.2	20.0	15.8
30-34	2		3	3	6	1	1			16	12.5	6.3	12.5	14.3	20.0
35-39	1	1	2	2	3	3	2			14	7.1	14.3	0.0	26.7	0.0
40-49	4		4	3	5	4				20	20.0	15.0	30.0	15.0	25.0
50	2	1	3	9	4	1				20	10.0	5.0	5.0	5.0	10.0
合計(人)	42	8	30	46	37	21	6	0	0	190	22.1	17.5	20.4	21.8	25.0
(%)	22.1	4.2	15.8	24.2	19.5	11.1	3.2	0.0	0.0	100.0					

細菌性感染症

1 腸チフス・パラチフス

(1)概況

平成 17 年に報告のあった腸チフスは 2 件、パラチフスは 6 件、合計 8 件であった（2 ページ表 1 参照）。前年に比し、腸チフスは 4 件減し、パラチフスは同数の報告であったが、チフス菌が分離されたのは下表の 5 件であった。

表 神奈川県内で分離されたチフス菌等のフェージ型別結果

番号	分離月日	性別	年齢	菌種	フェージ型	備考
1	横浜市衛生研究所 H17.4.22	男	26	パラチフスA	4	ネパールへ帰省
2	横浜市衛生研究所 H17.10.21	男	24	パラチフスA	2	タイ・カンボジア・インドへ渡航
3	横浜市衛生研究所 H17.10.24	女	20	チフス	E1	インドへ渡航
4	横浜市衛生研究所 H17.10.26	女	31	パラチフスA	2	タイへ渡航
5	相模原市内病院 H17.9.3	女	24	パラチフスA	UT	中国

(2) 横浜市のチフス菌等のフェージ型別結果

横浜市衛生研究所

平成 17 年 1 月～12 月の間に横浜市内で分離されたチフス菌は 1 件で、パラチフス A 菌は 3 件であった。チフス菌、パラチフス A 菌共に全ての株は海外旅行歴のある患者から分離されており、旅行先はネパール、タイ、カンボジア、インドであった。このうち、ネパールに渡航した患者は日本に住んでいるネパール人で、発症 1 か月ほど前に本国へ帰省したため、その際感染したと思われる。

これらの菌が分離された検体は静脈血であった。情報とチフス菌のフェージ型別内訳は前記の表に示したとおりである。薬剤感受性は、今年分離された全ての株が NA 耐性になっておりフルオロキノロン系薬剤による治療がうまくいかない例も報告されている。今後とも薬剤感受性の動向を監視していきたい。

（松本裕子、山田三紀子、武藤哲典）

(3) 相模原市で分離されたチフス菌等のフェージ型別結果

相模原市衛生試験所

相模原市で分離されたパラチフス A 菌は、9 月 18 日に K 病院にて同定された（前記表）。その後、9 月 13 日に国立感染症研究所細菌第一部へフェージ型の検査依頼し、10 月 20 日に分離菌株のフェージ型は UT と判明した。

患者本人の行動については、平成 17 年 7 月 22 日～8 月 12 日まで中国へ帰省。8 月 18 日から風邪様の発熱及び下痢の症状を呈した。8 月 29 日に同病院に入院し、9 月 3 日に血液培養にてパラチフス A 陽性と判明した。その後、順調に回復し、9 月 9 日、12 日の検便は全て陰性となり、終息に至った。

（前谷史恵、清水壽美子、田向香織、榊原幸枝、笹野亜也子）

2 細菌性腸管系感染症

(1) 概況

平成 17 年の下痢症患者等の病原菌検出状況は下表のとおりであった。検体数は 1,111 件、病原菌分離件数は 167 件、分離率は 15.0% であった。市・域別の検出状況は(2)以下に記載。

表 腸管系病原菌検出状況

	平成 15 年			平成 16 年			平成 17 年			対象者
	検体数 (件)	病原菌 分離件数 (件)	病原菌 分離率 (%)	検体数 (件)	病原菌 分離件数 (件)	病原菌 分離率 (%)	検体数 (件)	病原菌 分離件数 (件)	病原菌 分離率 (%)	
県域	68	21	30.9	10	7	70.0	47	9	19.1	下痢症患者
横浜市	55	4	7.3	168	2	1.2	60	2	3.3	海外渡航下痢症・接触者等
川崎市	559	90	16.1	685	110	16.1	732	119	16.3	下痢症患者等
横須賀市	286	32	11.2	310	32	10.3	243	37	15.2	下痢症患者等
相模原市	19	19	100.0	16	16	100.0	29	0	0.0	患者家族等
計	987	166	16.8	1,189	167	14.0	1,111	167	15.0	

(2) 散発下痢症からの病原菌分離状況について

神奈川県衛生研究所

神奈川県における感染症発生動向調査の一環として、県内小児科医院一般検査定点の外来患者を対象に、感染性下痢症が疑われる患者の便材料について腸管系病原菌の検索を行った。平成 17 年 1～12 月の間に実施した 47 件の直接培養法での検索結果を表に示した。

腸炎起因菌として推定し得た症例および不確実ながらその疑いがある菌を検出した症例は、47 症例中 9 症例 (19.1%) あり、38 症例 (80.9%) は既知腸管系病原菌を検出できなかった。9 症例から検出された菌種は、腸管病原性大腸菌 (EPEC) 8 症例、エロモナス・キャビエ 1 症例であった。

EPEC の血清型は 01、018 各 2 株、06、025、027、0166 が各々 1 株であり、これら分離株について志賀毒素 (*Stx*) 遺伝子の保持について検索したところ、いずれの株も *Stx* 遺伝子は保持しておらず、三類感染症対象菌ではなかった。

(鈴木理恵子 三宅芳枝 新川隆康)

表 散発下痢症における病原菌分離状況 (平成 17)

推定原因菌	症例	(%)
腸管病原性大腸菌 (EPEC)	8	17.0
エロモナス・キャビエ	1	2.1

(3) 海外渡航者からの病原菌分離状況

横浜市衛生研究所

昭和 54 年以来海外渡航者による腸管系病原菌の持ち込みを調査する目的で、市内在住の海外渡航者とその家族および接触者を対象とした病原菌検索を行っている。今回は、平成 17 年 1 月から 12 月までの 1 年間に取扱った検体 64 件のうち、2 回以上検査した者を除く 60 件の病原菌検査結果を報告する。

各種病原菌の分離・同定検査は前年と同じ検査方法で、大腸菌のエンテロトキシン検索は逆受身ラテックス凝集法および PCR 法で行った。なお腸管病原性大腸菌は、血清型のみを検査である。

60 件中 2 件(3.3%) から 2 株の病原菌が分離された。1 件はインドネシアへの旅行者で、下痢を呈していた下痢現症者から *S. Newport* が検出された。他の 1 件はベトナムに旅行し *S. sonnei* が検出された患者の家族から *S. Infantis* が検出された。

以上の成績は実際に海外から持込まれていると予想される病原菌の一部に過ぎないと思われる。海外渡航者によってもたらされる腸管病原菌の国内における下痢症の流行への影響を考慮し、今後も検査を続けていきたい。

(山田三紀子、武藤哲典、北爪晴恵、鈴木正樹、松本裕子、石黒裕紀子)

表 海外渡航者からの腸管系病原菌検出状況 (平成17年)

被検者種別	下痢現症者	下痢申告者	健康者	合計
件数	4	1	55	60
陽性者数	1		1	2
毒素原性大腸菌				
組織進入性大腸菌				
腸管病原性大腸菌				
コレラ菌				
腸炎ビブリオ				
NAGビブリオ				
赤痢菌				
パラチフスA菌				
サルモネラ	1		1	2
カンピロバクター				
プレジオモナス				
エロモナス				

(4) 下痢症患者からの腸管病原菌検出状況

川崎市衛生研究所

平成 17 年 1 月～12 月までに川崎市内の医療機関を訪れた下痢症患者を対象にして腸管系病原菌検査を実施した。

材料は、市内医療機関に Cary-Blair の輸送培地を配布し、医療機関を訪れた下痢症患者から大便を採取し、保健所を經由して搬入された検体について検査を行った。検査方法は、前年と同様に行った。

病原菌検出状況は表 1 に示すとおり、検体数 723 件中、腸管病原菌陽性数 119 件 (16.4%) であり、赤痢菌 1 件(0.1%)、サルモネラ 9 件 (1.2%)、腸管病原性大腸菌 (EPEC) 10 件(1.4%)、腸管出血性大腸菌 (EHEC) 1 件 (0.1%)、毒素原性大腸菌(ETEC) 1 件(0.1%)、腸炎ビブリオ 13 件 (1.8%)、カンピロバクター・ジェジュニ 84 件 (11.6%)、エルシニア・エンテロコリチカ 1 件(0.1%)、プレジオモナス・シゲロイデス 1 件 (0.1%) の検出であり、検出病原菌のうちカンピロバクター・ジェジュニが 70.6%を占

め、下痢症患者の主要病原菌であった。同一患者から2菌種の病原菌が検出された事例は2事例みられた。

検出病原菌の血清型は表2に示すとおりである。サルモネラは9株分離され、5血清型に型別された。*S. Enteritidis*が4株、*S. Typhimurium*が2株、*S. Derby*、*S. Kapemba*、*S. Singapore*がそれぞれ1株ずつであった。EPECは6血清型に型別され、O26が3株、O126、O128が2株ずつ、O114、O125、O166が1株ずつであった。EHECはO157:H7(VT1;VT2)1株、ETECはO169(ST)が1株であった。

腸炎ピブリオは14株分離され、8血清型に型別された。分離菌株の耐熱性溶血毒は全て陽性であった。その他赤痢菌1件は*S. sonnei*、エルシニア・エンテロコリチカ1件はO3であった。

以上のように本市内の下痢症患者から腸管系病原菌が16.4%検出され、カンピロバクター・ジェジュニが11.6%と最も多く検出された。また、その他の食中毒菌も低率ながら分離されていることから今後も細菌性下痢症の原因菌追究のため検査を強化していく必要があると思われる。

(小嶋由香 本間幸子 須藤始代 駒根綾子 岡田京子 小川正之)

表1 散発下痢症からの病原菌検出状況(平成17年)

月	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	計
検体数	51	32	50	54	43	60	94	106	81	46	47	59	723
陽性数	2	2	9	8	4	12	23	25*	15	7	5	7	119*
(%)	(3.9)	(6.3)	(18.0)	(14.8)	(9.3)	(20.0)	(24.5)	(23.6)	(18.5)	(15.2)	(10.6)	(11.7)	(16.4)
赤痢菌		1											1(0.1)
サルモネラ	1		1		1		3	1	1			1	9(1.2)
腸管病原性大腸菌			1	1			3	2*		3			10(1.4)
腸管出血性大腸菌							1						1(0.1)*
毒素原性大腸菌			1										1(0.1)
腸炎ピブリオ						1	1	8*	3				13(1.8)*
カンピロバクター・ジェジュニ	1	1	6	6	3	11	15	15*	11	4	5	6	84(11.6)*
エルシニア・エンテロコリチカ				1									1(0.1)
プレシホリス・シゲロゲス								1*					1(0.1)*

備考：*印は、同一人から2菌種の病原菌が検出された事例(2事例)

表2 検出病原菌の血清型(平成17年)

病原菌	株数	菌種および血清型
赤痢菌	1	<i>S. sonnei</i> (1)
サルモネラ	9	<i>S. Enteritidis</i> (4)、 <i>S. Typhimurium</i> (2)、 <i>S. Derby</i> (1)、 <i>S. Kapemba</i> (1)、 <i>S. Singapore</i> (1)
腸管病原性大腸菌	10	O26(3)、O126(2)、O128(2)、O114(1)、O125(1)、O166(1)
腸管出血性大腸菌	1	O157:H7(VT1;VT2)(1)
毒素原性大腸菌	1	O169(ST)(1)
腸炎ピブリオ	14	K6(4)、K12(3)、K68(2)、K5(1)、K7(1)、K25(1)、K57(1)、KUT(1)
エルシニア・エンテロコリチカ	1	O3(1)

(5) 横須賀市の散発下痢症からの腸管系病原菌検出状況

横須賀市健康安全科学センター

平成17年1月から17年12月の1年間に実施した市内各医療機関からの下痢・腹痛を主症状とする患者糞便及び菌株材料の腸管系病原菌検査の結果について報告する。

材料は菌株材料 186 件、糞便材料 57 件の合計 243 件で、検査方法は定法により行った。

病原菌検出状況は表 1 に示す。検査した 243 件全ての内、陽性数は 37 件(15.2%)であった。陽性の内訳は、腸管出血性大腸菌 O157 と腸管病原性大腸菌が各々12 株、サルモネラと毒素原性大腸菌が各々 5 株、腸管出血性大腸菌 O157 以外が 2 株、赤痢菌が 1 株であった。

検出病原菌の血清型は表 2 に示す。赤痢菌は *S. sonnei* が 1 株、サルモネラは *S. Thompson*、*S. Infantis*、*S. Montevideo*、*S. Cerro*、*S. Alachua* が各々1 株、腸管出血性大腸菌は O157:H7 が 12 株、腸管出血性大腸菌以外は O26:H11 が 2 株、毒素原性大腸菌は O6:H16 が 2 株、O25:NM が 3 株、腸管病原性大腸菌は昨年までは O111:H21 が多く検出されたが、今回は O128:H12 が 8 株と最も多く、次いで O126:H27 が 3 株、O111:H21 は 1 株であった。

以上、本年は昨年に比べ腸管出血性大腸菌 O157:H7 の検出例が多かった。これは同一人からの経過観察で菌が複数回検出されたためであった。また、今回検出されたサルモネラ 5 株は全て健常者由来であった。今回の調査においても昨年同様、全ての検出病原菌に対する腸管出血性大腸菌及び腸管病原性大腸菌、毒素原性大腸菌の占める割合は 83.8%と多く占めていた。今後もこれら散発下痢症患者の病原菌検査について引続き実施していく予定である。

(山口純子、天野肇、蛭田徳昭、増山 亨)

表1 散発下痢症からの病原菌検出状況 (平成17年)

月	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	計
検体件数	22(5)	15(1)	19(1)	21(0)	13(0)	13(0)	34(3)	36(3)	18(1)	21(1)	14(1)	17(0)	243†(16)*
陽性数	0(0)	1(0)	2(1)	1(0)	2(0)	1(0)	9(0)	6(0)	6(1)	7(1)	0(0)	2(0)	37(3)*
%	0.0	6.7	10.5	4.8	15.4	7.7	26.5	16.7	33.3	33.3	0.0	11.8	15.2
病原菌													
赤痢菌				1(0)									1(0)
サルモネラ		1(0)							1(0)	3(0)			5(0)
腸管出血性大腸菌 O157							6(0)*	3(0)*	3(0)*				12(0)*
腸管出血性大腸菌 O157以外							1(0)	1(0)					2(0)
毒素原性大腸菌				1(1)				1(0)	1(1)	2(1)			5(3)
腸管病原性大腸菌			1(0)		2(0)	1(0)	2(0)	1(0)	1(0)	2(0)		2(0)	12(0)

備考： † 印の内訳 (菌株 186件、糞便 57件)

* 印は4例の経過観察者からの複数回検出例ある。

()は海外渡航者由来を示す。

表2 検出病原菌の血清型 (平成17年)

病原菌	株数	菌種及び血清型
赤痢菌	(1)	<i>S. sonnei</i> (1)
サルモネラ	(5)	<i>S. Thompson</i> (1), <i>S. Infantis</i> (1), <i>S. Montevideo</i> (1), <i>S. Cerro</i> (1), <i>S. Alachua</i>
腸管出血性大腸菌 O157	(12)	O157:H7 (12)
腸管出血性大腸菌 O157以外	(2)	O26:H11 (2)
毒素原性大腸菌	(5)	O6:H16 (2), O25:NM (3)
腸管病原性大腸菌	(12)	O111:H21 (1), O126:H27 (3), O128:H12 (8)

備考： ()は菌株数を示す。

(6) 二類及び三類感染症発症者の家族等の病原菌検索について

相模原市衛生試験所

平成 17 年 1 月から 12 月までに、2 類及び 3 類感染症を発症した患者の家族、家族以外の患者接触者及び海外旅行同行者の病原菌検索を実施した。

検査対象の事例は 11 事例で、発症者の発症原因の推定については、海外渡航先での感染が疑われるものが 6 事例、渡航経験が無く国内での感染が疑われるものが 5 事例であった。

検査対象者は 29 名で、病原菌検索の内訳は赤痢菌 6 名、コレラ菌 1 名、腸管出血性大腸菌 O157 15 名、同 O26 7 名であった。検査対象者数と事例数の合計の内訳は下表のとおりであった。

検査法については、赤痢菌については直接平板塗抹により分離、同定を行った。コレラ菌及び腸管出血性大腸菌については、増菌培養と直接平板塗抹とを併用し分離、同定を行った。また、腸管出血性大腸菌のペロトキシン検索には PCR 法を実施した。

病原菌検索の結果、すべての検体から病原菌は検出されなかった。しかしながら今回検査対象となった 11 事例のなかには感染原因が不明なものや、家族以外の患者接触者及びその家族も検査対象となっている事例もあることから、感染の拡大が広範囲に渡る可能性が示唆されている。今後とも発症者からの感染拡大防止の一環として、迅速な対応を図りたい。

(前谷史恵、清水壽美子、田向香織、榊原幸枝、笹野亜也子)

菌種	検査対象者数(事例数)
赤痢菌	6(3)
コレラ菌	1(1)
腸管出血性大腸菌O157	15(5)
腸管出血性大腸菌O26	7(2)
計	29(11)

3 河川等の環境調査

(1) 概況

平成 17 年の河川等の環境調査は、調査対象の菌種等は異なるが 4 衛生研究所等が実施した。検査定点は平成 16 年と同様 32 定点、検体数は 4 件増の 272 検体を検査し、前年比 12.9% 増の 280 件の病原菌を分離した。市・域別の検出状況は(2)以下に記載する。

表 河川水病原菌検出状況

	平成 13 年			平成 14 年			平成 15 年			平成 16 年			平成 17 年		
	定点数 (個所)	検体数 (件)	病原菌分離数 (件)	定点数 (個所)	検体数 (件)	病原菌分離数 (件)	定点数 (個所)	検体数 (件)	病原菌分離数 (件)	定点数 (個所)	検体数 (件)	病原菌分離数 (件)	定点数 (個所)	検体数 (件)	病原菌分離数 (件)
県域	10	120	129	10	120	91	10	120	67	10	120	81	10	120	97
横浜市	8	108	112	8	108	82	8	96	80	8	96	66	8	96	80
川崎市	14	168	126	14	157	100	4	11	12	4	12	15	4	16	19
横須賀市	10	40	79	10	40	79	10	40	101	10	40	86	10	40	84
計	42	436	446	42	425	352	32	267	260	32	268	248	32	272	280

(2) 河川水腸管系病原菌調査

神奈川県衛生研究所

コレラ菌を対象にした河川水定点調査は、平成元年より腸管系病原菌調査として継続してきた。平成 17 年 1 月から 12 月までの成績を報告する。

県域の一級および二級の 10 河川にそれぞれ 1 箇所の定点を設け、毎月 1 回ずつ採取した河川水について、各種腸管系病原菌の検索を行った。調査の対象はコレラ菌 O1 および O139、チフス菌、パラチフス A 菌、赤痢菌、腸管出血性大腸菌の二類および三類感染症原因菌とサルモネラ、*Vibrio cholerae* non-O1,O139 とした。

各増菌培地に、河川水 500ml をろ過して菌を捕捉したメンブランフィルターを接種し、培養した。赤痢菌の検索は、少量の Buffered peptone water でメンブランフィルターから捕捉物を洗い出し、その洗浄液の 1 白金耳を直接塗抹した。腸管出血性大腸菌 O157 は、36、8 時間増菌後、免疫磁気ビーズ法を用いて分離した。各病原菌の検索方法の概要と使用した増菌および分離培地を表 1 に示した。分離に応じた確認試験を行い、生化学的性状および血清学的性状等の確認を行い、菌種および菌型を同定した。

河川水 120 検体の結果を表 2 に示した。平成 17 年度は二類および三類感染症の病原体は検出されなかった。*V. cholerae* non-O1,O139 は 52 検体 (43.3%) から検出された。河川別の検出状況を表 3 に示した。チフス菌、パラチフス A 菌以外の *Salmonella* は 45 検体 (37.5%) から検出された。河川別の検出状況を表 4 に、検出された血清型を表 5 に示した。

(黒木俊郎、三宅芳枝)

表1 調査項目および使用培地

調査項目	増菌培地	分離培地
1. コレラ菌 O1,O139	アルカリ性ペプトン水	TCBS, PMT
2. <i>Vibrio cholerae</i> non - O1,O139		
3. チフス菌	セレナイト・シスチン	SS, DHL
4. パラチフス菌		
5. <i>Salmonella</i>	ハーナ・テトラチオン酸塩基礎培地	SS, DHL, ES サルモネラ
6. 腸管出血性大腸菌 O157	Buffered Peptone Water (8時間、IMS法)	CT-SMAC

7. 赤痢菌	直接塗抹	SS, DHL

表2 腸管系病原菌の検出状況(平成17年)

検出菌	月												計	
	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12		
コレラ菌O1,O139														0
チフス菌														0
パラチフスA菌														0
赤痢菌														0
腸管出血性大腸菌														0
<i>Vibrio cholerae</i> non-O1,O139	2	2	1	3	3	7	8	6	9	7	2	2	52	
<i>Salmonella</i>	5	4	3	3	5	3	5	4	3	3	5	2	45	

表3 定点別*Vibrio cholerae* non-O1,O139の検出状況 (平成17年)

定点	月												計
	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	
1 下山川	-	-	-	-	-	+	+	+	+	+	+	+	7
2 森戸川	-	-	-	-	-	+	+	+	+	+	-	-	5
3 滑川	-	-	-	-	-	-	+	+	+	+	-	-	4
4 境川	-	-	-	+	-	+	+	-	+	+	-	-	5
5 引地川	-	+	-	-	-	+	+	+	+	+	-	-	6
6 相模川	-	-	-	-	+	+	+	-	-	-	-	-	3
7 金目川	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	12
8 中村川	-	-	-	+	+	+	-	+	+	-	-	-	5
9 酒匂川	+	-	-	-	-	-	+	-	+	-	-	-	3
10 早川	-	-	-	-	-	-	-	-	+	+	-	-	2
計	2	2	1	3	3	7	8	6	9	7	2	2	52

表4 定点別 *Salmonella* の検出状況 (平成17年)

定点	月												計
	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	
1 下山川	+	+	+	+	+	+	-	+	+	+	+	+	11
2 森戸川	-	+	+	+	+	+	-	-	-	-	+	-	6
3 滑川	-	-	-	-	+	-	+	+	-	+	-	+	5
4 境川	+	+	-	+	+	+	+	-	+	+	+	-	9
5 引地川	+	-	+	-	+	-	+	+	+	-	-	-	6
6 相模川	+	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1
7 金目川	-	-	-	-	-	-	+	+	-	-	-	-	2
8 中村川	+	+	-	-	-	-	-	-	-	-	+	-	3
9 酒匂川	-	-	-	-	-	-	+	-	-	-	-	-	1
10 早川	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	+	-	1
計	5	4	3	3	5	3	5	4	3	3	5	2	45

表5 分離されたサルモネラの血清型 (平成17年)

04群	Agona	4	08群	Hadar	2	
	Derby	1		Newport	1	
	Saintpaul	1		Litchfield	2	
	Schleissheim	2		型別不能	1	
	Typhimurium	1		09群	Enteritidis	5
	型別不能	7			Panama	1
07群	Infantis	8	型別不能	1		
	Montevideo	3				
	Rissen	2	03,10群	Meleagridis	1	
	Singapore	1				
Thompson	2	OUT	5			
Virchow	1					

(3) 河川等の環境調査 - 腸管系病原菌検索 -

横浜市衛生研究所

河川水の細菌学的定点観測は昭和53年より継続しており、現在は鶴見川水系が2定点、これ以外は各水系ともすべて1定点で計8定点において観測を行っている。検査対象菌はコレラ菌、コレラ菌O1、O139以外、腸炎ピブリオ、赤痢菌、チフス菌およびパラチフスA菌を含むサルモネラである。今回は平成17年1月から12月までの検査成績について報告する。

上記8定点の河川水、臨港鶴見川橋定点の底泥について毎月1回検体採取を行い、菌検索は従来と同様の方法で行った。

河川水からの病原菌の検出状況を表1に示した。赤痢菌、チフス菌およびパラチフスA菌は、今年はいずれの定点からも検出されなかった。

コレラ菌O1、O139以外は、延べ56定点(58.3%)で検出され、昨年(45.8%)よりわずかに検出率が増加した。チフス菌、パラチフスA菌以外のサルモネラは延べ7定点(7.3%)で7菌種が分離された。

河川水および底泥中のコレラ菌O1、O139以外の検出状況を表2,3に示した。各河川とも前年同様な

間を通じて各調査地点で検出されている。底泥中のコレラ菌 O1、O139 以外の菌数は、平成 6 年からと同様に年間を通しては低い値を示していたが、本年は 7 月と 9 月に高い値を示した。

表 4 に示したとおり、底泥中の腸炎ビブリオは年間を通して検出された。また、河川水からの腸炎ビブリオは 17 定点より検出され昨年より増加した。2 月、3 月、6 月および 8 月は河川水定点から検出されなかった。

河川水からのサルモネラの検出状況を表 5 に示した。チフス菌およびパラチフス A 菌以外のサルモネラは、本年は 4、9 および 10 月に検出された。検出されたサルモネラの血清型は表 6 に示した。O4 群が 3 菌種、O7 群が 2 菌種、O8 群および O9 群が各 1 菌種検出された。S. Enteritidis が 2 定点で検出された。

河川の環境調査は、今後の問題として病原菌の分離だけでなく、患者からの病原菌分離状況等の情報と併せて流行菌型の予測、集団発生の予測、また患者および保菌者の追跡等の疫学的な解析が必要である。

(武藤哲典 松本裕子 山田三紀子 鈴木正樹 北爪晴恵 石黒裕紀子)

表1 河川水からの病原菌検出状況 (平成17年)

病原菌	月												計
	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	
赤痢菌	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
コレラ菌	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
コレラ菌O1,O139以外	2	0	0	6	3	6	8	8	8	5	6	4	56
腸炎ビブリオ	1	0	0	1	4	0	2	0	1	2	3	3	17
サルモネラ													
チフス菌	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
パラチフス菌	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
その他	0	0	0	4	0	0	0	0	1	2	0	0	7

表2 河川水中のコレラ菌O1,O139以外 (平成17年)

採取地点	月											
	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
1. 臨港鶴見川橋	-	-	-	+	+	-	+	+	+	+	+	+
2. 川向橋	-	-	-	-	-	-	+	+	+	+	-	-
3. 水道橋	-	-	-	+	-	+	+	+	+	+	+	+
4. 清水橋	+	-	-	+	-	+	+	+	+	-	+	-
5. 小泉橋	+	-	-	+	-	+	+	+	+	-	+	-
6. 侍従橋	-	-	-	-	+	+	+	+	+	+	+	+
7. 鷹匠橋	-	-	-	+	+	+	+	+	+	+	+	-
8. 東西橋	-	-	-	+	-	+	+	+	+	-	-	+

表3 臨港鶴見川橋底泥中のコレラ菌O1,O139以外のMPN (平成17年)

月	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
コレラ菌 O1,O139以外	2	<0.2	0.2	5	<0.2	<0.2	17	0.2	33	0.4	0.2	<0.2

(個 / 100ml)

表4 河川水中および底泥中の腸炎ビブリオ（平成17年）

採取地点	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
1. 臨港鶴見川橋	-	-	-	+	+(+)	-	-	-	+	-	-	-
2. 川向橋	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
3. 水道橋	+	-	-	-	+	-	-	-	-	-	-	-
4. 清水橋	-	-	-	-	+	-	-	-	-	+	+	+
5. 小泉橋	-	-	-	-	+	-	+	-	-	-	+	+
6. 侍従橋	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	+	+
7. 鷹匠橋	-	-	-	-	-	-	+	-	-	-	-	-
8. 東西橋	-	-	-	-	-	-	-	-	-	+	-	-

()内は底泥中の腸炎ビブリオ

表5 河川水のサルモネラ（平成17年）

採取地点	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
1. 臨港鶴見川橋	-	-	-	-	-	-	-	-	-	+	-	-
2. 川向橋	-	-	-	+	-	-	-	-	+	-	-	-
3. 水道橋	-	-	-	+	-	-	-	-	-	-	-	-
4. 清水橋	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
5. 小泉橋	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
6. 侍従橋	-	-	-	+	-	-	-	-	-	-	-	-
7. 鷹匠橋	-	-	-	+	-	-	-	-	-	+	-	-
8. 東西橋	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-

表6 分離されたサルモネラの血清型（平成17年）

	血清型	分離菌株数
O4群	Saintpaul	1
	Typhimurium	1
	Reading	1
O7群	Infantis	1
	Livingstone	1
O8群	Nagoya	1
O9群	Enteritidis	2
計		8

(4) 河川等の環境調査 腸管系病原菌検索

川崎市衛生研究所

平成17年に実施した河川水等からの腸管系病原菌の検査結果について報告する。

1月、4月、7月、11月の4回、川崎市菅埠頭、大師橋横（多摩川）、六郷橋横（多摩川）、末吉橋横（鶴見川）の4定点より採水し、計16検体について病原菌検査を実施した。

病原菌検出状況は表に示したとおりであり、腸炎ビブリオが13件（81.3%）と年間を通して検出された。その他の病原菌ではコレラ菌O1以外が1月に1件、ビブリオ・ミミカスが11月に1件、ビブリオ・バルニフィカスが4月に2件、7月に1件、サルモネラ（*S. Infantis*）が4月に1件であった。コレラ菌O1、ビブリオ・フルビアールリス、ビブリオ・ファーニシー、腸管出血性大腸菌O157は検出されなかった。

表 河川水等からの病原菌検出状況（平成17年）

病原菌	月				計	%
	1	4	7	11		
コレラ菌O1	0	0	0	0	0	
コレラ菌O1以外	1	0	0	0	1	6.3
腸炎ビブリオ	2	3	4	4	13	81.3
ビブリオ・ミミカス	0	0	0	1	1	6.3
ビブリオ・フルビアーリス	0	0	0	0	0	
ビブリオ・ファーニシー	0	0	0	0	0	
ビブリオ・バルニフィカス	0	2	1	0	3	18.8
サルモネラ	0	1	0	0	1	6.3
腸管出血性大腸菌O157	0	0	0	0	0	
検体数	4	4	4	4	16	

(5) 河川水腸管系病原菌検索

横須賀市健康安全科学センター

平成 17 年 1 月から 17 年 12 月まで実施した河川水のコレラ菌、腸炎ビブリオ、ビブリオ・ミミカス、赤痢菌、腸チフス菌、パラチフス A 菌、その他のサルモネラ、腸管出血性大腸菌など、腸管系病原菌の検査結果について報告する。

調査定点は市内 10 河川 10 定点であり、採水は 2 月、5 月、8 月、10 月の年 4 回実施した。また、検査は昨年と同様の方法により行った。

河川水の病原菌検出状況は表 1 に示した。本年はコレラ菌 O1,O139 (CT+) 以外が 17 定点 (42.5%)、腸炎ビブリオは 10 定点 (25.0%)、ビブリオ・ミミカスは 12 定点 (30.0%)、ビブリオ・フルビアーリス/ファーニシーは 9 定点(22.5%)、エロモナス・ヒドロフィラ/ソブリアは 32 定点(80.0%)、プレジオモナス・シゲロイデスが 1 定点(2.5%)、エルシニア・エンテロコリチカは 3 定点(7.5%)から検出された。

しかし、コレラ菌 O1,O139 (CT+)、赤痢菌、チフス菌、パラチフス A 菌、その他のサルモネラ、腸管出血性大腸菌 O157、腸管出血性大腸菌 O157 以外、毒素原性大腸菌、組織侵入性大腸菌、腸管病原性大腸菌及びカンピロバクター・ジェジュニ/コリはいずれも検出されなかった。

コレラ菌 O1,O139 (CT+) 以外の検出状況を表 2 に示した。コレラ菌 O1,O139 (CT+)以外は 2 月には 2 定点、5・8 月には 6 定点、10 月には 3 定点から検出された

腸炎ビブリオの検出状況は表 3 に示した。腸炎ビブリオは 2 月には 2 定点、5 月は 1 定点、8 月は 3 定点、10 月には 4 定点から検出された。また、10 定点の内 1 定点においては毎回検出された。

以上、市内 10 河川、10 定点（河川水）の病原菌についてはコレラ菌 O1,O139 (CT+) 以外をはじめ、腸炎ビブリオ、ビブリオ・ミミカス、ビブリオ・フルビアーリス/ファーニシー、エロモナス・ヒドロフィラ/ソブリア、プレジオモナス・シゲロイデス、エルシニア・エンテロコリチカが検出された。

(天野肇、山口純子、蛭田徳昭、増山亨)

表1 河川水から検出した病原菌 (平成17年)

病原菌	月				計	%
	2	5	8	10		
コレラ菌O1,O139 (CT+)					0	
コレラ菌O1,O139 (CT+)以外	2	6	6	3	17	42.5
腸炎ビブリオ	2	1	3	4	10	25.0
ビブリオ・ミミカス		2	5	5	12	30.0
ビブリオ・フルビアース/ファーニシイ	2	5		2	9	22.5
エロモナス・ヒドロフィラ/ソブリア	7	10	7	8	32	80.0
プレジオモナス・シグロイデス			1		1	2.5
赤痢菌						
チフス菌						
パラチフスA菌						
その他のサルモネラ						
腸管出血性大腸菌O157						
腸管出血性大腸菌O157以外						
毒素原性大腸菌						
組織侵入性大腸菌						
腸管病原性大腸菌						
カンピロバクター・ジェジュニ/コリ						
エルシニア・エンテロコリチカ	2			1	3	7.5
検体数	10	10	10	10	40	

表2 定点別コレラ菌O1,O139(CT+)以外の検出状況 (平成17年)

定点	月				計
	2	5	8	10	
鷹取川(追浜橋)	-	+	+	-	2
平作川(夫婦橋)	-	+	-	-	1
松越川(竹川合流後)	+	+	+	-	3
野比川(野比橋)	-	-	+	-	1
長沢川(長沢橋)	-	-	-	-	0
津久井川(新津久井橋)	-	-	-	+	1
川間川(新川間橋)	+	+	-	-	2
芦名川(芦名橋)	-	+	+	+	3
前田川(前田中橋)	-	+	+	-	2
関根川(粒石橋)	-	-	+	+	2

表3 定点別腸炎ビブリオの検出状況 (平成17年)

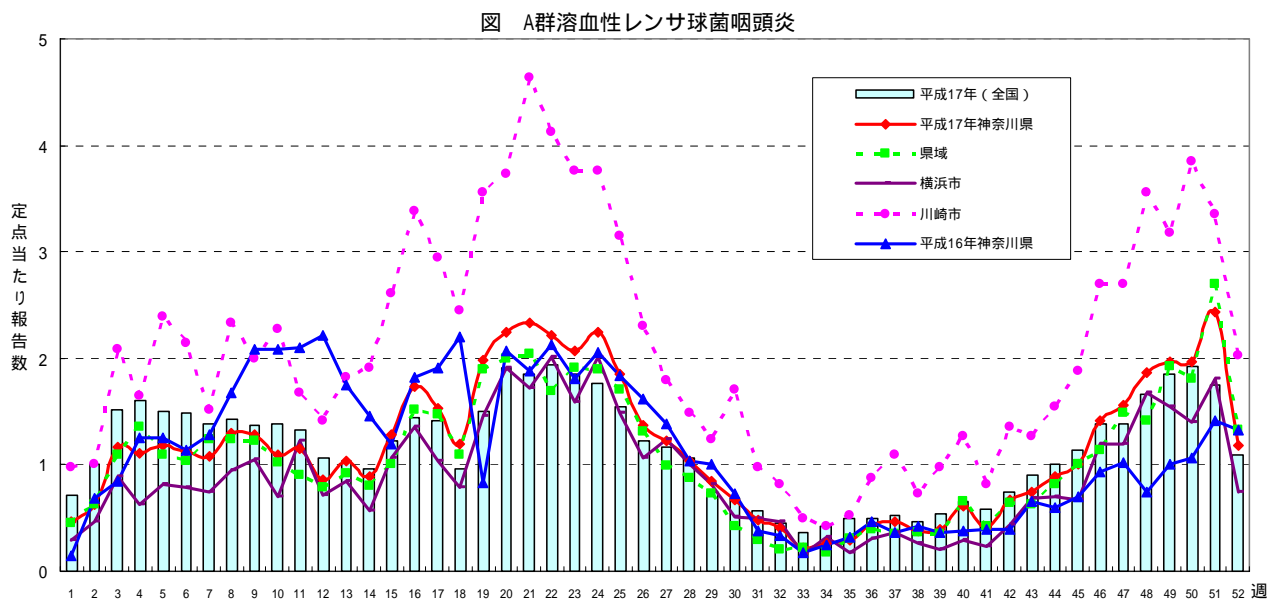
定点	月				計
	2	5	8	10	
鷹取川(追浜橋)	-	-	+	+	2
平作川(夫婦橋)	+	-	-	+	2
松越川(竹川合流後)	+	+	+	+	4
野比川(野比橋)	-	-	-	-	0
長沢川(長沢橋)	-	-	-	-	0
津久井川(新津久井橋)	-	-	-	-	0
川間川(新川間橋)	-	-	+	+	2
芦名川(芦名橋)	-	-	-	-	0
前田川(前田中橋)	-	-	-	-	0
関根川(粒石橋)	-	-	-	-	0

4 A群溶血性レンサ球菌咽頭炎

(1) 概況

A群溶血性レンサ球菌咽頭炎は、感染症発生動向調査によれば、例年冬季及び春から初夏にかけての2つの報告数のピークが認められている。平成17年の神奈川県定点あたり報告数は全国とほぼ同様であったが、平成16年に比べると、前半は低位で推移し、19週から27週の間は上回り、40週までは同様の傾向を示し、40週以降は上回って推移した。

県内では川崎市での報告数が年間を通して多く、中でも21週には警報レベル開始基準値4を超える流行となった。横浜市及び県域はほぼ神奈川県の動きと同様であった。



(2) A群溶血レンサ球菌

神奈川県衛生研究所

感染症発生動向調査病原体定点より送付された咽頭ぬぐい液からのA群溶血レンサ球菌の分離株数も患者報告数と並行する傾向があった。

A群溶血レンサ球菌T型の検出状況(2005年1~12月)

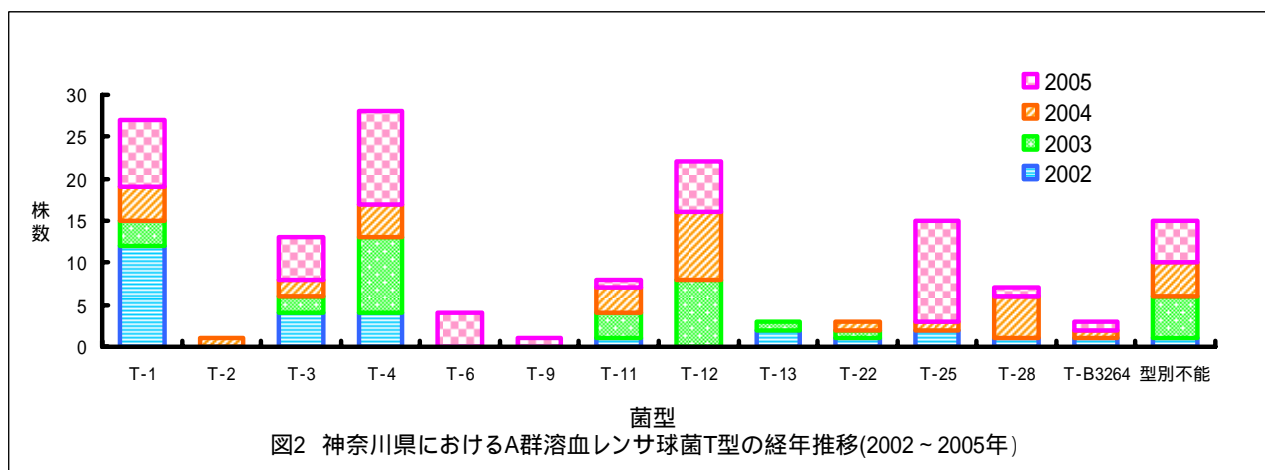
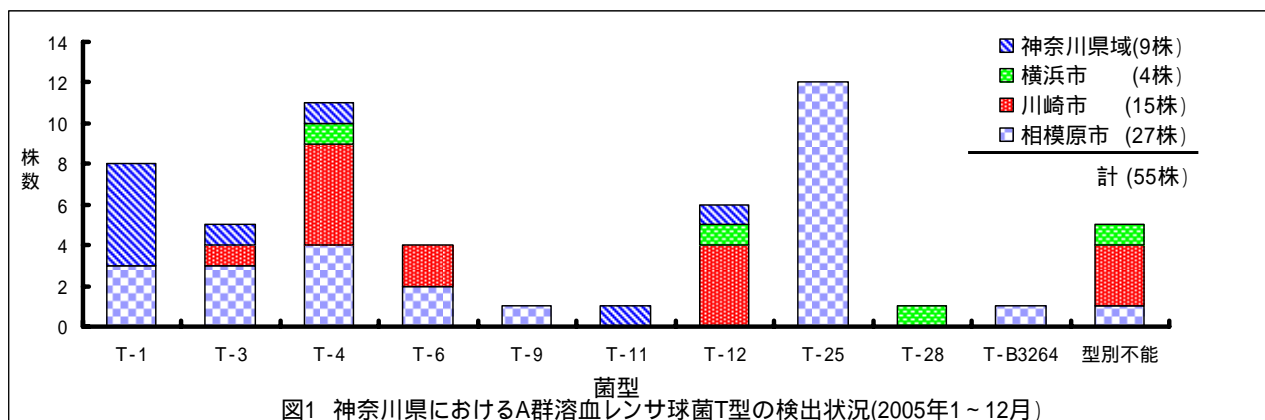
横浜市衛生研究所、川崎市衛生研究所、相模原市衛生試験所および神奈川県衛生研究所の計4施設から報告された2005年1~12月のA群溶血レンサ球菌分離成績を図1に示した。横須賀市健康安全科学センターでの分離株はなかった。また、相模原衛生試験所においてT25型の株数が12と極端に高い値となっているが、これは食品を介したA群溶血性レンサ球菌咽頭炎の集団発生があったためであった。

そのため、各T型の内、T25型12(21.8%)の分離頻度が最も高く、以下、T4型11(20.0%)、T1型8(14.5%)、T12型6(10.9%)、T3型5(9.1%)の順で、これら5血清型で分離株の76.4%を占めた。

全国では、T12(31.0%)、T4(14.0%)、T1(13.3%)の順で、神奈川県でも食品を介した集団発生を除けば、全国と同様の流行菌型が上位を占めた。

A群溶血レンサ球菌T型の経年推移(2002年~2005年)

過去4年間において県内で分離されたA群溶血レンサ球菌のT型の経年推移を図2に示した。T1、T4、T12型の分離頻度は全般的に高く、前述の平成17年のT25が特徴的であった。また、型別不能例が増加しつつある。



(神奈川県衛生研究所：大屋日登美、岡崎則男、高橋智恵子、鈴木理恵子)

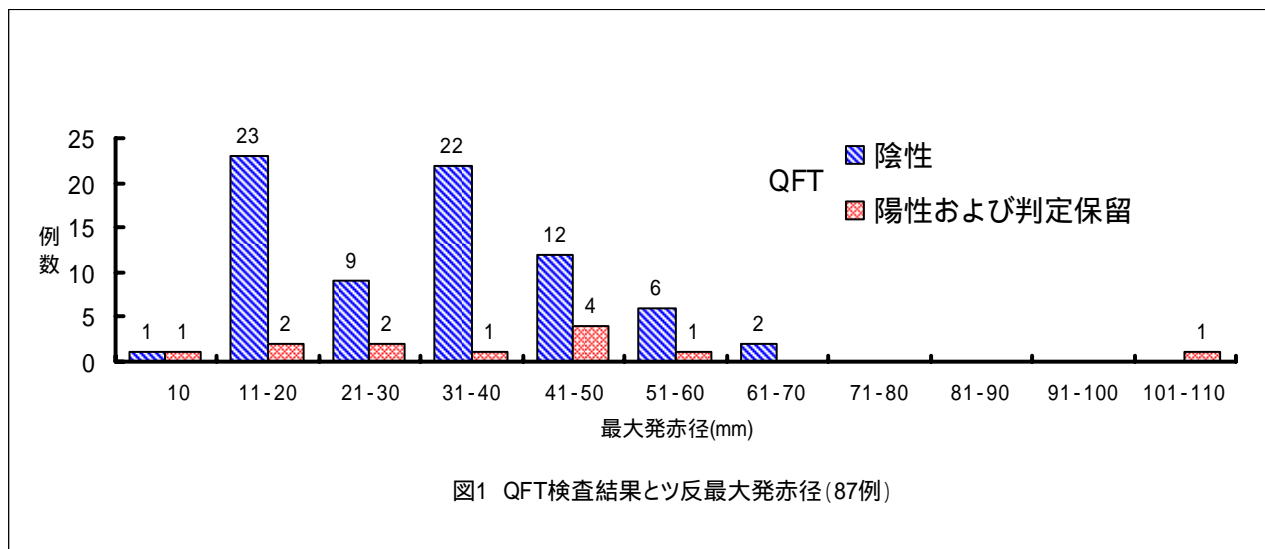
5 神奈川県域における QFT 検査結果

神奈川県衛生研究所

神奈川県衛生研究所では、平成17年11月より結核感染診断のための新しい検査法であるQFT(クオンティフェロン®TB-2G)検査の実施が可能となり、結核定期外検診に伴う本検査の受付を開始した。平成18年3月末までの5か月間に168検体の依頼があり、検査結果は陽性(+)5件、判定保留(±)9件で、他は陰性(-)であった。

QFT検査の信頼性がある程度確保される中学生以上は93件で、陽性5件、判定保留8件であった。中学生以上で、ツベルクリン反応(ツ反)検査における発赤径が計測された87例につき最大発赤径とQFT結果を比較し、図1に示した。結核感染が疑われるとされるツ反発赤径31mm以上の49例においては、QFT陽性1例、判定保留6例、陰性42例であった。一方、発赤径30mm以下の38例中においてもQFT陽性4例、判定保留1例があった。このように、今回示された結果からは、ツ反発赤径とQFT結果が必ずしも並行しない傾向が見られた。

従来、結核感染診断は、主にツ反により行われてきたが、この検査は BCG 接種の影響を受けるため、BCG 接種率の高い我が国では結核に感染していない場合でも陽性となることがある。これに対し、QFT 検査は BCG 接種の影響を受けないため、より正確な結核感染診断が可能とされる。当所で開催した QFT 検査は、結核定期外健診のツ反検査により結核感染が疑われた例を対象にしており、今回の結果は我が国における結核感染診断の現状を如実に現していると同時に、QFT 検査の有用性を示しているものと考えられる。



(岡崎則男、大屋日登美、高橋智恵子、新川隆康)

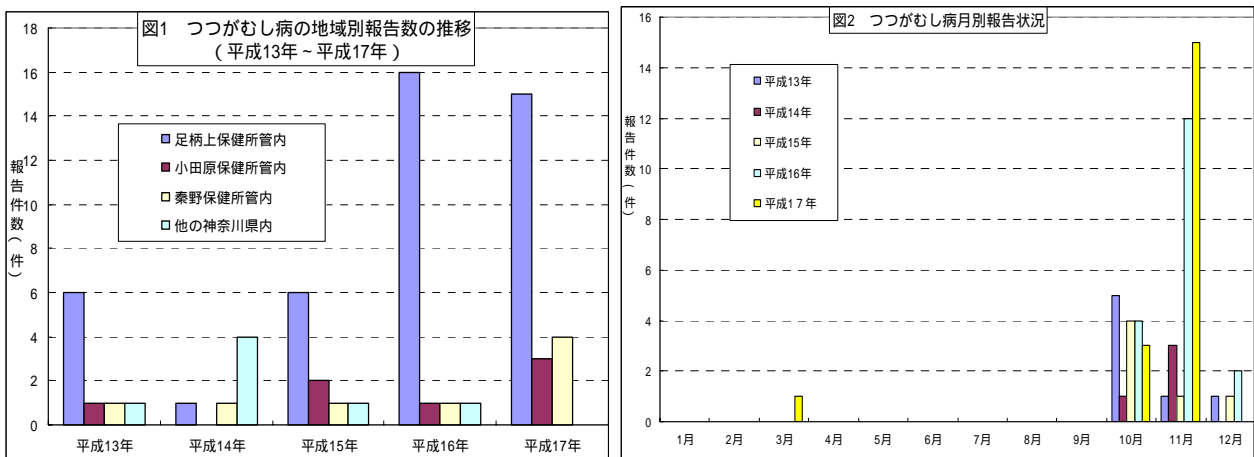
その他の感染症 つつがむし病

(1) 概況

平成 17 年、神奈川県内でのつつがむし病患者の報告数は前年比 3 件増の 22 件で、全国の 6.4% を占めた（平成 17 年全国数 345 件）。直近 5 年間の神奈川県内の報告数は、平成 14 年の 6 件を最少に、平成 15 年 10 件、平成 16 年 19 件と、平成 17 年 22 件と増加傾向にある。（ 3 ページ《四類感染症》参照）

地域別報告数の推移は、毎年、足柄上保健所管内からの報告が最も多く、続いて小田原保健所管内及び秦野保健所管内と、神奈川県西部からの報告が多数を占めている（図 1）。

直近 5 年間の月別の報告は、平成 17 年 3 月の 1 件以外は 10～12 月の 3 か月間に報告されており、中でも 11 月に集中している（図 2）。



(2) 神奈川県で発生したつつが虫病について

神奈川県衛生研究所

昭和 58 年から平成 17 年までのつつが虫病患者発生数を年次別にみると、昭和 58 年から昭和 63 年までは確定患者 2～19 名で推移し、平成元年 81 名、平成 2 年 112 名と増加したが、平成 3 年からは 65 名、平成 4 年 52 名（含む紅斑熱患者 2 名）、平成 5 年 24 名、平成 6 年 39 名、平成 7 年 22 名、平成 8 年 9 名、平成 9 年 9 名と減少した。その後、平成 10 年 14 名、平成 11 年 31 名、平成 12 年 42 名と僅かながらであるが増加し、平成 13 年 7 名、平成 14 年 4 名、平成 15 年は 6 名と再び減少し、平成 16 年 18 名、平成 17 年 19 名と僅かに増加した（図 1）。

つつが虫病患者発生を季節別にみると、昭和 58 年から平成 16 年の 21 年間すべてで毎年秋期（9～11 月）に患者が多く、平成 17 年についても、3 月 1 名、10 月 3 名、11 月 15 名であり、秋期に大部分の患者が発生した。しかし本年は、平成 11 年以降 6 年ぶりに春季にも患者の発生が見られ、春季においてもつつが虫病を疑うことの重要性が再確認された。

平成 13 年から 17 年の 5 年間に神奈川県内でつつが虫病を疑われた患者 81 名（平成 13 年 13 名、14 年 7 名、15 年 11 名、16 年 23 名、17 年 27 名）について、immunofluorescence assay (IF) による血清抗体検出および PCR による *Orientia tsutsugamushi* DNA 検出により確定診断を行った。その結果、54 名（平成 13 年 7 名、14 年 4 名、15 年 6 名、16 年 18 名、17 年 19 名）がつつが虫病と診断され（表 1）、平成 13 年と 15 年の患者より L929 細胞を用いて 4 株の *O. tsutsugamushi* 分離株が得られた。これら分

離株を型別 PCR およびモノクローナル抗体を用いて同定した結果、Karp 株 1 株、Kawasaki 株 2 株、Kuroki 株 1 株であった。さらに Karp 株について 56-kDa タンパク質をコードする遺伝子の配列を決定したところ、Jp2 型に分類されている株と同様であった。

つつが虫病患者のうち、PCR により *O. tsutsugamushi* DNA の検出が可能であった検体については型別 PCR による感染株の決定をし、*O. tsutsugamushi* DNA が検出されなかった検体では IF 抗体価から感染株を推定して、県内及び隣接している静岡県小山町付近で発生しているつつが虫病の感染株について検討を行った。この結果、県内及び静岡県小山町付近で感染が確認された株は、Karp、Kawasaki 及び Kuroki の 3 株であり、それぞれ 5 名 (9.4%)、36 名 (67.9%) 及び 12 名 (22.7%) の割合であり、その大部分が Kawasaki 株による感染であることが判明した。5 年間で Kawasaki 株は毎年ほぼ同じ割合であり、Karp 株は毎年 1 例程度なのに対し、Kuroki 株は平成 16、17 年と多少の増加傾向が見られた (表2)。

患者の感染場所 (聞き取り調査により推定できたもの) を検討すると、県外で感染して本県で届出されたと思われるものを除いて、平成 17 年では山北町、南足柄市、秦野市、小田原市であった。また、平成 17 年のつつが虫病感染時の行動も、昨年と同様に山地や平地の畑、田圃などでの農作業が多く、日常生活での感染の機会が多いことが判明した。

(片山 丘、古屋由美子、尾上洋一、新川隆康)

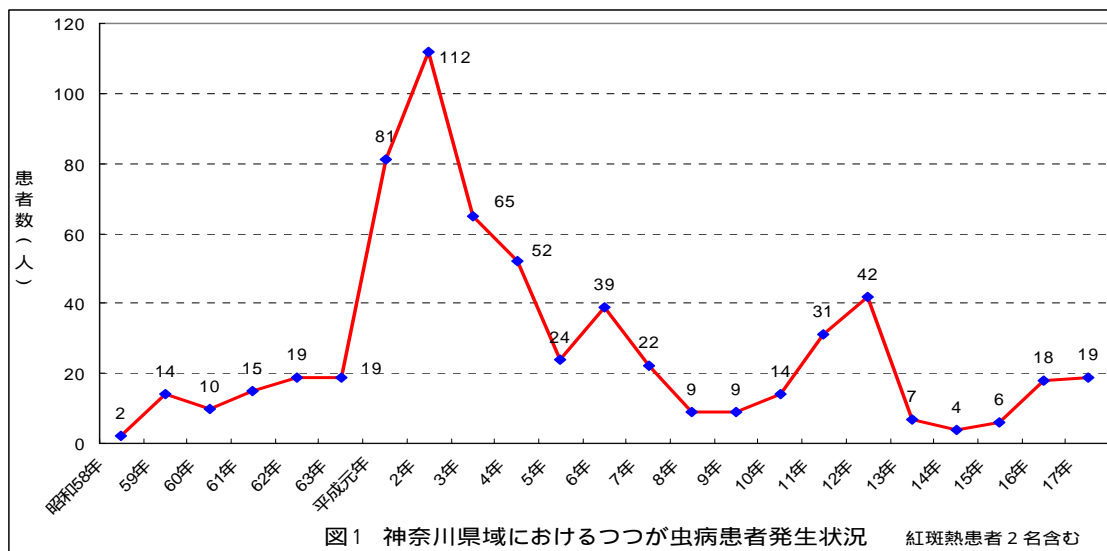


図1 神奈川県域におけるつつが虫病患者発生状況 紅斑熱患者2名含む

年	検体数	陽性数			確定患者数
		IFのみ	IFおよびPCR	PCRのみ	
平成13年	13	0	7	0	7
平成14年	7	1	3	0	4
平成15年	11	1	4	1	6
平成16年	23	4	13	1	18
平成17年	27	6*	13	0	19
合計	81	12	40	2	54

* : 血清検査のみの1検体を含む

年	検体数	陽性数		
		Karp	Kawasaki	Kuroki
平成13年	7	2	4	1
平成14年	4	0	3	1
平成15年	6	1	4	1
平成16年	18	1	12	5
平成17年	18	1	13	4
合計	53	5	36	12
		9.4	67.9	22.7 (%)

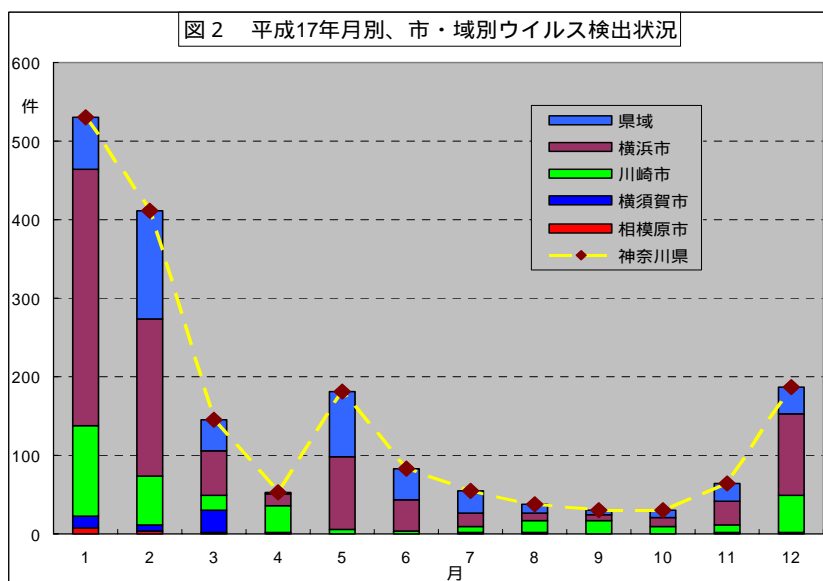
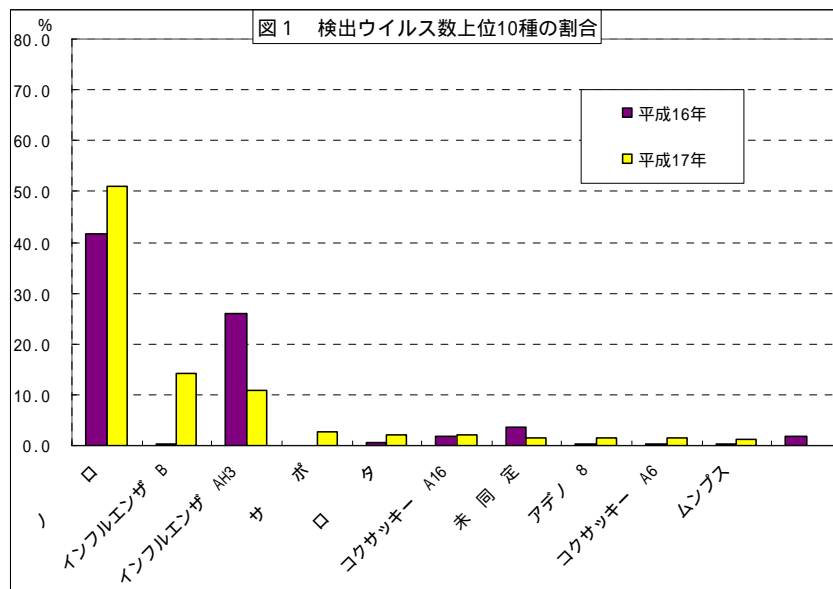
資料2 病原微生物検出状況

1 ウイルス検出概況

平成17年に県内で検出されたウイルスは、平成16年の1,101件から64.1%増の1,807件が検出された。

最も多く検出されたウイルスは、平成16年と同様ノロウイルスであった。全体に占める割合は、前年比1.7倍増の集団発生があったことなどから（30ページ参照）、前年より10ポイントほど高まり51.1%を占めた。続いてインフルエンザB（14.3%）、インフルエンザAH3（10.8%）であった。（図1）

月別の検出状況は、1月が最も多く、続いて2月、12月であった（図2）。市・域別では、横浜市で全数（1,807件）の50.2%を検出し、県域では26.4%、川崎市19.5%、横須賀市2.8%、相模原市1.1%であった。神奈川県、神奈川県衛生研究所、横浜市衛生研究所、川崎市衛生研究所、横須賀市健康安全科学センター及び相模原市衛生試験所の各ウイルス検出状況は、60ページ以下に記載。



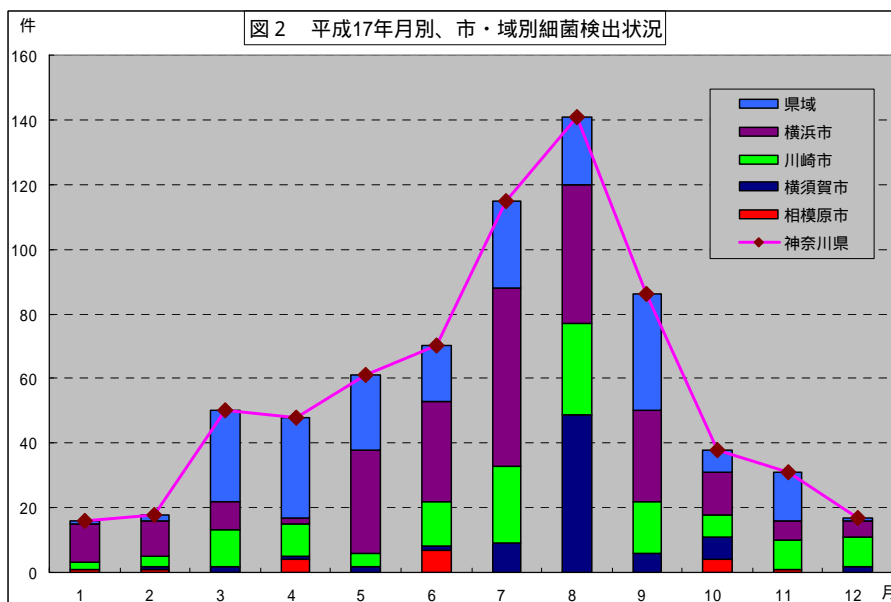
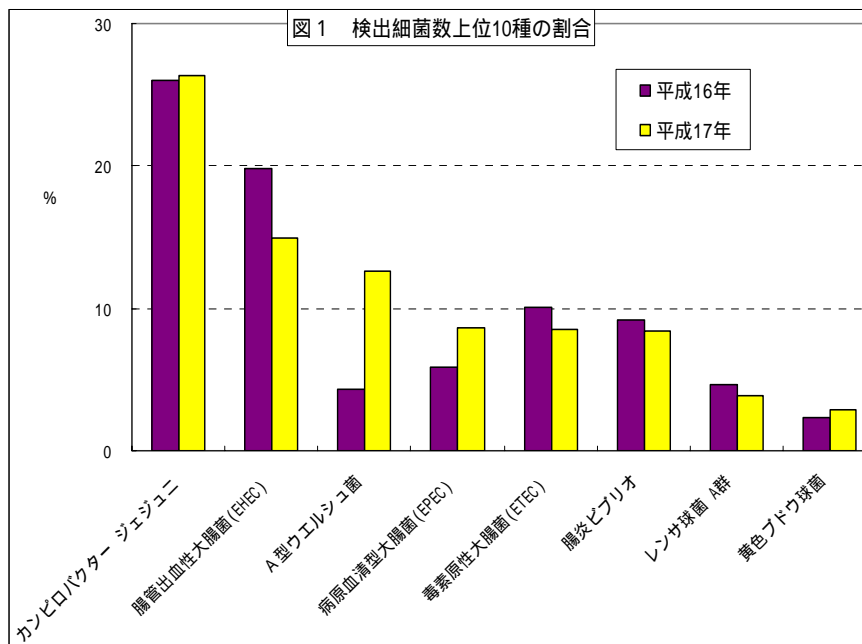
2 病原細菌検出概況

平成17年に県内で検出された病原細菌は、平成16年に対し菌種では27種から4種増加の31種、検出病原菌数は596件から15.9%増の691件であった。海外渡航によるものは16件から23件へと43.8%増加した。

最も多く検出された病原細菌は、平成16年同様カンピロバクター ジェジュニで26%を占め、続いて腸管出血性大腸菌(EHEC)、次にA型ウエルシュ菌であった(図1)。

月別の検出状況は大腸菌、腸炎ビブリオ、カンピロバクターが多数検出された8月が最も多く、続いて7月、前年比較的少なかった9月となっている(図2)。市・域別では、横浜市が全体の35.7%、県域30.2%、川崎市19.8%、横須賀市11.6%、相模原市2.6%であった。

神奈川県、神奈川県衛生研究所、横浜市衛生研究所、川崎市衛生研究所、横須賀市健康安全科学センター及び相模原市衛生試験所の各病原細菌検出状況は、68ページ以下に記載。



3 ウイルス検出状況

3-1 ウイルス検出状況（ヒト由来、月別）

神奈川県

年・月 検出ウイルス	平成 16年	検体採取月												平成 17年 計	構 成 割 合 (%)	
		1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12			
インフルエンザ AH1	84												1	14	15	0.8
インフルエンザ AH3	285	29	85	49	12	1	1						4	14	195	10.8
インフルエンザ B	4	67	141	48	1									1	258	14.3
パラインフルエンザ 1	6	1													1	0.1
パラインフルエンザ 2	6	1												1	2	0.1
パラインフルエンザ 3	1				1	4		1							6	0.3
R S	38	3										3	6	8	20	1.1
ポリオ 1				1	0							1			2	0.1
ポリオ 2	1				2										2	0.1
ポリオ 1+2	1												1		1	0.1
ポリオ 3					1										1	0.1
コクサッキー A2	4			1											1	0.1
コクサッキー A4	5								1						2	0.1
コクサッキー A5									1						1	0.1
コクサッキー A6	3					3	10	14							27	1.5
コクサッキー A9	1												1		1	0.1
コクサッキー A10									1				1		3	0.2
コクサッキー A12	1								1						1	0.1
コクサッキー A14						1			1						2	0.1
コクサッキー A16	19	1	1	2		2	12	8	3	5			1	1	36	2.0
コクサッキー A24	1															0.0
コクサッキー B1	6															0.0
コクサッキー B2									1				2		3	0.2
コクサッキー B3	10								1				1		2	0.1
コクサッキー B4	2						1	3	4	2	3	1			14	0.8
コクサッキー B5	6							0		3					3	0.2
エコー 3	3							2	1						3	0.2
エコー 5												1			1	0.1
エコー 6	11						2								2	0.1
エコー 7	1															0.0
エコー 9									1						1	0.1
エコー 11	1															0.0
エコー 18	7													1	1	0.1
エコー 24													1		1	0.1
エコー 25								3	1						4	0.2
エコー 30	2															0.0
エンテロ 71						1	1	9	6	1	0	1	1		20	1.1
パレコー 1												2			2	0.1
ライノ	30										1				1	0.1
ムンプス	3					5	10	3		1	2	1	1		23	1.3
アデノ 1	5	1		1				2					1		5	0.3
アデノ 2	4	1	1			2	1	2							7	0.4
アデノ 3	19	4				1	3	3	4			1	3	2	21	1.2
アデノ 4	1			1	1				1						3	0.2
アデノ 5	0					2									2	0.1
アデノ 7	1															0.0
アデノ 8	2				1				1	11	12	2		1	28	1.5
アデノ 11												1			1	0.1
アデノ 19	7	2									2	1			5	0.3
アデノ 37	6				1				1	1		1	2		6	0.3
アデノ 40/41	1												3	1	4	0.2
アデノ(型未決定)	6								1				1		2	0.1
単純ヘルペス 1	1	1	1					1	1			2			6	0.3
サイトメガロ				1							1				2	0.1
ヒトヘルペス 6					1									1	2	0.1
ロ タ	7	0	3	12	9	16								0	40	2.2
ノ ロ	458	420	175	28	25	95	25					2	22	131	923	51.1
サ ボ						50									50	2.8
未 同 定	41		4	2				3	3	3	1	3	3	7	29	1.6
リエンファ ッツガムシ												1	12		13	0.7
計	1,101	531	411	145	52	182	83	55	37	30	30	64	187	1,807	100.0	

3-1 ウイルス検出状況（ヒト由来）
（平成17年 疾患別）

神奈川県

疾患名 検出ウイルス	つづが虫病	急性脳炎	RSウイルス感染症	咽頭結膜熱	感染性胃腸炎	手足口病	ヘルパンギーナ	流行性耳下腺炎	インフルエンザ様	流行性角結膜炎	無菌性髄膜炎	その他	合計
インフルエンザ AH1									13			2	15
インフルエンザ AH3									179			16	195
インフルエンザ B									248			10	258
パラインフルエンザ 1												1	1
パラインフルエンザ 2									1			1	2
パラインフルエンザ 3												6	6
R S			1						1			18	20
ポリオ 1												2	2
ポリオ 2												2	2
ポリオ 1+2												1	1
ポリオ 3												1	1
コクサッキー A2							1						1
コクサッキー A4							1					1	2
コクサッキー A5							1						1
コクサッキー A6						8	18					1	27
コクサッキー A9								1					1
コクサッキー A10							3						3
コクサッキー A12							1						1
コクサッキー A14						2							2
コクサッキー A16						32	2					2	36
コクサッキー B2											2	1	3
コクサッキー B3						1					1		2
コクサッキー B4											3	11	14
コクサッキー B5											3		3
エコー 3								2				1	3
エコー 5												1	1
エコー 6											2		2
エコー 9												1	1
エコー 18											1		1
エコー 24												1	1
エコー 25											2	2	4
エンテロ 71						18	1					1	20
パレコー 1		1										1	2
ライノ												1	1
ムンプス								22			1		23
アデノ 1									1	1		3	5
アデノ 2				2					1			4	7
アデノ 3				14			1		1	1		4	21
アデノ 4				1						1		1	3
アデノ 5						1						1	2
アデノ 8										28			28
アデノ 11										1			1
アデノ 19										5			5
アデノ 37										6			6
アデノ 40/41					4								4
アデノ（型未決定）										1		1	2
単純ヘルペス 1							3		2			1	6
サイトメガロ									1			1	2
ヒトヘルペス 6												2	2
ロ タ					40								40
ノ 口					276							647	923
サ ポ					50								50
未 同 定					1	1	5				2	20	29
利エンテロ ツツガムシ	13												13
計	13	1	1	17	371	63	37	25	448	44	17	770	1,807

3-2 ウイルス検出状況（ヒト由来、月別）

神奈川県衛生研究所

年月 検出ウイルス	平成 16年	検体採取月												平成 17年 計
		1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	
インフルエンザ AH1													6	6
インフルエンザ AH3	159	14	47	13									3	77
インフルエンザ B	3	21	75	9										105
パラインフルエンザ 3	1													
R S	3											1		1
ポリオ 3						1								1
コクサッキー A2	3			1										1
コクサッキー A4	5							1						1
コクサッキー A5									1					1
コクサッキー A6	3					2	9	12						23
コクサッキー A9	1										1			1
コクサッキー A10							1				1		1	3
コクサッキー A12	1							1						1
コクサッキー A14							1		1					2
コクサッキー A16	9		1				4	4	2	4		1	1	17
コクサッキー B1	2													
コクサッキー B3									1					1
コクサッキー B4	1													
コクサッキー B5	2													
エコー 3							2	1						3
エコー 6	1						2							2
エコー 18	7													
エンテロ 71						1		5	5			1	1	13
パレコー 1											1			1
ライノ										1				1
ムンプス	1					5	10	2			2	1	1	21
アデノ 2	1		1			1	1	1						4
アデノ 3	9	3					1		1		1	1	1	8
アデノ 4				1										1
アデノ 5					1									1
アデノ 40/41	1											2		2
単純ヘルペス 1		1					1				2			4
ロ タ	3		1	12	1	16								30
ノ ロ	114	27	12	4		7	7				1	4	20	82
サ ポ						50								50
未 同 定	3													
利エンテア ツツガムシ											1	12		13
計	333	66	137	40	1	84	39	28	10	5	10	23	34	477

3-2 ウイルス検出状況（ヒト由来）

（平成17年 疾患別）

神奈川県衛生研究所

疾患名 検出ウイルス	つつが虫病	急性脳炎	RSウイルス感染症	咽頭結膜熱	感染性胃腸炎	手足口病	ヘルパンギーナ	流行性耳下腺炎	インフルエンザ様	無菌性髄膜炎	その他	合計
インフルエンザ AH1									6			6
インフルエンザ AH3									77			77
インフルエンザ B									105			105
R S			1									1
ポリオ 3											1	1
コクサッキー A2							1					1
コクサッキー A4							1					1
コクサッキー A5							1					1
コクサッキー A6						8	15					23
コクサッキー A9								1				1
コクサッキー A10							3					3
コクサッキー A12							1					1
コクサッキー A14						2						2
コクサッキー A16						17						17
コクサッキー B3						1						1
エコー 3								2			1	3
エコー 6										2		2
エンテロ 71						13						13
パレコー 1		1										1
ライノ											1	1
ムンプス								21				21
アデノ 2				2					1		1	4
アデノ 3				4			1		1		2	8
アデノ 4				1								1
アデノ 5						1						1
アデノ 40/41					2							2
単純ヘルペス 1							3		1			4
ロ タ					30							30
ノ ロ					82							82
サ ポ					50							50
刺エチア ツツガムシ	13											13
計	13	1	1	7	164	42	26	24	191	2	6	477

3-3 ウイルス検出状況（ヒト由来、月別）

横浜市衛生研究所

年月 検出ウイルス	平成 16年	検体採取月												平成 17年 計
		1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	
インフルエンザ AH1	84												7	7
インフルエンザ AH3	10	4	13	22	11	1	1						4	56
インフルエンザ B		19	31	21	1									72
パラインフルエンザ 1	6	1												1
パラインフルエンザ 2	6	1											1	2
パラインフルエンザ 3						1	4		1					6
R S	35	3									3	5	8	19
ポリオ 1				1							1			2
ポリオ 2	1													
ポリオ 1+2	1											1		1
コクサッキー A2	1													
コクサッキー A4													1	1
コクサッキー A6						1	1	2						4
コクサッキー A16		1				1	5	3	1	1				12
コクサッキー B1	2													
コクサッキー B2									1					1
コクサッキー B3	5													
コクサッキー B4	1						1	3	3	2	1	1		11
コクサッキー B5	1													
エコー 3	3													
エコー 5										1				1
エコー 6	3													
エコー 9								1						1
エコー 18													1	1
エコー 24												1		1
エコー 25							3	1						4
エンテロ 71							1		1	1				3
パレコー 1											1			1
ライノ	30													
ムンプス								1		1				2
アデノ 1	5	1		1			2					1		5
アデノ 2	2	1				1		1						3
アデノ 3	4	1					2					1		4
アデノ 4				1										1
アデノ 5						1								1
アデノ 7	1													
アデノ 37	3										1			1
アデノ（型未決定）	4								1			1		2
単純ヘルペス 1			1						1					2
サイトメガロ				1						1				2
ヒトヘルペス 6					1								1	2
ノ口	225	295	151	9		86	17					16	73	647
未同定	38		4	2			3	3	3	1	3	3	7	29
計	471	327	200	56	15	92	40	17	10	8	10	30	103	908

3-3 ウイルス検出状況（ヒト由来）
（平成17年 疾患別）

横浜市衛生研究所

疾患名 検出ウイルス	咽頭結膜熱	感染性胃腸炎	手足口病	ヘルパンギーナ	流行性耳下腺炎	インフルエンザ様	流行性角結膜炎	無菌性髄膜炎	その他	合計
インフルエンザ AH1						5			2	7
インフルエンザ AH3						40			16	56
インフルエンザ B						62			10	72
パラインフルエンザ 1									1	1
パラインフルエンザ 2						1			1	2
パラインフルエンザ 3									6	6
R S						1			18	19
ポリオ 1									2	2
ポリオ 1+2									1	1
コクサッキー A4									1	1
コクサッキー A6				3					1	4
コクサッキー A16			8	2					2	12
コクサッキー B2									1	1
コクサッキー B4									11	11
エコー 5									1	1
エコー 9									1	1
エコー 18								1		1
エコー 24									1	1
エコー 25								2	2	4
エンテロ 71			1	1					1	3
パレコー 1									1	1
ムンプス					1			1		2
アデノ 1						1	1		3	5
アデノ 2									3	3
アデノ 3	2								2	4
アデノ 4									1	1
アデノ 5									1	1
アデノ 37							1			1
アデノ（型未決定）							1		1	2
単純ヘルペス 1						1			1	2
サイトメガロ						1			1	2
ヒトヘルペス 6									2	2
ノ 口									647	647
未 同 定		1	1	5				2	20	29
計	2	1	10	11	1	112	3	6	762	908

3-4 ウイルス検出状況（ヒト由来、月別）

川崎市衛生研究所

年月 検出ウイルス	平成 16年	検体採取月												平成 17年 計
		1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	
インフルエンザ AH1												1	1	2
インフルエンザ AH3	90	10	21	2	1							4	7	45
インフルエンザ B	1	23	28										1	52
ポリオ 2					2									2
コクサッキー A16	10		2		1	3	1							7
コクサッキー B2											2			2
コクサッキー B3	5									1				1
コクサッキー B4								1			2			3
コクサッキー B5	3								3					3
エコー 6	6													
エコー 7	1													
エコー 11	1													
エコー 30	2													
エンテロ 71								4						4
ムンプス	1													
アデノ 2	1													
アデノ 3	6				1		3	3					1	8
アデノ 4	1													
アデノ 8	2				1				11	12	2			26
アデノ 11											1			1
アデノ 19	7	2								2	1			5
アデノ 37								1				1		2
アデノ 40/41												1	1	2
単純ヘルペス 1	1													
ノロ	4		2		8									10
ノロ	97	81	12	15	25	2	1				1	2	38	177
計	242	116	63	19	35	6	4	8	16	17	10	9	49	352

3-4 ウイルス検出状況（ヒト由来）

（平成17年 疾患別）

川崎市衛生研究所

疾患名 検出ウイルス	咽頭結膜熱	感染性胃腸炎	手足口病	インフルエンザ様	流行性角結膜炎	無菌性髄膜炎	その他	合計
インフルエンザ AH1				2				2
インフルエンザ AH3				45				45
インフルエンザ B				52				52
ポリオ 2							2	2
コクサッキー A16			7					7
コクサッキー B2						2		2
コクサッキー B3						1		1
コクサッキー B4						3		3
コクサッキー B5						3		3
エンテロ 71			4					4
アデノ 3	8							8
アデノ 8					26			26
アデノ 11					1			1
アデノ 19					5			5
アデノ 37					2			2
アデノ 40/41		2						2
ノロ		10						10
ノロ		177						177
計	8	189	11	99	34	9	2	352

3-5 ウイルス検出状況（ヒト由来、月別）

横須賀市健康安全科学センター

年月 検出ウイルス	平成 16年	検体採取月												平成 17年 計
		1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	
インフルエンザ AH3	23	1	2	12										15
インフルエンザ B		3	5	17										25
アデノ（型未決定）	2													
ノ 口	6	10												10
計	31	14	7	29										50

3-5 ウイルス検出状況（ヒト由来）

（平成17年 疾患別） 横須賀市健康安全科学センター

疾患名 検出ウイルス	感 染 性 胃 腸 炎	イ ン フ ル エ ン ザ 様	合 計
インフルエンザ AH3		15	15
インフルエンザ B		25	25
ノ 口	10		10
計	10	40	50

3-6 ウイルス検出状況（ヒト由来、月別）

相模原市衛生試験所

年月 検出ウイルス	平成 16年	検体採取月												平成 17年 計
		1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	
インフルエンザ AH3	3		2											2
インフルエンザ B		1	2	1										4
アデノ 3												1		1
アデノ 4								1						1
アデノ 8							1					1		2
アデノ 37	3				1			1				1		3
ノ 口	16	7												7
計	24	8	4	1	1	0	0	2	1	0	0	2	1	20

3-6 ウイルス検出状況（ヒト由来）

（平成17年 疾患別） 相模原市衛生試験所

疾患名 検出ウイルス	感 染 性 胃 腸 炎	イ ン フ ル エ ン ザ 様	流 行 性 角 結 膜 炎	合 計
インフルエンザ AH3		2		2
インフルエンザ B		4		4
アデノ 3			1	1
アデノ 4			1	1
アデノ 8			2	2
アデノ 37			3	3
ノ 口	7			7
計	7	6	7	20

4 病原細菌検出状況

4-1 病原細菌検出状況(ヒト由来、月別)

神奈川県

年月 菌種・菌型	平成16年		平成17年(採取月)												計		検出細菌構成割合 (%)								
	総数	うち海外渡航者	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	総数	うち海外渡航者									
			総数	うち海外渡航者	総数	うち海外渡航者	総数	うち海外渡航者	総数	うち海外渡航者	総数	うち海外渡航者	総数	うち海外渡航者				総数	うち海外渡航者						
腸管出血性大腸菌(EHEC)	118			1				6	6	36	28	19	2	3	2	103	14.9								
毒素原性大腸菌(ETEC)	60	6			2	1	1			2	1	45	6	3	2	1	59	6	8.5						
組織侵入性大腸菌(EIEC)			1														1		0.1						
病原血清型大腸菌(EPEC)	35	3	1	6	7		1	15	1	7	8	3	7		2	2	60		8.7						
その他・不明	6				2	2										1	3	2	0.4						
チフス菌	3													1			1		0.1						
パラチフス A菌	3		2	2				2						2	2		6	4	0.9						
サルモネラ 04群	15		1					1	1				1				4		0.6						
サルモネラ 07群	6			1	2	1	1	2	5		2	3	1				17	1	2.5						
サルモネラ 08群	5				1	1						1					2	1	0.3						
サルモネラ 09群	19				1			1		4	1				2	2	11		1.6						
サルモネラ 03,10群	2	1																							
サルモネラ 018群													1				1		0.1						
サルモネラ 035群													1				1		0.1						
サルモネラ群不明	1																								
エルシニア						1											1		0.1						
コレラ菌 01	6	1						1	1		1	1				1	1	3	3	0.4					
コレラ菌 non-01 & 0139	1									1							1		0.1						
腸炎ビブリオ	55								1	8	20	29					58		8.4						
エロモナス ハイドロフィラ	1																								
エロモナス ソブリア	1																								
エロモナス キャビエ											1						1		0.1						
ブレジオモナス											1						1		0.1						
カンピロバクター ジェジュニ	155		9	1	6	8	12	32	40	20	22	22	12	14	6	182		26.3							
カンピロバクター コリ	6										2		1				3		0.4						
カンピロバクター ジェジュニ/コリ	15																								
黄色ブドウ球菌	14						2	7	2	2	7						20		2.9						
A型ウエルシュ菌	26		1	5	24	28	6	14	9								87		12.6						
セレウス菌	2						1	4									5		0.7						
赤痢菌フレキシネリ	1	1											1	1			1	1	0.1						
赤痢菌ソネ	8	4		1	1		1	2	1	2	1	1		2	2		9	5	1.3						
レンサ球菌A群	28			2	3	3	3	5	2	1	1	1	1	5	3	27		3.9							
レンサ球菌G						1											1		0.1						
レジオネラ											1				1		2		0.3						
淋菌			1	1	2	1						1			2		8		1.2						
マイコプラズマ	4									3	4		4	1			12		1.7						
計	596	16	16	2	18	1	50	5	48	61	2	70	115	3	141	86	3	38	6	31	17	1	691	23	100.0

4-2 病原細菌検出状況（ヒト由来、月別）

神奈川県衛生研究所

年月 菌種・菌型	平成16年	平成17年採取月												計	
	総数	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	総数	うち海外渡航者
		うち海外渡航者	総数	うち海外渡航者	総数	うち海外渡航者	総数	うち海外渡航者	総数	うち海外渡航者	総数	うち海外渡航者	総数		
腸管出血性大腸菌(EHEC)	25					2	1	11	5	1					20
毒素原性大腸菌(ETEC)										3					3
病原血清型大腸菌(EPEC)	5			2		13		2	2	1		1		21	
パラチフス A菌	1														
サルモネラ 04群	4														
サルモネラ 07群										1				1	
サルモネラ 08群	1														
サルモネラ 09群	2					1		1				2		4	
コレラ菌 non-01 & 0139	1														
腸炎ピブリオ	26								7	24				31	
エロモナス キャビエ									1					1	
カンピロバクター ジェジュニ	20					2	8	10	2	5	3	8		38	
カンピロバクター コリ	4														
黄色ブドウ球菌	5														
A型ウエルシュ菌	23			24	28		8							60	
セレウス菌						1								1	
赤痢菌ソンネ	1														
レンサ球菌A群	8		1		2	4						1	1	9	
淋菌		1	1	2	1					1		2		8	
マイコプラズマ	4							3	4		4	1		12	
計	130	1	2	28	31	23	17	27	21	36	7	15	1	209	

4-3 病原細菌検出状況（ヒト由来、月別）

横浜市衛生研究所

年月 菌種・菌型	平成16年	平成17年採取月												計									
	総数	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	総数	うち海外渡航者								
		うち海外渡航者	総数	うち海外渡航者	総数	うち海外渡航者	総数	うち海外渡航者	総数	うち海外渡航者	総数	うち海外渡航者	総数			うち海外渡航者							
腸管出血性大腸菌(EHEC)	78			1		4	5	17	19	15	2	3	2	68									
毒素原性大腸菌(ETEC)	15	4				1		2	1	1	2	2	1	7	3								
組織侵入性大腸菌(EIEC)		1												1									
病原血清型大腸菌(EPEC)	12	1	1	6	3				3	1	2	1		17									
その他・不明	6				2	2							1	3	2								
チフス菌	3										1			1									
パラチフス A菌	2	2	2			2					2	2		6	4								
サルモネラ 04群	6					1	1							2									
サルモネラ 07群						2	5		2					10									
サルモネラ 08群	2			1	1					1				2	1								
サルモネラ 09群	3				1								1	2									
サルモネラ 03,10群	2	1																					
コレラ菌 01	6	1				1	1	1	1				1	1	3								
コレラ菌 non-01 & 0139								1						1									
腸炎ピブリオ	12							7	5	2				14									
カンピロバクター ジェジュニ	38	8				7	13	15	3	6	2			54									
カンピロバクター コリ										2				2									
黄色ブドウ球菌	7					7		2	7					16									
A型ウエルシュ菌			4			6	5	9						24									
赤痢菌フレキシネリ	1	1									1	1		1	1								
赤痢菌ソンネ	6	3				2	1	2	1	1	2	2		7	4								
レンサ球菌A群	7				2						1			3									
レンサ球菌G						1								1									
レジオネラ									1			1		2									
計	206	11	12	2	11	9	3	2	32	2	31	55	3	43	28	2	13	5	6	5	1	247	18

4-4 病原細菌検出状況（ヒト由来、月別）

川崎市衛生研究所

年月 菌種・菌型	平成16年 総数 うち海外渡航者	平成17年採取月												計			
		1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	総数	うち海外渡航者		
		総数 うち海外渡航者	総数 うち海外渡航者	総数 うち海外渡航者	総数 うち海外渡航者	総数 うち海外渡航者	総数 うち海外渡航者	総数 うち海外渡航者	総数 うち海外渡航者	総数 うち海外渡航者	総数 うち海外渡航者	総数 うち海外渡航者	総数 うち海外渡航者	総数 うち海外渡航者	総数 うち海外渡航者		
腸管出血性大腸菌 (EHEC)	2							1								1	
毒素原性大腸菌 (ETEC)				1												1	
病原血清型大腸菌 (EPEC)	5			1	1				3	2		3				10	
サルモネラ 04群	3	1									1					2	
サルモネラ 07群	4			2	1	1										3	1
サルモネラ 08群	2																
サルモネラ 09群	10								3	1					1	5	
エルシニア						1										1	
腸炎ピブリオ	6							1	1	8	3					13	
エロモナス ソブリア	1																
プレジオモナス										1						1	
カンピロバクター ジェジュニ	79	1	1	6	6	3	11	15	15	11	4	5	6		84		
赤痢菌ソンネ			1	1												1	1
レンサ球菌A群			1	1	1	1	1	2	1	1	1				4	2	15
計	112	2	3	11	10	4	14	24	28	16	7	9	9		137	2	

4-5 病原細菌検出状況（ヒト由来、月別）

横須賀市健康安全科学センター

年月 菌種・菌型	平成16年 総数 うち海外渡航者	平成17年採取月												計			
		1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	総数	うち海外渡航者		
		総数 うち海外渡航者	総数 うち海外渡航者	総数 うち海外渡航者	総数 うち海外渡航者	総数 うち海外渡航者	総数 うち海外渡航者	総数 うち海外渡航者	総数 うち海外渡航者	総数 うち海外渡航者	総数 うち海外渡航者	総数 うち海外渡航者	総数 うち海外渡航者	総数 うち海外渡航者	総数 うち海外渡航者		
腸管出血性大腸菌 (EHEC)	13								7	4	3					14	
毒素原性大腸菌 (ETEC)	45	2			1	1				44	1	1	2	1		48	3
病原血清型大腸菌 (EPEC)	13	2			1			2	1	2	1	1	2		2	12	
サルモネラ 04群	2																
サルモネラ 07群	2		1														
サルモネラ 09群	2																
サルモネラ 018群													1			1	
サルモネラ 035群													1			1	
サルモネラ群不明	1																
腸炎ピブリオ	4																
エロモナス ハイドロフィラ	1																
カンピロバクター ジェジュニ/コリ	15																
黄色ブドウ球菌	2																
A型ウエルシュ菌	3																
セレウス菌	2																
赤痢菌ソンネ	1	1				1										1	
計	106	5	1	2	1	1	2	1	9	49	6	1	7	1	2	80	3

4-6 病原細菌検出状況（ヒト由来、月別）

相模原市衛生試験所

年月 菌種・菌型	平成16年 総数 うち海外渡航者	平成17年採取月												計			
		1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	総数	うち海外渡航者		
		総数 うち海外渡航者	総数 うち海外渡航者	総数 うち海外渡航者	総数 うち海外渡航者	総数 うち海外渡航者	総数 うち海外渡航者	総数 うち海外渡航者	総数 うち海外渡航者	総数 うち海外渡航者	総数 うち海外渡航者	総数 うち海外渡航者	総数 うち海外渡航者	総数 うち海外渡航者	総数 うち海外渡航者		
サルモネラ 09群	2																
腸炎ピブリオ	7																
カンピロバクター ジェジュニ	18				2												6
カンピロバクター コリ	2												1				1
黄色ブドウ球菌					2			2									4
A型ウエルシュ菌		1	1					1									3
セレウス菌								4									4
レンサ球菌A群	13																
計	42	1	1		4			7					4	1			18

資料3 予防接種実施状況

資料出所：平成17年度健康増進課事業実績

*は、厚生労働省「平成16年度地域保健・老人保健事業報告」の統計表に横浜市分データの掲載がない対象疾病

1 ジフテリア・百日せき・破傷風（1期、2期）*

年度		区分	対象者数	接種者数	接種率
	11		人	208,531 人	%
	12			359,497	
	13			360,402	
	14			356,081	
	15		406,404	370,248	91.1
	16		248,183	213,180	85.9
内訳	第1期			189,808	
	第2期			23,372	

2 急性灰白髄炎

年度		区分	対象者数	接種者数	接種率
	11		159,110 人	163,413 人	102.7 %
	12		162,776	148,994	91.5
	13		163,048	166,398	102.1
	14		163,270	160,663	98.4
	15		166,461	176,184	105.8
	16		164,408	176,184	107.2
内訳	第1回		81,790	79,321	97.0
	第2回		82,618	96,863	117.2

3 麻しん*

年度		区分	対象者数	接種者数	接種率
	11		82,413 人	82,749 人	100.4 %
	12		82,606	79,161	95.8
	13		82,732	87,541	105.8
	14		82,608	83,311	100.9
	15		82,562	83,219	100.8
	16		50,241	47,498	94.5

4 風しん*

年度		区分	対象者数	接種者数	接種率
	11		196,014 人	120,259 人	61.4 %
	12		165,081	103,792	62.9
	13		158,305	76,102	48.1
	14		177,780	86,766	48.8
	15		131,082	94,257	71.9
	16		52,593	51,484	97.9
内訳	定期分		52,593	51,484	97.9
	経過措置分				

5 日本脳炎*

年度		区分	対象者数	接種者数	接種率
11			319,338 人	209,662 人	65.7 %
12			399,338	264,629	66.3
13			408,106	274,578	67.3
14			405,341	277,095	68.4
15			399,321	303,773	76.1
16			233,709	174,345	74.6
16年度 内訳	幼児初回接種 (1期初回第1回)		50,125	44,680	89.1
	幼児初回接種 (1期初回第2回)		50,007	43,838	87.7
	幼児 (1期追加)		48,785	37,646	77.2
	小学生 (2期)		44,664	31,262	70.0
	中学生 (3期)		40,128	16,919	42.2

6 インフルエンザ

年度		区分	対象者数	接種者数	接種率
13			1,196,075 人	315,562 人	26.4 %
14			1,254,544	423,682	33.8
15			1,356,327	546,471	40.3
16			1,423,230	614,617	43.2
内訳	65歳以上		1,416,376	613,119	43.3
	予防接種法施行 令で定める60歳 以上65歳未満の		6,854	1,498	21.9

資料4 感染症関係機関

機 関 名	所 在 地	電 話
横浜市衛生局保健部感染症・難病対策課	横浜市中区港町1-1	045(671)2463
横浜市鶴見福祉保健センター	横浜市鶴見区鶴見中央3-20-1	045(510)1827
横浜市神奈川福祉保健センター	横浜市神奈川区広台太田町3-8	045(411)7138
横浜市西福祉保健センター	横浜市西区中央1-5-10	045(320)8439
横浜市中福祉保健センター	横浜市中区日本大通り35	045(224)8332
横浜市南福祉保健センター	横浜市南区花之木町3-48-1	045(743)8241
横浜市港南福祉保健センター	横浜市港南区港南中央通10-1	045(847)8436
横浜市保土ヶ谷福祉保健センター	横浜市保土ヶ谷区川辺町2-9	045(334)6344
横浜市旭福祉保健センター	横浜市旭区鶴ヶ峰1-4-12	045(954)6146
横浜市磯子福祉保健センター	横浜市磯子区磯子3-5-1	045(750)2444
横浜市金沢福祉保健センター	横浜市金沢区泥亀2-9-1	045(788)7840
横浜市港北福祉保健センター	横浜市港北区大豆戸町26-1	045(540)2362
横浜市緑福祉保健センター	横浜市緑区寺山町118	045(930)2357
横浜市青葉福祉保健センター	横浜市青葉区市ヶ尾町31-4	045(978)2438
横浜市都筑福祉保健センター	横浜市都筑区茅ヶ崎中央32-1	045(948)2350
横浜市戸塚福祉保健センター	横浜市戸塚区戸塚町157-3	045(866)8426
横浜市栄福祉保健センター	横浜市栄区桂町303-19	045(894)6964
横浜市泉福祉保健センター	横浜市泉区和泉町4636-2	045(800)2444
横浜市瀬谷福祉保健センター	横浜市瀬谷区二ツ橋町190	045(367)5744
横浜市衛生研究所	横浜市磯子区滝頭1-2-17	045(754)9800
川崎市健康福祉局保健医療部疾病対策課	川崎市川崎区宮本町1	044(200)2441
川崎保健福祉センター	川崎市川崎区東田町8	044(201)3223
幸保健福祉センター	川崎市幸区戸手2-12-11	044(522)7318
中原保健福祉センター	川崎市中原区小杉町3-245	044(744)3271
高津保健福祉センター	川崎市高津区下作延274-2	044(861)3321
宮前保健福祉センター	川崎市宮前区宮前平2-20-5	044(856)3269
多摩保健福祉センター	川崎市多摩区登戸1775-1	044(935)3306
麻生保健福祉センター	川崎市麻生区万福寺1-5-1	044(965)5163
川崎市衛生研究所	川崎市川崎区大島5-13-10	044(244)4985
横須賀市保健所	横須賀市西逸見町1-38-11	046(822)4300
横須賀市健康安全科学センター	横須賀市日の出町2-14	046(822)4057
相模原市保健所	相模原市富士見6-1-1	042(754)1111
相模原市衛生試験所	相模原市富士見6-1-1	042(769)8348

機 関 名	所 在 地	電 話
神奈川県保健福祉部健康増進課	横浜市中区日本大通り1	045(210)4793
平塚市保健福祉事務所	平塚市豊原町6-21	0463(32)0130
鎌倉市保健福祉事務所	鎌倉市由比ガ浜2-16-13	0467(24)3900
藤沢市保健福祉事務所	藤沢市鵜沼石上2-7-1	0466(26)2111
茅ヶ崎保健福祉事務所	茅ヶ崎市茅ヶ崎1-8-7	0467(85)1171
大和保健福祉事務所	大和市中央1-5-26	046(261)2948
小田原保健福祉事務所	小田原市荻窪350-1	0465(32)8000
三崎保健福祉事務所	三浦市三崎町六合32	046(882)6811
秦野保健福祉事務所	秦野市曾屋2-9-9	0463(82)1428
厚木保健福祉事務所	厚木市水引2-3-1	046(224)1111
足柄上保健福祉事務所	足柄上郡開成町吉田島2489-2	0465(83)5111
津久井保健福祉事務所	津久井郡津久井町中野937-2	042(784)1111
神奈川県衛生研究所	茅ヶ崎市下町屋1-3-1	0467(83)4400
横浜検疫所	横浜市中区海岸通1-1	045(201)4458
東京検疫所川崎支所	川崎市川崎区東扇島6 - 10	044(277)1856
横浜検疫所横須賀出張所	横須賀市田浦港町1-49	046(861)6650
横浜検疫所三崎出張所	三浦市向ヶ崎8-48	046(881)3805
輸入食品・検疫検査センター	横浜市金沢区長浜107-8	045(701)9502
横浜市立市民病院	横浜市保土ヶ谷区岡沢町56	045(331)1961
川崎市立川崎病院	川崎市川崎区新川通12-1	044(233)5521
横須賀市立市民病院	神奈川県横須賀市長坂1-3-2	046(856)3136
藤沢市民病院	藤沢市藤沢2-6-1	0466(25)3111
平塚市民病院	神奈川県平塚市南原1-19-1	0463(32)0015
相模原協同病院	相模原市橋本2-8-18	042(772)4291
厚木市立病院	厚木市水引1-16-36	046(221)1570
神奈川県足柄上病院	神奈川県足柄上郡松田町松田惣領866 - 1	0465(83)0351